

東方風雷郷 ～Last Boy Story～

沼倉風太

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

現代・・・そこは常識にとらわれた世界。

そんな世界に生きる、一人の少年の話。

下総の端にある神社の次期神主は、中学校の帰り道に誘拐もとい幻想入りさせられ、その上偽りの能力を教えられて、現実と幻想の境界で生きていく。

それだけの話。

舞台は、飛行機や、新幹線は、庶民が使えなくなるほどに、差別が激しい世界。そんな世界を、変える少年とは、一体……。

お知らせ

・コラボは何時でも待っています。

・NBSDneer様制作の”自分自身が幻想入り”において、主人公がサブキャラとして登場しています。

良かったら、そちらもご覧ください。(YOUTUBE)

この作品は小説家になろうにも投稿していました。

目次

第一章 幻想入り

第一話「博麗の巫女と幻想入り」

1

第二話「白黒と闇」

7

第三話「魔理沙との弾幕勝負」

12

第四話「守矢の巫女と風神少女」

17

第五話「幻想の住民」

22

第六話「過去と自分」

27

第七話「幻想入りした概念とは」

31

第八話「雷神様との関係」

35

第二章「現想異変」

第⑨話「現実と幻想」

39

第10話「異変会議」10・25話「い

ざ、紅魔館へ」

43

第11話「紅き月と人形」

48

第12話「風士族としての証」

52

第13話「現代へ」13・5話「現代で」

57

第14話「激突！鹿島の神と神主」

62

第15話「出雲と出会い」

66

第十六話 「湖南の変化」	70	第25話 『夢の叫びとドレミー・スイー ト』	113
第17話 「激突!!物造大神」	75	第26話 「式神と雷神」	119
第18話 「失われたものと手に入れた 物（前編）」	79	第27話 東方黒幕戦	124
第十⑨話 「失ったものと手に入れた物 （後編）」	83	第28話 『風貼りの原点』（東方乗車録）	129
第20話 「雪と星」	87	第二⑨話 「愛しき諏訪は過去の罪へ と」	138
第21話 「作中の人物」	91	第2・⑨章 学校生活（クロスオーバ ーあり）	150
現時点の登場人物・能力集	95	第30話 EX 八雲黒	155
第22話 「覚悟と乱入」	101	一期分の後書き	155
第23話 『人妖としての覚悟』	108	第32話 「平和は少なき下総の端」	155
第24話 「伊勢と陰陽師」	108		

第3章「他世界ですか？」

第33話『神界ですか？』 | 165

第34話『神界探検①』 | 171

第35話『神界探検②』 | 176

第36話『夢想天成』 | 181

第37話「実年齢と力の年月」

186

第38話「歴史と記憶」 | 190

第39話「守矢神社の説教」 | 194

今年を振り替えて | 198

第4章「東方紺珠伝」 Legacy

of Lunatic Kingdom

m.
s

第40話「浄土の探査機」 | 202

第42話「湖上の秘密基地」 | 206

第43話「アポロ経路」 | 210

第44話「寂れの来ない町」 | 214

第45話「星条旗のピエロ」 | 218

第46話「俱に天を戴かずとも」

Pure Furies | 222

第47話「切り札はいつだって最悪」

226

第5章「神の裁きは幻想となりて」

第48話「酒！飲まずには居られない

！」 | 230

	第4⑨話「古き知恵は風と化する前編」	237
	第50話「古き知恵は風と化す後編」	242
	第51話「白紙のように白い女の子」	247
	第52話「妖女と下総の半人半妖」	251
	第53話「新人教育——世界に新たに 生まれし生命——」	255
第6章	とある下総の半人半妖	Th u
nder		ment
wind		
jer		
ment		
or.		
	第54話「久しぶりの学校」	260
	第55話「結界破りの天才少女と無力 干渉」	264
	第56話「学園都市」	269
	第57話「とある変○の風紀委員 《ジャッジメント》	273
	第58話「とある人物の自己紹介」	278
	第59話「とある庭師の半人半霊」	282
	第60話「とある不幸の男子高校生」	286
	第61話「とある魔術の強制干渉」	

290	第62話「とある	の戦闘理由	
294	第63話「とある東京の絶対建築		
298	第64話「とある右翼の秘密基地		
302	第65話「とある神主の絶対攻撃		
306	とある小説の人物紹介		
	第7章「国家特殊公務員のお仕事」		
310			
316	第66話「政府のボランテニア」		
320	第67話「舞浜発大阪宝塚行き086		
	861H		
323	第68話「第一京浜(国道2号線)」		
326	第69話「幻想に成れない物」		
330	第70話「人の能力を学習する程度の能力」		
335	第71話「阪神と弾幕」		
341	第72話「所でさクローンに霊力つてあるの?」		
345	第73話「学校七不思議―1」		

第 7 4 話 「学校七不思議―2」	351	第 8 1 話 「対宇宙空間迎撃装置―4」	377
第 7 5 話 「学校七不思議―3」	355	第 8 2 話 「モロクロの境界に立つ地蔵	382
第 7 6 話 「学校七不思議―4」	360	様」	386
第 7 7 話 「心の世界の住民の住民」	364	第 8 3 話 「紅霧異変」	390
第 7 8 話 「対宇宙空間迎撃兵器―1」	369	第 8 4 話 「春雪異変(東方妖々夢より)」	399
第 7 9 話 「対宇宙空間迎撃兵器―2」	373	第 8 5 話 「永夜異変」	406
第 8 0 話 「対宇宙空間迎撃兵器―3」	418	第 8 6 話 『間欠泉異変』	412
		第 8 0 0 1 E 話 「幻想の一時―1」	422
		第 9 0 話 「世界の基準点」	422

特別編

第9000C話「ブレインインフォ	427	第9600C話「ブレインインフォ	465
メーシヨンpart0	—	メーシヨンpart6	—
第9100C話「ブレインインフォ	430	第9002C話「交わりし世界	—
メーシヨンpart1	—	the beginning of the	—
第9200C話「ブレインインフォ	435	estory	—
メーシヨンpart2	—	第9102C話「紅魔の空間分裂	—
第9300C話「ブレインインフォ	440	Space operations and	—
メーシヨンpart3	—	ivision and fusion	—
第9400C話「ブレインインフォ	446	第9202C話「安房の小さき旅館	—
メーシヨンpart4	—	—	—
第9500C話「ブレインインフォ	457	Story end?	—
メーシヨンpart5	—	設定資料（主人公核のみ）	—
			490

設定資料（本作オリジナルその1）

500

メリクリ

510

第9003C 「公務員の意外なお仕事」

515

第9103C 「地下鉄異変」

521

第9203C 「自分を主軸とさせる程

度の能力(?)」

528

第9303C 「宴会」

533

第一章 幻想入り

第一話「博麗の巫女と幻想入り」

いつもの学校の帰り道、当然のごとく最終下校時刻ギリギリに出るために同方向の友人などはいないので一人で帰る。

「しっかし疲れたな。まさか、3送会の後にあれほど精神ダメージを喰らうなんてな。

皆あの無能装置に夢中なんだ。理論も設計図もない」

そう、独り事をいった。

「こっちに来ない？楽しいわよ？」

すぐに持っていた傘を強く握る。

その瞬間、スキマができ中から紫があらわれる。

「呼ばれて飛び出てじゃじゃじゃーん。ゆかりん20歳さつそと登場」

・・・。

紫が出てきた。

幻想郷は本当に有ったんだ。

「はい、現代に飽きた、能力者一人ご案内」

そして、紫は足元にスキマを開いた。

「せめて、能力ぐらいは」

地面から落ちる感覚がするのと同時に僕は気絶してしまった。

「あんた、いい加減に起きなさいよ」

うくん、眠い。仕方なく起きてみると、そこには・・・

博麗霊夢が立っていた。

!? 見間違えかな？

しかし、何度見てもそこにいるのは博麗霊夢だった。

「人の顔をまじまじと見ないでくれる？」

「あのを、もしかして博麗霊夢さんですか？」

「ええ、そうだけど」

!? 本物だとだとしたら、俺は幻想入りしてしまったのか？

いやいやちよつと待てよ確かに前に立っているのは霊夢だけど、同姓同名かもしれないな

いぞで？

「あの、夢想封印とかつかえますか？」

しかし

「同然でしよ、表に出てみなさい」

そう言われて外に出てみた。

「いくわよ『霊符 夢想封印』」

そして、大きなたまがでた。

僕はその玉に触ってみた

「!?触るとピチユるわよ?」

・
・
・

なんにも、無かった

「危ないじゃない」

そういつて、霊夢は弾幕を出すのをやめた。

しかし、本物だとしたら、ここは、博麗神社……

神社にはお賽銭。

同業者としても、参拝客としても。

そう思った俺はお賽銭をいれた。

(どうか無事に帰れますように)

「あら、お賽銭いれてくれたの？ 丁度ご飯も出来たし、食べる？」

「えっと、お願いします」

そして、朝食を食べ終えて。

「で、これから、どうするの？」

第一の問題だ、一日博麗神社にいるのも悪くないが……。せつたく幻想入りしたのだし観光でもしようか。

「とりやえず、人里にでも観光に行こうかと」

「そう、だったら人里はあっちね」

「え、一人で行くんですか？」

「そうに、決まってるでしょ」

「ところで、ずっと気になってるのだけど、あんた妖怪との混血でしょ？」

「!?俺が妖怪との混血？」

「クオーター? いや、量だとハーフ？」

「もしかしてあんた半人半妖？」

「・・・わかりません。」

正直、僕が半人半妖だとは信じなれない。

「そういえば、あんたの名前聞いていなかったわね」

「あ、坂上 湖南 といいます」

「そう、湖南君ね」

正直、君付けはやめてほしい。いくら、若く見えても、14だから。

僕的能力・・・そういえば昨日、BB・・・

「また、人の事をBB A って考えてたでしょ？」

颯爽と紫が現れる。

「取り合えず霊夢は、結界が歪んでる為修復する必要があるがあつて暫く外に出られないのよ。」

それと『あらゆる理論を組み立てる程度の能力』よ」

「だけど、紫、この人外来人よね？（まさかね？）」

「そうだけど、最近は能力を持ったやつが多いのよ」

そのまんま、霊夢とBB……もとい紫は話し込んでしまったので、外にでてみた。

「よう霊夢、遊びに……この妖気お前か？」

「取り合えず、くらえ『恋符 マスパースパーク』」

その発想はおかしい、だけど今は

『理論 弾幕が消える日』

と、さつき作ったスペルカードを宣言して、そして次の瞬間、マスパが消えた。

第2話「白黒と闇」

知らない天井……。

博麗神社の部屋の中か……。

取り合えず布団を戻して居間にでも行ってみるか。

「やっと、気がついたみたいね」

「まったく、マスパを消したかと思ったら、ピチュリやがったからな」

「魔理沙がいきなり、マスパを撃つからでしょ」

「ま、とりあえず、人里に行かないと」

「? なんで人里に行くんですか?」

もしかしたら、一緒に行けるかもしれない、そう思っていた。

だけど、誰かが、行かないほうがいいって言った気がした。

「アリスが人形劇するから、荷物運ぶのを手伝うだけ?」

お、湖南も一緒に来るのか、別にいいZ E」

「ありがとうございます」

僕は支度をしようとした、が、いつも持ち歩いている鞆がないことに気がついた。

「そういえば、昨日、下校途中に幻想入りしちゃったからな。」

「そう、思つて、諦めようとしたが、服が制服の事に気がついた。」

「あの、着替えとか無いですか?」

「しかし、博麗神社だ無いだろうと思つたが、」

「取り合えず着替え程度はあるはよ?」

「すいません」

俺は部屋を出て着替えた。

「よし、準備できたな? それじゃ人里に行くか」

「そういつて、魔理沙は神社から出て行った。」

「しかし、魔理沙は神社を出るとすぐに箒に乗った。」

「そういうえば、湖南は空を飛べるのか?」

「飛べないわけではないが、短いぞ?」

「しかし、魔理沙は」

「よつと、意外に普通だな」

「魔理沙はそう言つて、先に行こうとした。」

「待つてくださいよ、魔理沙さん」

「おっと、悪い悪いゆっくりといくかと、ゆっくりと飛んでいった。」

しかし、魔法の森に入ってから数分、突然として急に力が抜けていった。

そして俺は落ちた。
どて

幸い俺は木の上に落ちていた。

「おっと、大丈夫か？」

大丈夫な訳がない。

しかし、木の上にならずと居るのもあれだし、とにかく木から降りた。

「君は食べていい人間なのか？」

いやいや、食べていい人間なんて居るわけが無い。

「だめに、決まっているだろ」

このフリーズとなると、ルーミアしか居ない。

「君のせいで朝ご飯が逃げたのだー」

だから君をいただくのだー」

しかたない、こうなったら意地でも逃げるしかない。
そう思った、俺は逃げようとした。

「逃がしは、しないのだー『闇符 デイーマケインション』
いきなり弾幕か、しかも苦手な暗闇か。

そんな事を考えていると右足に弾幕をかする。

「くそ、湖南とルーミアがどこに居るのかわかんないぜ」

魔理沙が助けようとしているのがわかった。

しかし、今はそれ所じやない。

俺は、鞆の中にいつもいれている六角石風流剣をだしスペルカードを発動させた。

「スペルカード『剣符 風切残刀』！」
かざきりざんどう

しかし、ブレイズし闇を半分ほど消した所でスペルブレイク。

『闇符 ナイトバート』

『風流剣 瞳風雷』

弾幕がぶつかり激しい爆発が起きる。

『恋符 マスタースパーク』

魔理沙がマスパを撃ってくる。

応戦のつもりで撃ったんだろうが、ルーミアと一緒に巻き込まれた。

第3話 「魔理沙との弾幕勝負」

足に痛みが流れ俺は眼を覚ました

「あ、やっと起きたわね」

眼を開けると目の前には霊夢がいた。

「あんた接近戦はだめなのね？」

俺は立ち上がろうとすると、左足に痛みが走る。

俺は眼を足にやる

やはり、左足には傷痕があり、その近くには痣が出来ていた。

「ま、とりあえず魔理沙が運んできてくれたけど、当分の間は無理しないで、博麗神社はくれいじんじやにいてね」

「え、暇なんですけれど」

「それじゃ、スペルカードでも作ってれば？」

紙は机の上だから」

そうして、スペルカードを19枚つくった。

そのあと、霊夢とスペルカードルールの確認をした。

「霊夢く、取り合えず持つてきたぞ」

魔理沙がなんか怪しい茸を持って戻ってきた。

「ねえ、魔理沙、弾幕ゴッコこつこやんない？」

「!?、駄目駄に決ま目つてるぜ」

でも、霊夢は一瞬迷った顔をして

「せれに本来は外に戻さないといけないだけでも、一回やってみるのもアリよね。

魔理沙、相手をしてあげて」

「わかった、やろうぜ」

こうして、僕と魔理沙との弾幕ゴッコこつこが始まった。

「使用スペルカードの使用スペルは5枚、時間一杯 始め」

霊夢が開始を宣言した。

「スペルカード『魔符 ミルキーウェイ』（風雷 雷玉）」

俺の放った弾幕は、見事にミルキーウェイと相殺していた。

「くそ『恋符 マスターズパーク』!」

序盤からマスパを撃ってきやがった。

しかし、こんなので俺は負けい。

『雷砲 直流電磁誘導砲』

(魔理沙の心の声：あいつマスパみたいなのを撃ってきやがった

しかも、妖力を感じる)

しかし、案の定お互いかわし合った。

『風流剣 瞳風雷』

しかし、1分間に五発の大玉から小弾と雷がは分離していく。

一応、神術の試験も兼ねてやってみたけれども、結果は上々かな?

「こんな弾幕、薄いぜ『光符 アースライトレイ』」

しかし、余裕で避ける。

『活線 列車で行く日本一周の旅』

先日、東方弾幕目録に投稿された、東方地底電の^{3000系}大曾根名城の弾幕を参考にしてみた。

「おい、何でよそれは、避けようじゃが無いじゃないか」

その通り普通にやろうとすると無理だ。

しかし、ルール通りに放ったので避けれる。

「わかってぜ、答えは上だ！」

正解だこの弾幕は上で避けられるが、

「終わりだ、『雷剣 風切残刀 雷』」

「!? このために、わざわざ、上に出したのか!？」

「その通り」

しかし、このスペルカードは予想もしなかった形で破られてしまう。

「マジックミサイル」

お互いのスペルカードがあたり、引き分けになった。

「それじゃ、準備が終わったから帰りましょうね」

霊夢が鳥居の横に立ちながらそう言ってくる。

俺は帰り際、気になって居た事を聞く。

「俺に此所まで親切にする理由は何だ？」

霊夢はため息を付きながら

「別に、賽銭を入れてくれたからよ。

それじゃ、さようなら」

鳥居の横に結界の穴を開けて外に帰れるようにしてくれている。

「それじゃ、帰るわな」

俺は、結界の穴を通り外に出ようとした。

「？」

しかし、見えない壁にぶつかり前に歩けない。

「あれ、可笑しいわね？」

そう言いながらも一回試すように合図をしてくる。

「？」

しかし、同じように外に出ることが出来ない。

「とにかく明日やってみましようね」

そう、言っただけで結界を閉じてしまった。

第4話「守矢の巫女と風神少女」

俺は、ふと目が覚めてしまい、寝付けなくなってしまった。
仕方なく布団をしまつて外に出た。

「さ、さむい」

流石の俺も本音が出ってしまった。

部屋の外に出て廊下を歩き適当に朝風に当たろうとする。

「あら、早いはね。もう少し寝ててもいいのよ?」

部屋から霊夢が出てきて眠そうに言う。

「目が覚めちやて閉まつてな」

「そう・・・」

だけど暇だ。

俺は外で弾幕の練習だもすることにした。

外に出てみると誰もいない。

今使っているスペルカードすべて出してみた。

「しかし、皆どうやって飛んでいると言うのだろうか?」

しかし、色々考えて見るが、全く思い出せない。

朝食を食べた後、色々試したいことができた言われ、取り合えず外に行けと言われてしまった。

「そうね、守矢神社でもいってみたら?」

色々提案されたが、最後の一つが一番オススメらしい。

「取り合えず、言ってみますかね。」

処でどうやって行けと

俺は根本的な問題を突きつける。

「空を飛べは?」

「いや、どうやって長く飛べと?」

「気合いで」

あのな、気合いで飛べれば筈とか要らないだろ。

「無理」

「頑張れ☆」

略。

と言う名の手抜き(おい

15分後守矢神社

「何か嫌な予感がする」

「神奈子様、変なフラグを建てないで下さい」

ドコン!!

「て、あれ？」

「何か落ちましたね」

「ああ、ちよつと見に行こう」

一方、その頃湖南は

ドコン!!

「やっべ、減速するの忘れた

つか減速とかどうやるのこれ」

俺はそのまま守矢神社の近くに落ちた。

けして境内ではないから。

「つちつて思つた奴個人的に死刑な。」

「あの、大丈夫ですか？」

ふと、上の方から女の子の声が聞こえた。

「隊長！」

「足首を挫きました！」

「デスヨネー。」

「つてそうじゃなくて取り合えず看護を」

「頭を上げるとそこには、早苗(?)の顔がある。」

「取り合えず、さつき博麗に言われた事でも確かめてみるか」

「そう言つて足を抜き腰をかける。」

「？」

「いやな、高速回復が出来るかと思つて。」

「つて熱っ！」

「あれ、足が戻つていく」

「こんな物だろうな。」

「それと、さつきからジロジロ見るの辞めてくれるか」

「え？」

あつ、すみません。

懐かしい感じがしたのでつい」

「？」

懐かしいとは一体なんだろうか…？

「取り敢えず様子を見ないと行けないので付いてきてください」

そう言つて俺の右手を掴んで境内に入る。

「恥ずかしくないか？」

俺はふと思つた事を早苗に聞く。

「そんな事よりも足の怪我です！

私だつて本当はこんな事をしたくないんですよ」

そう言つて本殿横にある扉から本殿に入らされる。

「取り敢えず神奈子様、諏訪子様、今戻りました」

第5話 「幻想の住民」

「とにかく、どうしてこんな事になったんですか！

さつき、近くに突っ込んだ事で早苗さんから、説教を受けている。

正直、めんどくさい。

「いやな、博麗から時間が必要だから適当に潰しておけと言われてな」
「だからって……。」

「そういえばあなたの名前とか聞いていなかったですね」

切り替え早っ！

まあいい、今は質問に答えるのみしかないな。

「俺の名前は、坂上湖南だ。」

「湖南で良い」

「そんじゃ湖南さん、どうして突っ込んだんですか？」

えっと、それは……。

割合

「それで結局、あなたは何者なんですか？」

「えっと、なんて言えばいいのかな？」

普通の中学生で、博麗曰く半人半妖で、神主候補で・・・」

「!?外の、神主はどんな仕事をするんですか？」

「この質問は・・・。」

「つて、文!？」

「どうもです。何時も清く正し射命丸 文です。」

「ずっと、あなたの事、つけていました」

「あのな、人にいきなり取材を申し込む前にアポを取るものだろうが」
「わかっています。」

「それで、外の世界の神主はどういった、仕事をするんですか？」

「じゃ、答える必要は無いよな？」

「そこをどうにか」

「はあ」

「ありがとうございます！」

答えるとは言っていないんだけれどな仕方ねえ。

「それで、あなたは本当に何者ですか？

能力とか教えてください」

「まったく仕方ないな。」

俺の答えらなる範囲ならばな」

俺はちやつかり用意しているネタ帳を睨みながらそう言う。

「そんじゃ、まずは何で幻想郷に居るからだな。」

と言つても紫にいきなり誘拐された。

昨日帰ろうとしたけど結界に省かれたから原因を探っている間に時間をつぶせと」

「また、いつものパターンですね。」

まったく、往復するだけで時間が潰せるからって来られても信仰が集まらないから意味が無いんですよね」

「はあ」

俺は此処でため息を付く。

「溜息を付くと幸せが逃げますよ」

「あのな、信仰というものは普通になっているだけで増えていくものだから。」

もし、増えないのであれば東風谷、お前の勧誘がしつこいだけじゃないのか？

「そこまで言われて渋々信仰しても意味が無いぞ」

「いやいや、神菜子様がそう仰っている訳でして」

と言う事は此処の連中はすこし常識が足りなかったみたいだな。

「まったく、そもそも此処の神々は常識が足りないだよ」

「そんな事を言われてもこの幻想郷では常識に——」

「それ以前に外に居たときから常識が足りてないんだよ」

俺は東風谷の言葉を遮る様に言う。

「もし、もう一度会うことがあれば、その時に何が足りなかったか聞くから、そのときまでに答えを用意しておけ」

俺はそう言つて立ち始める。

「あの?」

「あんまりゆっくりしていると後がやばいんだ、話はそこそこにな」

そう言いながら神社の外に出る。

「まだまだ話が足りていません」

そう言う東風谷の声が背中に掛かる。

しかし、幻想に触れすぎると自らも幻想になってしまう。

そう言う理由があるのであまり幻想郷に長居はしたくない。

幻想郷に行きたかったのにこの行動では、本当に何をしてるんだ俺・・・。

第六話「過去と自分」

文の取材を適当にあしらえ頃合いを見て守矢神社を後にする。行きは力に任せて適当に飛んで行つたが帰りは歩いて帰つてみる。

天狗の里を避けるように河童の沢まで下りてきた。

「うん？あ、君、そうそうそこの君、ちよつと、空いている？」

「俺の事か？」

「そうそう、あのさ、新しいスペルカード作つただけで相手に相手になつてくれない？」

「別にいいけど？」

「そんじゃ、こつちの方に来て」

そういわれ俺は声のする方に行った。

そこに居たのは、河城だった。

「そんじゃ、ただただ、試し撃ちじゃ詰まんないから、弾幕ごっこ、といこうか。

君は、弾幕でせる？」

「うん、だせるけど?」

「そんじや始めようか。使用スペルは私は4枚君は八枚でいいよね?」

「そんじや始め!!」

通常弾幕をだしあった。

「スペルカード『河童 ノビールアーム』」

「スペルカード『劍符 風切残刀』」

おたがいの弾幕が、相殺していきどんどん消えていく。

「やるねそんじや『漂溺 光り輝く水底のトラウマ』」

正直思出し出したいくない光景だあの時と同じに見える。

『理論 弾幕が消える日』

あわててその弾幕を消した。

「ひゅい!?弾幕が消えることがあるなんて。

そんじや、今回の主役スペルカード『激流 狭い川の鉄砲水』

そう唱えた、にとりの周りが、一気に泥水を扮した弾幕に埋もれかけた。

あの光景と同じ、僕のために、自分の命まで犠牲にし・・・。

とにかくこの量はさげれない。

多少あたってても早いから無理だ。

圧縮……密度が高すぎて無理だ。

どうしよう。

そうだあのスペルがあつた！

「スペルカード『風符 風中同化』」

そして、にとりの近くに移動し

「スペルカード『風流剣 瞳風雷』『成長 一つの種は大樹に成』」

スペルカードを二枚連続で使い五発しか出ない瞳風雷を増やしまくった。

さけきれない弾幕の量はにとりを直撃した……。かの様に見えた。

「やるねく盟友、でもそう来なくちや、スペルカード『水符 河童のポロロツカ』」

奥の方から雨粒の様に迫ってくる弾幕。

どうやら雨をイメージさせて作ったようだ。

慌ててにとりとの距離を取り、次の行動の準備をする。

「スペルカードじゃないけど別に構わないよな？」

『我が衣に秘めし先人の知識をここに表し、天の意識をここに再現する。』

——風水龍波——』

「ひゅい!？」

弾幕が迫ってくるのにきずかなかつたにとりに大量の弾幕が当たった。

「私の負けだよ」

にとりは、負けたことを、認め、弾幕ごっこは終わった。

「ごめんね巻き込みじゃって」

「いやいやいいよ別に」

こうして俺は河童の沢を後にした。

第7話「幻想入りした概念とは」

ところで何で俺が能力を使えるのかを考えてみる。

確かに幻想入りする前から神術は使えていた。

別に俺は神社の血筋以前に拾い子であったがなぜか才能はあった。

小1の時に神への依頼であるが天候の操作は可能になったし。

小4の時には自分で神術の仕様が出来るようになったし、弾幕っぽいものは出せるようになった。

その時からであろうか、自分の成績が急に上がり学校中の生徒から反感を買うようになったのは。

多分、半人半妖はここから来ているのであろう。

でも能力の風雷を操る程度の能力はわかる。

でも、あらゆる理論結界を操る程度の能力は何だ？

俺みたいなやつが二つも能力を持つているのか？

それとも、風雷を操る能力は理論を応用していました。

何て言うのか？

いや、その方が説明が尽きそうだな。

所で、あいつらは何をしているのであろうか？

急に神社を空けてしまつて居るし、社務所会の皆さんでやつてくれるんだろうか。

俺が居なくても大丈夫だろうか？

そんな事が浮かんでくる。

でも、今一番気になるのは……。

何故博麗は、賽銭もしていない俺を一晩布団の中に入れてくれてたんだ？

こつちの方が気になる。

しかし、神社に倒れていたから。と言う理由以外思い浮かばない。

多分そうであろう。

いや、そうであることを祈る。

「風渡雷神様、おりますか？」

ふと言葉が漏れる。

今まで一人を好んでいたのに、なぜか寂しい。

幻想入りすれば、いろいろ素敵な事があるとも思っていた。

しかし、ふたを開けてみれば現実とはあまり変わらない。

と言うか、逆にひどくなっている。

妖怪の山を下りてくる時ですら天狗一匹すら出てこなかった。

と言うか文すら見なかった。

これはいったいどういう事なんだろうか。

この幻想郷で一体、何が起きてるだ？

「こちらの方を見ていると化学的合成食品が一切見られません。

やはり、自然食品は幻想入りして居ると見て間違いはないのでしょうか」

1990年代の初頭に起きた食品危機フードシヨック、貧困層が相次いでね上がる食品に対して満足な収入を得る事が出来ず社会暗殺死が社会問題となった年である。

この年、日本では人工食物錬成装置が登場し、有機物から食物ブロックを生成するようになり食物供給率は急激に回復していった。

しかし、これの人体に関する健康問題が出てきた。

これの錬成に当たって工場製の野菜が配合されていたがこれには雌性滅滅の遺伝子を持つ物が使用されていた。

工場として収穫・加工するのに勝手に増殖さえれるのは困るので雄しべが発現しない様な遺伝子を持つ物が使用された。

結果として人体に悪影響を与えるだけの食品となってしまうが、当面の間自然食物供給率の不足分を補うために日本中に流通した。

結果として、ただでなくても分母数が少ない男性に対して更に生殖能力を下げる結果となった。

現在は少子化の問題は貧困として低収入層に対して消費規制が引かれたが、それは奨学金とかを考えないものであった。

奨学金は返済不要のはずであるが、日本においては学生ローンと同異議で使用されているようだ。

第八話「雷神様との関係」

(さつそくだが、湖南の夢の中)

ここは、理想の街。

みんなが、争いなく生活している。

こんな街の神社にいつも、僕は、いた。

ただ、何にもすることなく。

ただただ、風景を眺めて、一日を過ごす。

そんな、ことができれば。

現代なんて、重いもの、いらないのかもしれない。

そんなところに住むのが、僕の夢だった。

叶いもしない、夢だった。

だけど、今日は、いつもとは、違った。

突然、周りが、まぶしくなると、目の前には、一人の、男の人が立っていた。

「私が誰かわかるか？」

その、男の人は質問してきた。

「ただ、僕は、そんな人、知らない。」

「いいえ、わかりません」

男の人は、一瞬だまって、こう言った。

「お前は、特に知っているだろう」

「まさか、風渡雷神様!?!」

まさか、この人が、神様? 確かに、人っぽい神様はいるけど、(神奈子と、諏訪子) 本当に、神様なのか?

「私が神か不安なのかも知れない。だが、一つ言っとく。お前と、私は繋がっている。それだけだ。何か聞きたい事とかあるか?」

まさか、雷神様と、僕が繋がっている? 確かに、神社に来る人が多いと、元気がでるけど……。

「あの」

「なんだ?」

「雷神様の力とは、どういった、物なのでしょう?」

「これだけ、聞ければ、あとは、大丈夫かもしれない。」

「私の力は、地球を壊せる物だが、そこまで、行くには、たくさん、信仰が必要である。信仰、つまり、皆が信じる思いが、力なのだ。私とお前が、繋がっていつことだが、そ

れは、お前の二つ目の能力『風雷を操る能力』と関わってくる。

代々、坂上家では、風使族として、風雷を操る事が出来る、私の力を借りてきた。

しかし、私の力を借りていくうちに、私とお前達には、つながりができてしまった。

そして、お前とは、直接的な繋がりになってしまった。

なぜ、みな、命を投げ出してでも、お前を、守ったかと言うと、お前が、世界を変えるからだ。

お前と、同じ世代のやつは、このことを知らない。

だから、変わっているお前を、虐めた。

隆郎さんからの手紙は、やつが導いた答えの一つかもしれない」

そんな、僕が、あの隆郎さんから、そんなに、心配されてたんなんて。

それに、僕が、雷神様と直接繋がっている？

僕は、理解できずに頭が、大困難した。

「最後に、一つ、お前に渡す物がある」

そういつて、雷神様は、僕に、三枚のカードを渡し、消えて行った。

「はあ、なんだ、夢か・・・」

僕は眼が覚めて、布団から起き上がった。
しかし僕の手は、三枚のスペカを握っていた。

第2章 「現実異変」

第⑨話 「現実と幻想」

「夢じゃないのか・・・」

「どうしたの？」

「いや、霊夢さん、このスペルカードに、見覚えあります？」

「このスペカはないはね」

「そうなのか、やっぱり夢じゃないのかな？」

「だけど、あの街は、実在するわけ、ないし、

「だけど、なんで、このスペカを持つてるんだらう？」

「そうですか」

朝食を食べてから、紅魔館にいこうとした。

「あ!?!今日は外に出ないほうが、いいわよ?」

「え、何でですか?」

「そりゃ、今日、雪が、すごいよ。昨日の夜から、すごい降っているのよ」

「そうですか・・・」

僕は、外に出た。

すごく、強く、雪が降っていた。

だめだこりゃ。

雪が強くて、とてもじゃないけど、飛べないな。

そう思い、僕は、神社の中に、戻った。

「すつこい、雪の量ですね」

「そうでしょ？」

その時、

「よう霊夢、コーリンの所で、やっべい新聞をみつかたんだぜ。ちよつとみてくれ」

そういつて、魔理沙は、一つの新聞を出し、机に置いた。

《東京で異常な程の大雪、首都機能麻痺》

昨晩から、日本中に見て、突如大雪が降り出し、朝5時現在東京都中央区に見て、25cmの降雪量を観測。このため、首都圏の高速道路、空路は、閉鎖。鉄道も、通常時の70%のでの運行となっており、首都圏の、学校は臨時休校。企業は、臨時休業となり、東京の首都機能は、麻痺した。また、この大雪で、東京23区内で、48000戸が停電。

8000世帯との連絡がとれず、安否の確認を急いでいる。

「!?東京で25cmの大雪!?まじか!」

「文文。新聞です!遅れてすみません!」

文は新聞を、置いて去っていった。

なにになに?

《幻想郷中で大雪、異変か?》

「まじか、こりや、異変だな」

「そうね。だけど、現代まで、異変の影響がでるなんて。こりや大きい異変ね。みんなを集めて、会議しないと」

「わかったぜ、そんじゃ皆をよんでくるぜ」

そういつて、魔理沙は出て行った。

「あんた、初めての異変だし、これを、持ってなさい」

そういつて、霊夢は、お守りを渡した。

「ボム一個分しかご利益ないけど、ないけど、ないよりはましでしょう?」

「ありがとう」

とりあえず、博麗神社のお守りももらった。

「とりあえず、神社の周りを除雪してくれる?」

「わかりました」

そうして、博麗神社の周りを除雪し始めた。

だけど、どかしても、また降ってきりがなかった。

そうして、いちごっこを繰り返す事1時間。

みんなが集まってきた。

「みんな、集まったはね。そんじゃ、今回の異変について・・・」

こうして、博麗神社で異変の会議が始まった。

第10話「異変会議」10. 25話「いざ、紅魔館へ」

「そんじゃ、各地の状況報告」

霊夢がそういって、みんなが一人ずつが報告し始めた。

「まずは、紅魔館から、咲夜お願い」

そう言われて、咲夜は、話し始めた。

「まず、紅魔館のまわりで、30cmの積雪」

「そう、ありがとう。そんじゃ、永遠亭」

次に、優曇華がたった。

「永遠亭周辺で50cmの積雪」

結構続いたので、割合（めんどくさい事は内緒）

「それで、今回の主犯に心当たりは、あるかしら？」

「・・・」

みんな、黙ってしまった。

「レティ・ホワイトロックの仕業、じゃないさそうですし・・・」

「そうね、ありがとう。何か、進展があったら報告するとゆうことで、今回はお開きにし

ましょう」

こうして、異変会議は、あつけなく、終わった。

10. 25話「いざ、紅魔館へ」

「あの、湖南さんでしたっけ？」

そういつてきたのは、咲夜だった。

「はい、そうですけど？。どうかしました？」

「お嬢様が、お眼に懸かりたいと言って言っていました、よかったら、この後、紅魔館に来ていただきたいのですが、宜しいでしょうか？」

なるほど、レミリアが合いたいと、ま、大図書館に行くついでに、行くか。

「いいですけど、どういった、内容で？」

「それは、お嬢様からの御口から聞いてください」

「そうですか・・・」

「そんじゃ、私は先に行っています。the world」

やっぱり、時間を止めて行くか。

「・・・?なんで時間停止しないの?」

「あつ、やつぱり、僕の周りじゃ、時間は止まんないのか・・・」

「?どういう意味かしら?」

「僕の周りでは、世界の理論を越えたことは、なぜか、起きないんですよ」

「なるほど、興味が沸いたわ。じゃ、一緒に来てくれるかしら?」

「いいですけど。霊夢さん、ちよつと、行つて来ます」

すると、霊夢は、

「いつてらっしゃい、その代わりに、明日の夜までに帰るのよ?」

「わかりました」

こうして、咲夜さんと僕は、紅魔館に行くのであった。

その、道中。

「あなたの周りで起きないことって、どんなことかしら？」

「時間停止、時間の流れが変わる、とか、絶対に変えることの出来ないものです」

「私の能力、ほとんど、使えないじゃないの」

「そうなっちゃいますねwww」

そこで、紅魔館の前。

「相変わらず、美鈴は寝ているのねまったく」

こういって、咲夜さんはナイフをなげた。

こんな感じに……。

美	+	+	+	+	+
鈴	+	+	+	+	+
夜					
咲					

……。美鈴は犠牲になったのだ。

僕は、合掌した。

「ようしやないですね」

「自業自得ですから」

そういつて、僕は美鈴の横を通った。

第11話 「紅き月と人形」

いま、僕は、咲夜さんと一緒に紅魔館に来ていて、2階のレミリアの部屋の前に、入る。

「お嬢様、ただいま、戻りました。ついでのに、例の少年をつれてきました」

「そう、咲夜、ありがとう。入っていいわよ」

そうして、レミリアの部屋に入ってしまった。

レミリアの部屋には、王様椅子や、大きな、ステンドグラスが、あった。

(イメージ違ったら、ごめんなさいby作者)

「よく、来てくれたわね、湖南。さっそくだけど、私達と戦ってくれるかしら？咲夜、お願い」

はい？僕と、レミリア、咲夜と戦う？無理でしょ？

「すみませんお嬢様、この子近くだと、私は、ほとんど、無力ですし」

「そう、咲夜。それじゃ、私一人でやるわ。湖南準備はいいかしら？」

えっ、早い

「はい、大丈夫です」

「そう、それじゃ、咲夜、合図を、お願い」

「わかりました、それでは、はじめ!!」

「スペルカード『天罰 スターオブダビデ』（終結 終焉結界）」

レミリアと戦うのは、いやなので、結界をはった。

「!? 結界!?!」

「終了（笑）」

こうして、レミリア戦は、たった1分でおわった。

「お姉さまばかりずるい!」

「フラン、今、お客様をおもてなししているのよ。あなたは、自分の部屋でも行ってなさい」

「い」

はあ、やっぱりこうなるんだろうな。

「ねえ、その君、一緒に、アソボ」

げ、フランに遊ばれるとか、絶対いやなんですけど、

しかも、フラン、めっちゃ怖くなってるし、

「えく、面倒くさい」

「ソウイワズニ、アソボ」

「しかたがないなく、終焉結界」

「ヤツパリ、オニイサンモワタシヲトジコメチャンダ。

ヤツパリ、ワタシハ、イラナコナンダ。

コンナコトヲスル、オニイチャンハ、ワタシノテキ。

テキハ、コワレチャエ！」

「やれるものなら、やってみる」

しかし、終焉結界の目はこのスペルカードであり、また、能力によつて、直接触らないと、結界は解けない。

だから、きゅつとしてドカーンも出来ないのです、フランを、冷静になるまで、隔離することが、できるのだ。

「?あれ?なんで私、こんな所に、いるんだろう?さてと、きゅつとして出よう。

・・・?なんで、出来なんだろう?」

「フラン!戻ったのねよかった。湖南、結界を解いてくれる?」

「わかった」

そういつて、僕は、結界を解き、

レミリアとフランは、抱き合った。

「フラン、心配したのよ?」

「ごめんなさい、お姉さま」

「ねえ、湖南、この異変が終わったら、フランの執事に、なんない？」
絶対、嫌だ。

「申し訳ありません、いつ帰る分かんないので、断らせていただきます。
「そう、残念ね」

第12話 「風土族としての証」

あのあと、大図書館で、本を、数冊（理論とか、力の働き）読み帰ろうとした。

「それじゃ、帰りますか」

「申し訳ありませんが、もう、夜でして、今お帰りなるのは、危ないかと」

僕は、腕時計（チエンジウオッチャー）を見た。

そうしたら、19時を指していた。

「確かに、夜は、危ないな」

「ですので、今日は、お泊りして頂いて、翌朝、帰るといふことは、どうでしょうか？」

「そんじゃ、そうすよ」

「そうですか、20時ほどに夕食が、出来るので、それまでに、二階、食堂まで、来てく
ださい」

そういつて、咲夜は、キッチンへと、行った。

「そんじゃ、客室で、過すごしてますか」

僕は、客室へと、向かった。

それで、夕食後、僕は、浴室に、向かった。

流石に、男のほうも、あるよね。

.....。

なんで、共用なんだ？

僕は、男ですよ？

共用なんて○熊に思われちゃんじゃん！

「えっと、先客は.....いないと、そんじゃ、『終結
終焉結界』」

僕は、結界を張り、ゆつくりと、湯船に入った。

それで、風呂上りつと.....。

「あつ、着替え.....」

僕は、あろう事か、着替えを、忘れてしまった。

しかし、棚には、着替えが入っていた。

「?おつかしいな?たしか、忘れたはずなのに・・・。ま〜いつか」

そうして、僕は、着替え、客室に、戻った。

ちなみに、結界は、除きました。

それで、客室にもどつて。

「あら、その勾玉と、時計は、外さなかつたのね?」

客室には、レミリアが、居た。

「!?なんで、分かつたんですか!?!」

覗き見?いや、結界を張つてあるはず、あの結界は、爆弾でも、壊れ無い筈なのに。

「そりや、運命を見たからよ」

やっぱり、直接じゃないけど、見てたんだ。

「それで、その勾玉は、何か、意味があるのかしら?」

どうして、そこ?」

ま、説明しますか、

「この、勾玉は、風土族の証として、また、窮地に陥つた時の、お守りとして、肌身離さず、もっているんです。

んで、この勾玉は、雷風石で、できていて、ラストスキル(スペル)を、発動する際

に、使用するんです。

雷風石は、この、六角石風流剣の、柄の部分にも、はめ込んであって、これを、共鳴しあって、攻撃するんです」

「そう、なんとなく分かったわ。今日は、もう遅いし、お休みなさい」
レミアアは、そう言って、客室から、出て行った。

僕は、ベットに入り、寝てしまった。

翌朝

「おはようございます」

「湖南様、おはようございます」

朝、僕は、いつものように、4時に起きた。

しかし、暇だったので、庭で、空を飛んでいた。

第13話「現代へ」13. 5話「現代で」

紅魔館をでた、僕は雪の中、空を飛んでいた。

「この、雲、何かおかしいな、よし、斬ってみよう『劔符 風切残刀』」

スペカを放った瞬間、雲がきれ、落ちた。

「雲も、切れるんだ」

そんなことを、考えながら、博霊神社に、戻っていった。

博霊神社に、戻ると、BB・・・もとい、紫がいた。

「湖南、ちようどいい処に戻ったわね、今、異変会議をやってたの」

「どんな事を、話してたんですか？」

「異変の、主犯と、遠征に、行く人よ」

遠征って、どんなけ遠いんだよ。

「主犯が、居るのは、どこですか？」

「現代しか、分かっていないけど、たぶん、神ね」

神・・・。

「で、誰が、遠征に、行くんですか？」

そう言うと、紫は、少し黙って、

「今回の遠征は、早苗、神奈子と諏訪子、アリス、魔理沙、にとり、葉の7人よ」

「みように、多いですね」

「そりや、希望者全員だからね、今日の、午後出発だから、支度済ませた方がいいわよ?。」

あと、数日間、戻れないから」

「そうですか・・・」

一回現代に戻ると、しばらくは、戻ってこれない。

僕は、本当にこれでいいのかと、思った。

だけど、今、この異変を、解決できるのは、僕達だけ。

今、行かないで、いつ、いくんだよ。

まだ、地底も、行ってないのに。

だけど、今、僕が、行かないと。

僕は、そんなことを、考えていた。

「みんな、準備は、いいかしら？」

「大丈夫です」

みんな、準備できたことを紫に伝えた。

「それじゃ、スキマオーブン」

そう、紫が言うと、スキマが、開いた。

「このスキマの向こう側は、清龍神社だから」

そう、紫が言うと、皆、入っていった。

皆の後に続いて、僕も、スキマに、入った。

スキマをでると、そこは、みなれた、風景が、あつた。

ここは、真正正銘の清龍神社だった。

雷神様、ただいま帰りました。

僕は、皆がいる、宴会場にいった。

「みんな、無事に着いたね」

「本当に、着いちゃうなんて」

「戻ってきましたね」

「他人の神社にいるって、なんか、違和感があるな」

そんな事を、皆が話していたその時、

「お、湖南、戻ってきたのか」

そういつて現れたのは、優樹と真帆だった。

「ただいま、二人とも」

「おかえり、湖南」

素晴らしいながら、話し込んでしまっていた。

第三者目線

「湖南さん、すっかり話し込んでますね」

「ま、昔からの友達だからいいんじゃないの」

「そういう問題ですかね？」

「こんな感じで、にとりと早苗が話している一方で、

「なあ、アリス、こっちで、魔法使えるのか？」

「分からないわ」

とアリスと魔理沙は、話していた。

第14話 「激突！鹿島の神と神主」

今、僕は、鹿島神宮にいる。

「このの神主、空見そらみ、零れいと、武実雷たけみのかずちに合いに来たからだ。

「零、いるか？」

「どちら様で、つて、湖南!? 戻ってきたのか!？」

「そういつて、拝殿から出てきたのは、零だった。

零は、僕の親戚に当たって、『靈力をあらゆる力に変える能力』と『星を見ただけで、知りたいことが分かる程度の能力』をもっている。

「で、なんの用？」

「ちよつと、この異変についてね」

「そう言うと、零は、少し黙って、

「雷（かずち）様が合いたいといっていて、しかも、俺と戦えと言つて来たもんで」

「そうなのか、とりあえず、戦いますか」

「でも、戦うなら、本気で行くよ」

「望む所だ」

こうして、僕と、零は戦うことになった。

(本当にこれで良いんでしょうか? 雷(かずち)様)

『サンダーバレット』

『風雷 雷玉』

あいかわらずの相殺した。

「やるね」

「そつちこそ、でも、負けないよ『雷砲 サンダースパーク』」

「それなら、『合成符 マスターサンダースパーク』」

しかし、レーザーの数だったら、僕が負けてしまった。

『理論 弾幕が消える日』

「!? 弾幕が消えた!?!」

「これで、終わりだ『風流剣 風切残刀 瞳風雷』」

「俺の負けだよ、湖南、さ、こつちだよ」

そういつて、僕と、零は、本殿に入ってしまった。

「よくきたな、湖南」

「はい、ただいまもどりました」

「そうか、何事もなくて、也よりだ。

さてと、本題だが、この異変は、複数の神々によって、起されている。

とめたければ、全員を倒すがいい。

当然だが、私もだかな」

「そうですか、そんじや、遠慮なく」

「懸かって来い」

『『終結 終焉結界』これで、どうですか？』

しかし、雷は余裕だった。

「あまい、土疏放電」

通常ならば、地面には、電気が流れないものだが、さすが、神様の力、常識を超えて
いるな。

だけど、僕は、空を飛び、対処する。

「これで、終わりにしましょう。『雷砲 サンダースパーク』」

「ふ、さすがが、りよ……、これ以上言っちゃいえなかった。

湖南、ここまでやるとわな」

？なんか言いかけたな、ちよつと気になる。

りよ……。

なんだろう。

「早く行きたまえ、時間がないぞ。

この異変を解決する者よ」

? 時間がない?

なんでだろう、ま、とにかく、急ぐしかないか。

「みんな、終わった。取りあえず帰るか」

「わかったぜ」

こうして、僕達は、鹿島神宮を後にし、清龍神社に戻った。

さてと、もどいたら、あいづらを、フルボッコにするんだから。

僕のことを馬鹿にした事を後悔させるんだから。

第15話 「出雲と出合い」

「ところで、湖南と優樹の関係は、なんだい？」

「こう、諏訪子が、出てきた。」

「私も、ちよつと気になります」

「仕方がない、話そうか」

「あれは、小4の時だった。」

僕は、諏訪湖の近くに、キャンプに行ったんだ。

川の近くにテントを張って寝たんだ。

朝起きたら、ちよつと暑くて、川に入って、水遊びしたんだけど、急に川が、増水したんだ。

出ようとしたけど、川の流れが、速くて、岸にいけなかつたんだ。

僕は、死ぬんだと、覚悟した時、一人の少女に助けられたんだ。

その後、その子の家に、一旦行って、川の様子を、見たんだ」

「ひゅい!」、あの、男の子、湖南だったの!？」

「えっ、あの少女は、にとりだったんだ。」

さてと、話を戻してと、その後、にとりに、言われて、山を降りたんだ。

山を降りたところで、たまたま、キャンプに来ていた、優樹に、会ったんだ。

その後、近くの神社で、神頼みしている、母さんと、父さんにあっただ。

そうして、無事に、家に帰ることが出来ただけど、その後に、優樹が、引越してきたんだよ」

「あ、その神社って、うちですよ？」

「え、そうなの？」

「あの時、あなた達が、最後の拝客なんですよ」

「え、そうなの？（2回目）」

「そうですよ」

なんか、東方のキャラに会うこと、多いな。

そのときだった。

（鉄道唱歌がながれて）

『ご乗車ありがとうございます。特急出雲9号、大社駅行きです。途中これから先の停車駅は、熱海、三島、静岡、浜松、名古屋、岐阜、大垣、米原、草津、大津、京都、大阪、神戸、加古川、姫路、相生、岡山、倉敷、米子、松江市、出雲市、終点大社です。』

途中、大阪には、0時13分、岡山4時9分、出雲市には、6時31分、終点、大社

には、6時50分の、到着予定です。

この電車は、7両編成で、前から、1号車、2号車で、一番後ろが、7号車です。

1号車から、3号車は、自由席、4号車から6号車は、指定席、7号車は、グリーンです。

この電車、全車個室タイプで、4号車から7号車は、鍵をかけることが、出来ます。

なお、座席を、寝台として、使用する際は、車掌を、お呼びください。

また、シャワーは、6号車にございます。

シャワーを、ご使用の際には、シャワー券を、車掌、又は、車内販売から、お買い求め下さい』

「・・・。湖南さん、ちょっと、デッキに来てください」

え、なんで？

それに、早苗、黒いよ？

「これって、一体、どうゆうことですか？」

「いやいや、早く、異変を解決したくて」

「私達を、覗くつもりですか？」

「いや、そんな気持ちはない」

「そうですよね」

こうして、僕と、早苗さんは、部屋に、戻った。

「そんじゃ、部屋割りを、決めようか」

「「「「おーーーーー」」」」」

みんな、よろこんで、始めた。

「今回は、この6号車の、7号車よりの、3部屋を、押さえてあるから、みんなで、すきにして、ただし、僕と、優樹はこの部屋を、指定しているから、この部屋は、なしね」

みんな、話し合って、守矢組+にとりと、魔法組で、きれいに、分かれた。

そうして、天国?な夜が、始まった。

第十六話 「湖南の変化」

(鉄道唱歌)

『ご乗車ありがとうございます。まもなく、大阪、大阪です。大阪環状線、神戸急行線、大阪急行電鉄線、地下鉄中津線はお乗換えです。お出口は、左側です、大阪を出ますと、神戸に停まります』

「よし、一杯いくとするか」

「おー」

今、皆は、車内販売から、買った、缶ビールや、自分で、持ってきた、酒を飲んでいく。

僕と、優樹は、飲めないのです、シャワーを、浴びて、寝ようとした。

シャワーの、時間が15分しかなかったけど。

部屋に戻ると、神奈子が、コップを、もって待っていた。

「ほら、のど渴いただろ、ほら、一杯(お酒)」

「ありがとう」

僕は、神奈子から、コップを、もらい、一気に、飲んだ。

しかし、それがいけなかった。

飲んですぐ、これは、水じゃないことが分った。

喉が、急に熱くなって、頭が、くらくらした。

「神奈子さん、これなんですか？」

「えっと、確か、翠香から、あずつかた酒で、名前は口割酒だったな」

「は!?!未成年に酒飲ませてるの!?!」

「いやいや、お前、既に、妖力をおかしい量持っているじゃないか」

しかし、僕は、その言葉を最後に、寝てしまった。

翌朝

「うっ、頭が、まだくらくらする」

僕は、ちよつと、違和感を、感じていた。
なぜなら、声が、低くなっているからだ。

「声変わりかな」

そんな、独り言いいながら、時計を見た。
時刻は、4時40分。

倉敷で、時間調整で、停車中だった。

「顔でも、洗うか」

また、独り言を言つて、寝台から、でた。

視点が、やけに高かったが、そんなに、気にしなかった。流しに行つて、顔を、洗つたところで、魔理沙に会つた。

「こんな妖気を持つやつが、こつちにもいるなんてな」

魔理沙はきずいていないんだ。

ま、外の空気でも吸おう。

朝の新鮮な空気を吸おうとして、外に出ようとした。

しかし、扉の前には、葉が居て、出れなかった。

「あれー、この扉、どう開けるんだろう？」

「葉、この扉は、ここの、ボタンを押して開けるんだよ？」

「!?びっくりしたなー。ま、お兄さん、ありがとー」

そういつて、葉と、外に出た。

「やっぱり、早朝の空気は、おいしいな」

そんな事を、考えながら、車内に、戻つた。

「湖南さん、近くに、居ますか？」

どこからか、早苗の声でした。

「居るけどー、どうしたー？」

「すいません、ちよつと、タオルを、濡らしてしまつて、ちよつと、タオルを、取つて来

てくらませんか？」

「いいよ、ちよつと待つて」

タオルを、取つて来て、早苗に渡そうとした。

しかし、今渡すと言う事は、早苗のは〇かを見ってしまうということだ。

それは、男としても、あれだが、R—18タグをつけていない、この作品で、そんなことはしてはいけない（メタイです）。

そう思った僕は、前に置いてある、靴の上に置くことにした。

しかし、角を曲がつて、タオルを、置いた瞬間だった。

「きゃ!？」

早苗が、扉を開けて出てきてしまった。

びつくりした僕は、振り向いてしまい、眼に焼き付けてしまった。

「湖南さんの、エッチー！」

そう、僕は、早苗さんに怒られてしまった。

第17話「激突!!物造大神」

大社駅、それは、出雲大社の最寄駅であり、2面3線の駅だった。

山陰本線大社支線が乗り入れている。

こんな駅に、今、僕は、絶対にやっちゃいけない事をしようとしている。

「来ちゃったね、出雲大社」

「わー、珍しいものが一杯ね」

「アリス達は、観光しててもいいよ。優樹、連れて行ってあげて」

優樹は、ふと振り返り、答える

「分った、皆こっちだ」

優樹は、皆を連れて、人ごみの中に、消えていく。

「しんじや、いきますか」

残ったのは、神奈子と諏訪子だった。

出雲大社の拜殿の中、僕は、巫女と話をしていた。

「なるほど、つまり、この天地異変を止めるわけですか。

いいでしょう、私に勝ったら、通して上げますよ」

そう来たか。

「分った。『スキルカードバトル』で、精製堂々と、いどんでやる」

「スキルカード『土流放電』」

「甘いですよ、『百札砲撃』」

お互いの弾幕は、交わることなく、相手のほうに行つた。

『反射 マジックミラー』

巫女さんは、僕のスキルカードまで、反射させた。

僕は、土流放電を避けるべく、空を飛んだ。

「やりますね、でも、よそ見していて、いいんですか?」

なんと、避けていた筈の御札が戻ってきた。

前後からの、弾幕は、避け切る事が出来ず、当ってしまった。

しかし、その御札は、開放の札だったので、余計分まで、放電してしまった。

「今ならいける、スキルカード『雷砲 ダブルサンダーパーク』」

二本のレーザーは、巫女さんに確実に当たった。

「どうやら、本気みたいですね。さあ、こちらです」

そう言われて、僕は、本殿に、向かった。

出雲大社の本殿は、金に塗装された、門の奥にあった。

本殿は、なかなか広く、毎年沢山の神様が訪れるからだった。

「よく来たな、若人よ」

そう言つて、出て来たのは、ここの神であり、また、日本高神でもある、物造の大神だった。

この神様は、日本を作ったとされている、大物だった。

「この天地異変を止めに来たのだらう、ならば、わしと勝負！」
「望むところですよ」

こうして、僕と、神様の、二回目の、勝負が、始まった。

『終結 終焉結界』

『内外の縁結び』

『雷砲 サンダースパーク』

『和心鳳来』

僕の放ったスキルカードは、すべて消されていた。

「成る程、弾幕同士を結んで、消しているわけですか。

では、これはどうでしょう？」

『劍符 風切残刀』

「成る程、見えない弾幕と来たか。では、これはどうかな？」

そういつて、神様は、一枚の紙を取り出した。

そして、その紙切れを飛ばした。

僕は、それを、よけようとしたが、当たった。

次の瞬間、僕の何かが消えた。

第18話「失われたものと手に入れた物（前編）」

「これらなどうかかな？」

そういつて、大神は紙を取り出し、投げた。

そして、当ってしまった。

その瞬間、僕の何かが、消えた。

第三者目線

「湖南!!よけろ!!」

神奈子は、さけんだ、

しかし、湖南には、よけることが出来ず、

当ってしまった。

「あれは、封印の札。あたれば、ただじゃ、済まないぞ」

次の、瞬間、湖南から、妖力を感じ取れなくなった。

再び湖南目線

紙が、あたった瞬間、僕の中から、妖力が、消えた。

「まだまだ、『雷砲 サンダースパーク』」

しかし、サンスパは、出ない。

「なんで出ないんだよ」

「もう終わりか？」

「まだまだ、『靈砲 サンダースパーク』」

本当は、使いたくなかった、靈砲は、他にも、使う靈力を沢山使うからだ。

「仕方がないな、『主符 主人公補正』」

誰だ？

しかし、発動したのは、僕のスペルカードだった。

なんで、勝手に発動するんだ!?

まさか、主人公補正!?

「ま、こんな所でやられるのは、想定外だから」

「まさか、作者さん!？」

（今作二度目のメタ発言です。）

そんなことを考えている間に大神は、

「分った、私の負けだ。降参しよう」

こうして、大神との、戦闘は、終わった。

僕は、解放の札を使用して、妖力を開放した上で、大神の話聞いた。

「お前達が、ここに来ると言うことは、鹿島は、やったか。」

そうなると、後は、山岡東宮・伊勢神宮と、とある、雷神だ。

タイムリミットは、あと三日だ、急ぎたまえ」

成る程、先に、山岡に、行くか。

伊勢のほうが、近いけど、泊まれないな。

「よし、皆を、集めて、僕は、緑の窓口で、指定券を採ってくる」

そうして、僕は、大社駅の、緑の窓口に行った。

「すみません、大社駅から、山岡駅まで、大人9人」

そう、窓口の人に言った。

「畏まりました、本日の、朝潮12号と、雷鳥の指定席券を、ただいま、発券いたします」
こうして、朝潮号に乗り込んだ。

「ご乗車ありがとうございます。特急朝潮12号京都市行きです。」

途中の停車駅は、出雲市、松前市、米子市、鳥取、富岡、江原、矢鹿、和田山、福知山、綾部、園部、亀岡、終点京都です。

途中鳥取には、14時8分福知山15時23分、終点京都には16時49分到着です。

列車は7両で前から、7号車、6号車です。

自由席は、1号車から3号車指定席は4号車から6号車、グリーンは7号車です。本日の車掌は、福知山乗務区の立川です。

皆様を、終点京都まで、ご案内いたします」

作者！100文字以上食ってるぞ！

後、電車でGOをパクルな！

(今作3回目のメタ発言ですよ)

第十⑨話「失ったものと手に入れた物（後編）」

『ご乗車ありがとうございます。』

まもなく終点京都、京都、お出口は、右側です。

東海道線、奈良線、名坂線、京阪神線、湖西線、東海道新幹線は、お乗換えです。

今度の、東海道本線上り、特急こだま28号東京行6番線から、17時8分、新快速米原行6番線から、17時19分。

東海道・山陽本線特急こだま13号姫路行8番線から、17時3分、新快速播州赤穂行7番線から、16時59分。

湖西線、特急雷鳥10号金沢行5番線から、17時49分に、それぞれ、お乗換えできます。

どなた様も、お忘れ物をない様、もう一度、お確かめ下さい』

「よし、京都に着くけど、接続時間に、余裕が、あり過ぎるから、17時30分まで、自由行動。

僕は、本屋に、行ってから、夕食を、買うから、なんか、あつたら呼んで」
こうして、列車は、1分遅れで、京都に着いた。

駅の中にある本屋に、僕はより、時刻表を、買おうとした。

第三者目線

「蓮子、あそこにいるのって、もしかして、湖南君じゃない？」

本を読んでいた、金髪の子が、一緒に来ていた子に、聞く。

「メリー、誰なの？湖南って？」

隣にいた、蓮子と、呼ばれた、少女は答える。

「知らないの？ほら、この本（風土物語）の、19章に、出てるじゃん。

『この世界を、変える子』って」

メリーと、呼ばれた、金髪の子は、本を、指しながら、答える。

「確かに、似てるね」

再び湖南目線

「もしかして、湖南さんですか？」

本を読んでいた、メリーによく似た人が、聞いてきた。

「はいそうですけど、もしかして、メリーさんと、蓮子さんですか？」

「そうだけど、どうして、私達の事を知ってるんだい？」

蓮子が聞く。

「実は、かくカクジカジカうんたらかんじか食パンじかじかで」

俺は、説明した。

ん？今俺って言った？

なんで急に、一人称が急に変わるんだ？

「どうした？急に黙ったんだ？」

「いやいや、なんでもないよ（棒）」

「そうかな？そういうえば、何時の電車に乗るんだ？」

蓮子が、聞く。

!?やばい、後、15分しかない。

「ありがとう。教えてくれて。あと、15分しかない」

「15分って事は、今度の雷鳥か？」

「そうだけど、もしかして、一緒に電車なの？」

「そうだよ」

「そう、そんなじゃ、車内で」

「じゃね」

やばい、急いで買わないと。

こうして、俺は（やっぱり違和感がある）みんなの、弁当を買い、電車に乗った。

「どうして、急に、幼しさがなくなって、大人な感じになったんだ？」
魔理沙が聞いた。

「そんなの俺がしりたいよ」

こうして雷鳥は雪と雷が、なる中、走っていた。

．．．。

は!?!雷!?!

ちよつとやば。

第20話「雪と星」

僕達は、山岡東宮に行く途中、夜を明かす為に、優樹のお爺さんの家に、居た。

山岡は、日本海沿いにある歴史都市であり、山岡の地下には、巨大な遺跡があり、今でも、発掘が、続けられている。

でも、今は、観光している暇はない。

観光で思い出したけど、アリス、にとり、神奈子と諏訪子は、都合で、幻想郷に帰った。

「・・・一人、常識のなか、生きていく、僕は、何の為に、生きていくのだろう、みんなの思い、一人、抱きしめて、差別なき世界に、変えるため、今、僕は、間違ったこの世界を、直す為に、生きていくんだ、無意味な争いで、旅だった人たちのためにも」

(坂上湖南テーマ曲『一人風雷の最子』)

「また、その歌を歌ってるのか」

!?!、ふと振り返ると、優樹が居た。

「どうして、ここに居るって分ったんだい?」

ここは、屋根の上、そう簡単には、登れないはず。

「そりゃ、お前が、考えことをするときは、必ず、風に当たるからだ」

なるほど、確かに、僕は、考えに行きどまったら、風に聞くな……。

確かに、風は、考えを教えてください。

「それで、その曲は、何の曲？」

……。

「東方のキャラには、大体、テーマ曲があるだろ？この曲は、一人風雷の最子って曲で……」

「ようするに、お前の曲、っていうことだろう」

優樹が、僕が、話しているのに割り込んできた。

「ま、そういうことだね」

僕は、ふと空を見上げる。

そこには、月と、黄色く光る星があった。

僕が持っている、勾玉も、光っていた。

明日は、今までと、流れが、変わる。

「そうだ、ちよつと、『スキルカードバトル』しない？」

唐突に、優樹が、もとかけてきた。

「別に良いけど、何で、急に？」

「いいじゃん。ま、始めようか。『葉符 リーススパーク』

不意打ち!？」

『雷砲 サンダースパーク』

見事に、相打ちし合う。

「やるね、『劍符 風切残刀』」

「優樹も使えるのか『劍符 風切残刀』」

そして、また、相打ちし合う。

「今度はこつちから行くよ『活線 列車で行く日本一周の旅』」

「のは!まじか『隕石 メオリックストーム』」

空から、隕石が、降ってきた。

『風符 風中同化』

そういえば、この間は、無敵だった。

「くそ、湖南め、どこに居る?」

案の定、優樹は、僕が何処に居るのか、分っていない。

「風中同化を使ってるんだったら、これだ、『風魔法 リーフストーム』

のは!?!マジか、

『終結 終焉結界』

「そこか、『風流剣 瞳風緑』

のは!?!最大サイズだど!?!

『風流剣 瞳風雷』

「こちらも、最大サイズで反撃する。

「相変わらずだよ、湖南」

優樹が、白旗を揚げて、降参する。

第21話「作中の人物」

翌朝、僕達は、山岡東宮に行く為に、朝早く出発した。

昨日とは、打って変り、一気に、春を感じさせて居た。

皆は、異変が、終わったと、気を緩めていたが、これが、命取りになることも知らずに……。

桜並木並んでいた、街中とは、打って変り、木々が追い敷ける、山道を歩いていた。

しばらく道を進んでいくと、大きな岩が、道を塞いでいた。

多分、落石による物だった。

「どうするんだぜ？」

魔理沙が聞いた。

「飛んでいきましようか？」

早苗が、そう答えた。

しかし、帰りも、再び飛ばなければならなく、疲れているときに飛ぶとなると、使用できる、スキルカードも、制限されてしまう。

「そんなじゃ、壊そうか、スキルカード」

しかし、魔理沙が、

『(恋符) マスタスパーク』

派手に壊してしまった。

「……………。熊が出てきても知らないぞ」

しかし、僕の言った事は、本当になった。

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

何処からともかく、叫び声が聞こえ、地面が大きく揺れた。

何回か、揺れた後、熊が、姿を現した。

「? ☆△△○ ☆△△*▽」

熊が、何かを言うと、弾幕が展開された。

「な、普通の熊でも、弾幕が出せるのか」

そう、魔理沙が言うと、すぐさま、戦闘態勢をとった。

第三者目線

『月符 ムーンナイト』

何処からか、熊の声がした。

私は、誰かが、襲われていると、思い、空を飛んで、声のするほうに向かった。すこし飛んでみると、やっぱり、誰かが、熊に襲われていたので、助けに入ろうとした。

再び湖南目線

熊が急に襲ってきた為に、相手を、する事にした、

『終結 終演結界』

安定の、結界で、終わらせようとした、しかし

「待ってください、この熊、すっごく、脅えています。

湖南さんには、聞こえないんですか!？」

葉が、こう訴えてきた。

しかし、僕には、熊の声が聞こえなかった。

その時だった。

「君の言うとおり、この熊は、大きな音に、びっくりして、出てきたんだよ。

さ、森にお帰り」

空から、降りてきたその人は、熊にそう告げて、森に返した。

「あなたね、びっくりした熊を攻撃するって、一体、どういう神経してるの?！」

いきなり、その人は、僕に対して、質問してきた。

「先ほどは、助けていただいて、ありがとうございます。」

あの、よろしかったら、お名前を、聞きたいですが」

優樹は、そう、質問した。

「あ、そういえば、自己紹介がまだだったはね、私は、鳥養 鈴（とりかいりん）、ここら辺に、住んでいる、動物達の、世話をしているの」

そして、ひとまず、全員の、自己紹介が終わった。

「瀬笈葉って、もしかして、能力者たちの、閉鎖的な空間の話『東方Project』の、瀬笈葉？」

「東方？何ですかそれは？」

そう、葉は聞く。

「東方も、知らないの、東方って言うのは、幻想郷に住む・・・」
鳥養さんは、皆に、東方について、教えていった。

現時点の登場人物・能力集

坂上湖南 サカガミコナン

登場回 すべて

種族 半人半妖（人と人の間に再誕したはずなのに・・・!?）

詳細 ネタバレ参照

八雲 紫

登場回 1・13話

博霊 霊夢

登場回 1・2・3・8・10・13話

霧雨 魔理沙

登場回 2・3・13・16・18・19・21話

オリジナルスペルカード 『連携符 マスターサンダースパーク』

『連携符 マスターリーフサンダースパーク』

ルミア

登場回 2・7話

東風谷 早苗

登場回 4・5・13・21話

射命丸 文

登場回 4・5・9話

高橋 優樹

登場回 5・6・7・13・15・16・17・20・21話

詳細 バック側参照

河城 にとり

登場回 6・13話

オリジナルスペルカード『激流 狭い川の鉄砲水』

詳細 作品の、重要人物

過去に湖南と会っている。

バック側参照

風渡雷神

登場回 8話

能力『天地を司る能力』

スキルカード計5枚（それ以外にも、技が200以上ある）

『雷符 土流放電』

『雷符 空中放電』

『禁力 瞳風雷割球』

『雷符 信頼の雷』

『雷符 雷鳴結界』

詳細 雷神の一人である。

異変にも関係している。

十六夜 咲夜

登場回 10・11・12話

レミリア・スカーレット

登場回 11・12話

岩瀬 真帆

登場回 13・5話

詳細 バック側参照

瀬笈 葉

登場回 13・15・21話

詳細 東方自然癒（ASATO氏製作）より、出典

オリジナルスキルカード 『連携符 サンダーリースパーク』

『連携符 マスターリーフサンダーパーク』

空見 零

登場回 14話

能力 本編参照

参照 鹿島神宮の神主

湖南の親戚

八坂 神奈子

登場回 4・15～19話

洩矢 諏訪子

登場回 4・15～19話

鳥養 鈴

登場回 21話

能力 『あらゆる声を聞く程度の能力』

参考 協力性のものが多い。

現分 想衣（げんわけそうい）

能力『あらゆる物を操る能力』

参考 1963年の新旧異変後封印される。

時すら、無視する事が出来たらしい。

現在、どこで封印されているか、不明。

コラム 字調整

く 新旧異変についてく

1963年に世界を巻き込んで起きた、世界史上最悪の異変。

当時の世界に無い、未来のものが流れ着いた。

主犯は、現分想衣である。

主犯の目的は、未来の、あやまちを止める為だったらしく、

八雲紫・魔法使い・巫女・三人の風士族によって、解決された。

その後、現分想衣は、一人の風士族によって、封印された。

また、異変を解決したものの内、八雲紫・風士族以外は、その時間には、居なく、

未来から来たと言っている、その後、消息不明になった。

湖南の人説

湖南は、人ごみに居ると、気分を害される。

また、曲がった足も数秒で、直した。

これから、湖南は、人では、無いと考えられる。

第22話「覚悟と乱入」

「きましてね、湖南さん、守山神さまの、ご指示に従い、私が、お相手します。

『応対 対妖陣』

!? 対妖怪用の札か、ならば、

『風符 風中同化』

「話は聞いていましたが、本当に、無敵状態になるとは、だけど、半妖の力が出していない、
今が、攻撃のチャンス、サンダースパークさえ、使われなければ、大丈夫なはず」
なるほど、そんなでは、

『(雷砲) サンダースパーク』

「!? 来ましたね、だけど、『反射 鸚鵡返し』」

なるほど、攻撃を反射させる程度の能力か、この勝負、もらった!

『風流剣 瞳風雷』『(成長) 一つの種は大樹になりし』

「やりますね、だけでも、甘いですよ?」

『良心鳳来』

!? 跳ね返しからの不意打ちだと、しかも、風中同化の効果は切れてるし、

どうしよう、

『葉符 リーフスパーク』

「葉、なんで、乱入して来るんだよ?」

しかし、撃つて来たのは、

「俺だよ、湖南、あんまり無茶するなよ」

優樹だった。

よし、こうなったら、

『風流剣 瞳風雷』(×5)

瞳風雷の、由来は、使いすぎると、瞳が黄色くなる、いわゆる“暴走状態”になるからだ。

暴走状態になれば、いくらでも、攻撃できるが、正気を、失ってしまう。

だけど、対妖陣に、囲まれた今では、妖力関係は一切使えない。

霊力と、雷エネルギーを、あんまり、使わないとなると、これしかなかった。

「湖南正気か!?!お前が、暴走状態になると、地球を壊せるんだぞ!?!それでも、やる気か!?!」

すっかり忘れていた、だけど、この異変を終わらせるためにも、ここで、白旗を、揚げるわけには、いかないんだ。

『古力 長生き者の古知恵』

しかし、このスキルを、使った後、僕は何かに、体が飲まれるような感覚がして、絶してしまった。

後に、優樹に聞くと、

「あの人のところか、神様まで、遣ったんだぞ、しかも、お前を止めるのに、10分も掛かったんだからな!」

と、言われてしまった。

ちなみに、魔理沙にその事を聞いてみると、すぐく気味が悪かった。

とまで、言われてしまった。

今後は、このスキルは、使わないで置こう。

僕は、そう考え、封印した。

このスキルの、封印は、後の事件の元がねたともしらずに……。

その後、境駅に付いた僕達は、次の行き先に、迷っていた。

「どうしましょうか、このまま、伊勢神宮に行きましようか？」
「ただ、僕は、時刻表見て驚いた。」

「そうだ、先に伊勢神宮に行こう」

NT中部のCMのまねを試してみた。

「そうなるよ、一旦、山岡まで戻らないといけないな」

そう、境駅には、緑の窓口が無いのだ。

仕方なく、僕達は、ホームで、電車を待った。

『まもなく、一番線に、折り返しの、10時15発、各駅停車、山岡行きが、参ります。
危ないですから、黄色い線の内側まで、お下がり下さい。』

この電車は、4ツドア4両です。

4両編成乗車位置でお待ち下さい。

この電車は、途中、街田駅に見て、山北本線下り各駅停車と、特別快速北都行き、上り、快速、義秋行きに、それぞれ、連絡します。

一番線に、折り返し、山岡行き到着です。

『ご注意下さい』

ATOS風放送乙。

第23話『人妖としての覚悟』

結局、時刻表で確認した所、街田で、乗り換えたほうが、早くつく事、分つたので、街田で、特快に、乗りついた。

この、北山本線は、北都と、山岡を結ぶ、前長149.7kmの路線である。途中で、峠を、越える関係で、その区間のみ、この特快も、4両になる。

僕は、雪見町駅で、解結を、見た後、先頭に、居た。

「どう? 何にもない、北山峠は? 楽しい?」

!?ふと、横を向くと、いかにも、僕は、人じゃないです。

と言う感じの、少年が、立っていた。

ただ、特徴的なのは、声の高さだった。

ソプラノ以上の、その高い声は、少年のものとは、思えなかった。

「ん? びつくりさせちゃった? ごめんごめん」

しかし、次に話しかけられたときは、普通だった。

「妖怪として、生きるのって、どういう感じだか、わかる?」

現代では、否定されている存在。

もし、その血を引くものが、目の前にいたとしたら、どう思う？

半人半妖の、湖南君」

「!?なんで、僕の名前を、それ以前に、声の高さを、変えられるって、まさか……。」「ま、急に、そんなこといわれても、びつくりするよね、別に、そんなこと、今の、君には、迷いが、あるんじゃない？」

このまま、人妖として、暮らしていいのかって」

なんで、僕の悩みまで、分るんだろう？」

それに、人妖ってことは、人間と、妖怪の、混血者の、子孫。

ということとは、覚り妖怪との、混血？」

僕の頭の中で、沢山の憶測が、飛び交う。

だけど、僕の、頭では、すぐに、答えが、でなかつた。

しかたなく、僕は、聴くことにした。

「あの、どちら様ですか？」

すると、

「自己紹介が、まだだったね。

僕は、沼倉風太。

種族は、人妖で、能力は、『くじを当てる程度の能力』と『高い声を出す程度の能力』

のふたつだよ」

うわ、本当に、程度の能力だwwww。

実際にありそうだな。

「……。君は、戻らなくていいの？もう終点だよ？」

その言葉を、聴いて、振り向くと、そこには、もう居なかった。

……。

沼倉風太、一体、どういう存在だろう？

『まもなく、終点、北都、北都、お出口は右側です。』

東山線、西里線、中央本線は、お乗換えです。

今日も、NT中日本をご利用下さいますありがとうございます。

忘れ物、無い様ご注意ください。

The next station is Hokuto tyameru
jō
u s i d o l i t o s i d o p o u n .

m t y u n i n g f o r A z u m a y a m a | L a i n N i s h i z a t o
| L a i n e n d T y o u h o n | L a i n .

t e n t y u r o d N T | n a k a h i h o n .
』

第24話 「伊勢と陰陽師」

伊勢神宮駅に着いた、僕達は、すぐに、伊勢神宮に、行こうとした。

しかし、改札を、出たところで、僕達は、厄介ことに、巻き込まれた。

「妖怪」^{ゴキウ}のときが、よく、神聖なこの地へ、来たものだ。

ここで会ったのも、百年目、さあ、ここで、おとなしく退治される」

そう、陰陽師が、数人出てきたのだった。

しかし僕達は、急いでいるが、避けて通ることは出来ないようだった。

仕方なく、僕は、口に任せ、この場をしのいだ。

「我は、この天地異変を、留めに来た。

邪魔するものは、人妖関らず、撃退するのみ。

いざ勝負」

こうして、陰陽師4人と、僕と、葉の戦いが、始まった。

『終結 終演結界』

他の人への、危害を出さない為に、結界で、隔離した。

「なるほど、人間にまぎれて生活してきましたか。

では、『靈符 夢想封印』

なんで、靈夢さんのものを、

『葉符 リーススパーク』

葉の方は、大丈夫そうだな。

そうじゃ、

『風流劍 風切瞳風雷』

とりあえず、一人は、退治した。

葉のほうも、やったか。

そうじゃ、

「葉、行くよ」

「はい、ほんとこいです」

『『連携符 サンダーリーフスパーク』』

無事、残りのやつも、全員やった。

僕は、終演境界を、解くと、ギャラリーが、沢山居た。

中には、写メや、動画も、取ってるやつらも居た。

どうせ、後で、zei tyubや、niko動画にでも、上げるつもりなんだろう。

そうだったら、紫が、消してくれるから、大丈夫だと思うけど。

だけど、僕が、覚えていたのは、ここまでだった。

みんなの話によれば、また、遣ってしまっただらしく、

今度は、幻想郷落雷異変（自分自身が幻想入り参照）並みに、落ちたらしい。幸いにも、僕が、終演結界を張った後で、被害は、無かったそうだった。

ま、魔理沙いわく、

「夢想天成並だぞ」

と、言われ、褒めてるのか、怒ってるのか、よくわかんなかった。

とにかく、このことは、ニュースにもなつて、日本中を、駆け抜けたことは、言わんこつちやじゃ無かつた。

だから、帰りは、沢山の、パパラッチが、追いかけてきた為に、苦痛電車で、帰つた。NT静岡の座席、狭いし、硬いし、

そもそも、パパラッチ撃退結界とか、使えたら、良いのに。

そんなことで、名古屋、浜松、静岡、沼津、と、乗り継いで、熱海に来ていた。

『まもなく、一番線に、熱海発、普通電車、黒磯行きが、10両で、参ります。

危ないですから、黄色い線まで、お下がり下さい。

グリーン車が付いております・・・(わかんないので省略)』

僕は、セミクロス車を、探した。

2段LEDつまり、横コツ車だから、セミクロスは、1, 2, 9, 10号車。

始発駅だったために、すぐに座れた。

『NT東日本をご利用くださいまして、ありがとうございます。

この電車は、上野東京ライン、宇都宮線直通黒磯行きです。

グリーン車は、4号車と、5号車です。

グリーン車を、ご利用の際には、グリーン券が必要です。

グリーン券を車内でお買い求めの場合、駅での発売額と異なりますので、ご了承下さい。

次は、湯河原、湯河原、お出口は、左側です。

T h i s i s U e n o — t o k y o L i n e t o r e n F o r K u r

O i s o Y u o a r e u t u n o m i y a L i n e .

g u r i — k r a N o b r 4 , E n d n o b r 5 .

g u r i n n t i k e t x r h e r e z u g u r e n n s k a i .

T h e N e x t s e t e s y o n i s Y u g a w a r a .

「ご購入ありがとうございます、・・・」

「グリーン車って、何が豪華なんでぜ？」

魔理沙が、質問してきた。

グリーン車は、結ったり出来るし、静かだからね」

「静かって言うことは、したからの、音も無いって言うことか？」

「ま、そうだね」

第25話『夢の叫びとドレミー・スイート』

風の夢便り・・・窮地に落ち入った者が、助けてほしい時に、その旨を文に書き枕の下に引いて、寝る。夢の中で、意識を飛ばし、助けを求める。

こうして、夢便りが成立する。

昔から、ドレミー・スイート（夢の管理人）の立会いの下行われていた。

神の力を預かり、天罰を代行する。

それが、風士族――。

く本編く

やっと、戻ってきた。

風渡雷神様、ただいま戻りました。

別に、テレパシーが使えるわけでないが、一樣、礼儀として、神術者としても・・・。

夕食を、食べた後、僕は、書庫にいた。

風技諸百科を、見るためだった。

風技諸百科は全部で四巻あり（書庫にある分）いつも持ち歩いているのは……。

どう言えば良いんだ？

東方風に言えば、弾幕の、技が書いてある本？

ま、そんな感じの物だ。

いま、僕が持っている本は、1巻目『私達の存在意義』を持っている。

別にこれを、読む意味は無いけど。

分ったことは、僕達は汚い心を持つ者には、嫌われる。

が、きれいな心を持つものには好かれる。

神の眼の届かない所で天罰を代行する。

それが、風士族の本当の姿。

重く、シリアスな、話はここまで。

あんまり、考えると、体にも、負担が出来る。

やめよう。

今、考え事もない。

今は寝る！

しかし、今晚、優樹が言っていた、夢の便りを体験することになったことは、ドレミー・スイートしか知らない。

※ここから先は、鍵括弧の前にしゃつべて居る人の名前を表示します。

ドレミー・スイート

「また、夢の頼りか・・・、仕方ない、この子の所に行かせましょうか？」

ね、坂川鈴稔（さかがわりんねん）さん？」

坂川鈴稔

「はい！（風士族の血を引いているのにこのような事になるなんて、だけど、これで聞ければいいかな？」

ドレミー・スイート

「そんじゃ、つなげればよ？」

坂川鈴稔

「はい！御願します！」

坂上湖南

(何か違和感を感じるな、この空間)

ドレミー・スイート

コンコン (ノック)

「入るけど、いい？坂上湖南君？」

(何だろう？風の夢便り？ま、悩んでもあれだし)

「かまいませんよ？」

ドレミー・スイート

「そんじゃ、入るわよ。」

感ずいてるかも知れないけど、夢便りね。

本人達、と言っても意識だけなんだけどね。

ま、ゆっくり話と居てね。

何か会ったら呼んで。

そんじゃ

ドレミー・スイートはログアウト、あ、ごめんなさい。

一旦戻りました。

坂川鈴穂

「あの、私、坂川鈴穂といます。

風士族の血を引いてるのに、全然、風を操れないんですけど、どうしたらいいでしょうか？」

坂上湖南

（苗字が似ているな、まさか？）

「あ、坂上湖南といます。

こんな感じのやつは、初めてなので、直接会いませんか？

浦安の清龍神社に居るので、来てください」

坂川鈴穂

「浦安？鳥取の？

安房小湊なので、ちょっと厳しいかな？」

坂上湖南

「いやいや、千葉ですよ。

そんなことは言いませんよ。

もし、遠かったら僕が行きますよ」

坂川鈴穂

「そうですか。

夏休みにも行かせてもらいましょか？

ドレミー・スイートさん、終わりました」

坂上湖南

(ここ)で、朝になっていた。

不思議な体験だった)

第26話「式神と雷神」

「ふあゝ、やつと終わった」

いつもの、日課であつた、朝のひと仕事を終わらせる。

僕が不在の間、神社を、空けるわけに逝かなかつたので、地域の人をお願いして、いてもらつていた。

しかし、またお願いすわけにもいかないのです、仕方なく、簡易式神を、作ることになつた。

「何折つてるんだぜ？」

ふと、魔理沙が、聞いてくる。

「折り紙のやつこさん」

そう話している間におりあがる。

「そんじや、やりますか、『理論 ポルスターガイスト』」

僕が、スキルカードを、唱えると、やつこが、光出す。

「な、なんですか？この光は」

皆が、驚く。

光が、やむと、一人の少女がいた。

「御作りいただき有難う御座います、湖南様」

その、少女が話す。

「「うわーっしやべったーっし」」

「「なんで、皆おどろいてるですか？」」

脳内に、直接響く声……。

こいつ、脳内に直接……。

「「え、いやですか？」」

え、嫌でもないけど、て、テレパシーで話すなー！

ふと、皆を見ている。

あ、皆白目向いている。

気絶したな。

「「私なんかしましたか？」」

お前が急に驚かせるからだろ。

「「なんだなんだ、騒がしいぞ」」

ふと、誰が来る。

って、風渡雷神様!?

（「いかにも、そうだが？」）

（「この人が、風渡雷神様ですか？」）

（「ごもつとも、そうだが？」）

脳内でしゃべるな——!

「あれ、私、気絶しちゃいましたか？」

ふと、早苗さんが、起きる。

「あ、大丈夫ですか？」

「まだしゃべってる・・・。」

チ——ン

なんか、変な音が聞こえたぞ。

（「あの、どうしたんでしょうか？」）

「いいかげん、無言会話は、やめようぜ」

「あ、すみません。だけど、ご主人様の、性質上、思考が、まる聞こえなんです」

ふぁ——、作るんじゃないやなかった。

（「そんな事言わないでください！」）

まったく、どうしてこうなった。

（「湖南様が作ったからでしょ！」）

その後、皆が起き朝食とした。

「そういえば、M G M G このこの、M G M G 名前は M G M G どうするんですか？
M G M G」

「早苗さん！食べてからしやべって！」

食後、この子名前を、決めるために、皆で、話し合った。

結局、決まらなかった。

そのあとだった。

「呼ばれて飛び出てじゃじゃじゃーん」

「ばばばーんの間違いでは？」

あと、呼んでない。

「そんな冷たい視線で見ないで。」

霊夢からの伝言で、今日、非常に厄介なことになりそうって。

あと、これ以上騒ぎを起こさないで。
いいわね？

「そんじゃ」

紫は、スキマに、戻った。

第27話 東方黒幕戦

「雷神様……いくらなんでも、人間に罰を与えるだけに、ここまでするのはおかしいと思います。」

むじつなにんげんを巻きこまのはおかしいと思います。

自分の従っている主人を、退治するのは、おかしいと思いますが、異変解決のためなら、仕方ありません。

雷神様、覚悟してください」

そう言うと、僕は六角石風流剣を、構える。

どうしてこうなったかと言うと、

『さてと、情報を整理すと、雷神、しかも、天気を操れることを、考えると、群馬の雷神神社あるいは、上総坂上の本殿になるけど、多分後者でしょう。』

前者は、主に厄除けだから』

『上総坂上……。風渡雷神様が、祭られている神社ですね！私も、一度聖地巡礼を、したかったです。』

……。あれ？。風渡雷神様って、ここにも祭られている……。あつ、もしかして、

「こつて分社・・・。

あれ?じゃあ何で青龍様が、いらつしやらないんだろう?

ま、とにかく今は関係ないですね!」

『あ、そんじゃ、雷神様を、呼んでつと』

・・・。

結局、この後、上総坂上にも行くことになった。

9時までに終わるか? (現在時刻8:00)

うーん、まっいつか。

「雷神様、行きますよ」

「掛かって来い」

そして、

『天符北陸大雪』『雷剣雷流放刀』

同時に、スキルカードを宣言する。

雪雲から、雷を落とし、風流剣に流す。

そして、雪雲を切り、飛び掛った。

案の定、雷神様も甘くはなく、

『天符雷鳴結界』

結界に、囲まれた。

「ボム『三番瀬の満潮』」

そして、

「援護行きますよ『開海海が割れる日』」

早苗のスペカに続き、

「葉、行くぞ」

「はい！」

『連携符マスターリーフスパーク』

鬼畜すぎ、スペル三枚とか。

僕のほうには、来ては困るので

『終結終演結界』

結界を、張った上で、

『雷砲サンダースパーク』

目の前に妖力陣が出現し、そこから、稲妻と雷属性のレーザーが出る。

しかし、雷神様は、器用によける。

仕方なく、長い術文を、唱えもう一度あの結界を張る。

「我衣に秘められし力を解き放ち、この場に頑丈な結界を張りたまえ、スキルカード『終

『最終演結界』

長い、時間が持った無い。

以下の理由で、同時に2枚も終演結界張らない。

そして、雷神様の動きを封じた上で、

「皆、これで、終わらせよ！」

『主符（連携符）正義は必ず勝つ』

ラストスペル。

普通のと違うのは、皆で、同時に放つことだ。

霊夢、妖夢、咲夜、文、チルノ（妖精大戦争）が、使うことが出来るはず。

そして、今回は、蛇に蛙が、乗った物や（早苗）、非常に大きいレーザー（魔理沙）鈴蘭の花の舞（葉）そして、『風流剣風切瞳風神雷』（僕）が、混ざっている。

流星に、雷神様もこれは避けられず（結界のせい）クリティカルヒットした。終わった。

一週間ほど続いた現想異変は終わったんだ。

雷神様に、回復の青い札（参考：霊夢のは、紅いですよね）を、渡した。

あとで、謝ないと。

こうして、無事、現想異変は解決（？）したとき。

めでたし、めでたし。

—— 現想異変（メインストーリー） 完結 ——

第28話『風貼りの原点』（東方乗車録）

東京駅 8 : 02 蘇我 8 : 43 終点館山 10 : 10 着

特別快速 5835F（平日のみ）

この電車に乗る為に、船橋に来ている。

”6号車 乗車位置”

足元には目印が、張つてある。

『本日もNT東日本を、ご利用くださいましてありがとうございます。』

今度の4番線の電車は8 : 23発、内房線直通、特別快速館山行きです。

この電車は、途中、津田沼、千葉、蘇我、五井、木更津、君津、佐貫町、浜金谷、保田、岩井、富浦、終点館山、の順に停車します。

この電車は、途中木更津に見て、前11両の連結を切り離します』

(ATOS)

『まもなく、4番線に、内房線直通館山行きがまいります。

危ないですから、黄色い線の内側までお下がります。

この電車は (ry)』

電車きて、すぐ乗車。

「この電車、速いはずなのに、全然人が乗っていませんね（空気輸送状態）」

「そりゃ、逆に走ってるからね、普通は、東京に行くから」

「なるほど」

——カッター——

『まもなく、五井、五井、お出口は右側です。』

姉ヶ崎、長浦、袖ヶ浦、巖根へおいでのお客様と、上総鉄道小湊線はお乗換えです。

五井の次は、木更津に停まります』

（英語は略）

中間改札を、抜け、5番線に、向かった。

早苗さんには、懐かしい、手で開ける古い気動車が、停まっていた。

「あれを見ると、長野を、思い出しますね」

と、早苗さんが、つぶやく。

「だったら、幻想郷に、帰る前によっていく?」

「え、いいんですか?」

早苗が、聞き返す。

（「かまわないは。見終わったら、呼んでね？あ、魔理沙たちは先に返しといたら）」
・
・
・

紫まで、テレパシーを使うのか。ま、許可も出たし、寄って行くか。

幻想郷に。

『おまたせいたしました。』

この列車は、普通の安房小湊行きワンマンカーです。

まもなくの発車です、ご購入車になれてお持ち下さい』

車内から、乗車促進の、放送がながれる。僕と早苗さんはドアを、あけて乗り込む。幸運にも、二人がけボックスが、空いていた。

『お待たせいたしました。』

本日も、上総鉄道小湊線をご利用くださいまして、ありがとうございます。

この列車は、普通安房小湊行ワンマンカーです。

次は、上総村上お出口は、左側です。

運賃、切符は運転席横の運賃箱へ、定期券は運転士にはつきりとお見せ下さい。

お降りの際は、運転席横のドアから、お降り下さい。

整理券でご精算の方はおつりの無い様小銭をご用意下さい。

Thank you at the Kazusa Railway.
 This is Komirato Line Lome Train For
 Amo-Kamogawa of wanankra.
 The next station is Kazusa-Murakami
 exit left』

(英語は苦手だよ。今回はGiigle大先生に、英訳してもらったよ)

——カッツ——

養老溪谷出発して、もう過ごしで、上総中野だ。

森の中から一変、一気に、田植えもされていない、水田に出る。

ここに着てやつと、帰ってんだ、第二の故郷に、と思う。

『まもなく、上総中野、上総中野、お出口は、左側です。

運賃、切符、定期券は、駅の改札口にお渡し下さい。

木原線、坂上線はお乗換えです。

お忘れ物の無い様ご注意下さい。

今日も上総鉄道を、ご利用くださいまして、ありがとうございました。

The next station is Kazusa-Nakano.
Presetyenj The Kihara-Line and Sakagami-Line.

Thank you at the Kazusa Railway.

ご乗車ありがとうございました。

まもなく上総中野に到着です。

一番線の到着お出口は左側です。

(じよーないしんーこー)

お乗り継ぎ列車のご案内です。

木原線普通列車大原行反対側2番線から10:25。

坂上線普通列車上総坂上行、階段上りまして3番線から10:16。

本日はご乗車ありがとうございました』

長い、200文字。

階段上って3番線に着いた。

・・・。

10分待ちか。

ここで、鞆から、塩握りを取り出して食べる。

「博麗神社と、似ていますね（財政が）」
.....

何で、早苗さんの、心の声が聞こえるんだろう。

それに、心かもやもやる。

ピチューーン

何でこうなった。

早苗目線

（なんか、心を読まれたような気が）

ピチューーン

（あ、ちよま、何でピチュルンですか？

とにかく、寝かせないと）

私は、湖南さんをつれて、待合室に連れて行った。

どうゆう姿勢で運んだかは、お察し下さい。

????
目線

あ、やべ、邪気眼開眼させちゃった。
ばれないように、妖力を送ってつと。

湖南（精神状態）目線

うー☆、体が動かない。

金縛りか、どうしよう、

・・・。

しゃべるか。

「す、くるかーd『治療 自然治威力』」

そして、妖力が、増えた。

「あ、よかった、眼覚めて。

列車が着たから、乗せたんですよ？（気絶してる顔がかっこよかったけど、途中で、途中で、途中で、力が増えてびびくりしたんですけど、勾玉が、光って減ったことなんて、聞けない）」

「あー、ごめん、ありがとう」

『ご乗車ありがとうございます。まもなくーしゆうてーん、上総坂上ー上総坂上ーお出口はー右側ー車内にーお忘れもノーないよーご注意くださいーい。』

運賃ー切符はー整理券とー一緒にー駅改札口にー御渡しくださーい。

本日はー上総鉄道ーごりよー下さいましてーありがとうございますとーございましたー』

駅を出て、亀山湖に向かって参拝道を歩く。

「改めて、聞きますけど、諏訪大社に似てますね」

諏訪大社は、諏訪湖に面して、聳えている。

「あれー、何でだっけなー、ごめん忘れちゃった」

「いいんですよ、こうしてみると、諏訪を思い出します」

やがて、NT東日本の上総亀山駅が、見えどころまで歩くと、清龍本神宮が見える。

鳥居をくぐり、本殿に来る。

「雷神様ー、さつきはすみませんー」

そう、本殿の奥に言うのと、雷神様が、来る。

「いいんだよ、仕方ないことから」

そういつて、雷神様は、僕の頭なでる。

「(湖南さん照れてる)」

また、読めた。

風術強風償還(笑)

「きゃっ／＼／＼」

早苗さんのスカートに風が吹き込まれる。

「むう、湖南さん」

早苗さん黒い。

「ちよつと、外に来てください」

「そういわれて、引きずり出される。

で、

「いきますよ、『蛙符手管の蛙墓』」

いきなり、スペルカードが発動する。

スキルカード発動せず、なぜか、青い追跡札を放つ。

雷神

「元の姿に似ているな。——すまんが、もう少しの我慢しておくれ」

第二⑨話 「愛しき諏訪は過去の罪へと」

結局、僕が、勝ち、諏訪に向かうことにした。

上総亀山から、木更津、千葉と、乗り継いで、中央総武緩行線、乗っている。

幕張を出たときだった。

?????
目線

いい加減、良いよな、我慢の限界だ。

再び湖南目線

「ほんの少し来てもらいますか、此方へ」

何処からともかく、声がする。

次の瞬間、神経が逆なでされる感覚がし、僕の視界は真っ暗に、成った。(この間3秒)

「なんだよ、いきなり」

僕は、すつと、立ち上がる。

また、理想郷か。

全く、嫌になるな。

「すまないな、いきなり呼び出して、しかし、我慢の限界なんだよ」

また、知らない人(?)が、いた。

「さすがに、名のなばあかんか」

我は現分想衣、お前の、半妖の部分だ。

ついでに、此処は、お前の想像力を元に製作した、精神世界だがな」

なるほど、そういうことか。ならば。

「現分想衣、覚悟——」

風流剣を片手に飛び掛かる。

しかし、視界がブラックアウトする。

あと、もう少しだったのに。

(「この先電車が揺れますのでお立ちのお客様は、手すりやつり革に、お捕まり下さい」)
「痛て——」

頭に、本がクリーンヒットしてき上がった。

「大丈夫ですか？」

「うん？大丈夫だよ」

僕は、頭を少し冷やす。

『まもなく、新小岩 新小岩 お出口は右側です。』

亀戸、平井へおいでのお客様と、東武亀戸線をご利用のお客様はお乗り換えです。

新小岩の次は、錦糸町に、停まります。

The next station is Sinkoiwaright side
de open.

please change for Souduline
Lcontra
ins, and Tob-Kameidoline』

(今回は、スマホ変換)

一体、何が落ちてきたんだよ。

本かよ。

あ、何か挟まってる。

何々、封筒？

俺宛？

ビリビリ

どれどれ？

『警告』

理想郷での、破壊行為は、お前の精神を、破壊する。

我々は、破壊することはできない。

自分で、自分自身を、壊そうとするな。

現分想衣より。

P・S. その、スキルカードは、自由に使え』

手紙と、スキカが、入っていた。

『連携 邪神の元武神』

『連携 下総の大神』

.....

雷神様のか、この前の（第8話参照）夢が、やっと理解出来た。

『お待ちせいたしました。』

発車致します』

——カット——

『まもなく、東京、東京、お出口は右側です。』

新幹線、中央線、山手線、京浜東北線、東海道線、京葉線、上野東京ラインと、地下鉄荻窪線はお乗り換えです。

東京から、先は新橋、品川、西大井、武蔵小杉の順に各駅に、停まります。

The next station is Tokyo.

Please change for the Shinkansen the
 Youline the Yamate line the Keihin to h
 oku line,

The Tokaido line the Keyo line the
 Ueno Tokyo line and the Ogikubo line.
 ブチツ

あ、何か、切れたな。

ま、いつか。(フラグ)

「おい、お前、俺たちの早苗はんと、何異変解決してるんだよ」

はい、出ました、俺の??宣言した、熱中オタクが、

「キヤー、一体、なにするんですか!？」

早苗さんが、引つ張られて行く。

「仲間を傷つけるって、言うことは、覚悟出来てるんだよな？」

僕は、鞆から、風流剣を出し、構える。

「望むところだ」

一人が飛びついて来る。

しかし、殴った瞬間、気絶した。

風流剣を、投げ、挑発する。

「お前、何をしたんだ」

ふと、相手が、聞く。

「何も、ただ、感電しただけ」

「おのれー」

怒りに任せて、飛びかかってくる。

しかし、怒りに任せた行動は、単純であり、避けた上で、

ビリビリビリビリ

感電して、倒れた。

「おのれー、覚えてろよ」

そう、言つて逃げていった。

ま、覚えておかないけどね。

「早くしないと、電車が出ちやうけど?」

「急がないと、行けませんね」

『中央特快、大月行き発車でーす。ドアーしまりまーす。』

お近くのドアから、お乗りください。

ドアーしまりまーす。

一番線、ドアが閉まります。

ご注意ください。

次の電車をご利用ください』

ピンポンピンポンピンポンガチャ

「はあはあはあ、なんとか、乗れた」

「本当ですよ。奇跡を、使つて良かったです」

『NT東日本を、ご利用くださいませ、ありがとうございます。』

この電車は、中央線、中央特快、大月行きです。

次は、神田、神田、お出口は、右側です。

地下鉄渋谷線はお乗り換えです』

——カット——

『まもなく、八王子、八王子、お出口は右側です。

横浜線、八高線、新青梅線は、お乗り換えです。

八王子から先は終点大月まで各駅に止まります。

The next (ry)』

『御乗車ありがとうございます。

特急あずさ27号松本行きです。

これから先の、停車駅到着時刻について、ご案内致します。

大月、18:38 塩山 1⑨:00 山梨市 1⑨:05 石和温泉 1⑨:0⑨

甲府 1⑨:14

長坂 1⑨:36 小淵沢 1⑨:43 茅(ル)野 1⑨:58 上諏訪 20:0

4 下諏訪 20:08 岡谷 20:12 塩尻 20:21 終点松本 20:31

到着予定です。

次は、大月に、停まります。

只今より、車掌が、車内に、参ります。

乗り継ぎ、乗り越しなど、御精算のお客様は、お声をお掛けください。

また、自由席特急券の販売も、致しております。

車内販売より、ご案内致します。

本日も、ご利用くださいまして、ありがとうございます。

車内販売では、ホットコーヒー、缶ジュース、缶ビール、おつまみ、お弁当、山梨の、郷土料理で、知られる、ほうとう等を、お持ちいたしました。

御用がございましたら、お声をお掛けください。

ありがとうございました』

「特急券拝見致します」

!?

「あ、すみません、下諏訪まで、二人分御願います」

車掌さんは、鞆から、車内補充券を、記入して、用意してくれた。

「二人で2500円ね」

財布から、お金をだし、渡す。

「はい、かしこまりました」

そういえば、なんなんだろう、あの本。

「痛て！」

また、上から本が落ちてきた。

また、あの本か、落ちてきた。

何々、”精神世界について”?

どれどれ?

——カッタ（希望が在れば別途上げます）——

で、下諏訪駅に降りて、守矢神社跡地に、行ってみる。
・
・
・

なんで、祠が、あるんだよ。

「皆、思い出して、しまったんですね。」

でも、嬉しいです」

「良かったね、早苗さん」

僕は、雷流を切つて、早苗さんを撫でる。

お賽銭と、手紙を入れておく。

そして、墓参りもして、紫を、呼ぶ。

「はーい、呼んだ？」

紫が、スキマから、出てくる。

「紫さん、用は終わりました」

早苗さんが、答える。

「そう、そんじや、幻想郷に、御帰還」

スキマ開き、落ちる。

もうちよつと、ましな方法は、会ったよな？

I c a n f u l l y

二回目のスキマボツシユート

第2・⑨章 学校生活（クロスオーバーあり）

第30話 EX 八雲黒

博麗神社に、戻ると、宴会を、やっていた。

天狗や河童、地底の妖怪等が飲んでいた。

「をーい、其処の半妖、ちよつとこつちで飲まないかい？

まさか、私の注いだ酒が、飲めない訳ないよな？」

萃香が、此方を指差して、手招きする。

僕が知識として、知っているのは、森近霖乃介さんと、河城みとりの、二人だけ。と、来ると、僕の事かな？

僕は、自ら結界を、緩めてしまう感覚がした。

きずいたら、清龍神社に、戻ってきていた。

紫&霊夢視線

「結界が、一瞬緩んだわね」

「そうみたいね。

あら？ 湖南が、居ないわね？」

4月7日 月曜日 AM 08:20 富士見中旧1年B組

「クラス発表は、始業式終了後、学年開き中に、発表する。

あと、湖南は、体育館入場後、右側に、来てくれ」

ああ、周りからの視線がパーフェクトフリーズだ。

体育館は、つい最近エアコンが、着いたそうさ。

そして、右側に座る。

あつ、此処は表彰者の待機列。

何か、表彰される事したか？

(「異変解決したじやなか」)

現分想衣、学校では、止めてくれ。

そんなこんなで、始業式が終わり、表彰式に成った。

「えー、今回我が校の、一人の生徒が、荣誉ある行動をしました。

と言うことで、坂上湖南君、前に出てきてください」

そう、校長に言われ、上に上がる。

「はい、それでは、表彰

坂上湖南殿

貴方は、自然環境を整え、春を迎えさせた事を、此処に評します」

８８８８８８８８

拍手か、沸き上がり、写真が、撮られる。

その時、何処からともかく、

「飛んでみるよ」

と、声上がる。

僕は、表彰状を先生に渡し、床を、蹴り皆の頭上に、飛び出る。

『終結 終演結界』

結界を、空中に張る。

「そんじや、結界を張れることは、弾幕も出せるな、いざ、勝負」

と、八雲黒が、飛んで結界に、入ってくる。

「「そんじや、楽しくやっていきますか『風流剣 瞳風雷』（『恋符 マスタースパーク』）」
風流剣を、紙に擬装した、札から召還する。

そして、一気に、弾幕が、飛び足して埋め尽くす。

しかし、八雲黒も、原作Windows版全部やっていたこともあり、簡単に、避ける。

此方も、本家を避けているので、当たるはずがなく、時間切れになる。

「お続いて二枚目『雷剣 雷流流刀』」

「此方も、二枚目『劍符 現世切り』」

八雲黒は、妖夢のスペカを使ってくる。

そして、激しく激突する。

柔道しかやってない八雲黒は、耐えきれず被弾する。

そして、戦闘を、終了する。

すると、八雲黒は、受け身を、取りながら床に落ちる。

僕も、ゆっくり降りる。

一期分の後書き

どうも、作者です。

今日も東方風雷郷を、御閲覧頂き有難う御座います。

この作品は、元々私のPC内のメモ帳に書いていたものを、東方Project仕様に直したものです。

優樹を主人公にした物で、火星物語を参考にしていました。

その為、魔帆のスキルカードは、火星物語内に出てくる魔法を、もとにしています。

さてと、湖南は主をモデルにしたオリキャラであります。

さてと、主人公じんの、現時点で出せる設定等を、全部公開し、解説したいと思いません。

坂上湖南

能力 風雷を操る能力

まずはこれからです。

元々は、風雷を操る事ができる才能でした。

修行すれば、誰でも取得できる事が出来ます。

また、進化も退化もします。

また、水・火も操れます。

能力 あらゆる理論を作る程度の能力

此方が本当の湖南の能力。

それ以外は、まだ内緒。

種族について

妖夢を例に見ましよう。

半霊は自由に動けますね。

それと同じです。

名前の由来

坂上は坂を登った苦労の上にある。

湖南は私の名前の聞き間違えですw

高橋優樹

能力 風緑を操る程度の能力

湖南と同じです。

能力 人の能力を真似る程度の能力
現時点では内緒。

能力 時を越える程度の能力

火星物語のフォボスと同じものであり、最終的には任意でやるこゝがて来ます。

名前の由来

高橋

高い橋のように結べるように。

優樹

能力の緑Ⅱ樹

風渡雷神

能力 天地を司る能力

要するに大地と天候を操る。

神物像

豊作 地震避け 火災予防 等のご利益があり、初詣は二十万人程の参拝客が訪れ

る。

要するに、万能神

名前の由来

風渡

風を渡り世を納める。

雷神

まんま。

現分想衣

能力 ありとあらゆる物を操る程度の能力

但し、命・時空は操れない。

邪神アザトースの式神として、出生の管理や天災等を行っていた。

なお、信仰を集めていないため、あくまでも妖怪。

現在は風渡雷神の数少ない式神。

式神としてしか生きれない。

名前の由来

現実と幻想を分ける。

また、世界を支える物。

衣食住から。

制作の関係者様方。

原作 東方Project

ZUN Project・上海アリス幻楽団様

火星物語

play station

東方自然癒

ASATO様

制作 坂上湖南（ネット名）

投稿サイト ハーメルン・SS・小説投稿サイト

ネタの参考にさせていただいたもの

現代には信仰と胡瓜が足りない！

森の民やむう様

東方風雷伝（現在不明）

ごめんなさい、作者忘れました。

電車で行こう！

豊田巧様

電車でGO プロフェッショナル仕様

Play station

Windows

クロスオーバー作品

ごく普通の中学生が幻想入り

八雲黒様

自分自身が幻想入り

NBS Dnel様

第32話「平和は少ない下総の端」

「はあ、やっと終わった」

結局、クラスはF組に決まった。

2学年7クラスとか、少子高齢化じゃないじゃん。

清龍神社に戻ると、なぜか賑やかだった。

「ただい・ま？」

（「なんで疑問系なんですか？」）

以前作った式神：生野せいや 共き禰よぎが脳内会話を図る。

しかし、すぐに居間に付く。

この神社内で、自由に使える数少ない場所だ。

あとは、宴会場、書庫、調理所が、同じ建物の中にあるために、この部屋は狭い。

ま、布団6枚はぎりぎりひけるけど。

しかし、居間に入った僕は、びっくりしてしまった。

「臯月ねえさん!?なんでいるの!？」

すると、共禰と話していた姉さんが答える。

「なによ、いちやいけないって言うの!？」

「いやいや、そんな事言つてないから」

「そう、ならいいけど」

そして、立ち上がった姉さんは、座つた。

次期神主としての生活は、あと2年か。

法律で決まつた3年間の悪魔の時間。

働けるようになるには、15歳に成れないといけない。

それまでの、1年と少し。

この間は姉さんの補助で何とか生活できている。

清龍の神主として、生きる時間も、もう少しかもしれない。

たとえば、それが運命だとしても。

宿題を片付けて、夕食を作ろうとした。

姉さんも一緒に、と誘つたが、自分の家に帰るといい、帰つてしまった。

しかし、冷蔵庫を開けると、在庫が少ないことが分った。

「あした、買わないと行かんよ」

そう、眩きながら、野菜を切る。

煮込んでいる間に、さつさと境内をそうじする。

そろそろ、畑の雑草も取らないとな。

そんな事を考えながら、箒で掃き終え、落ち葉を畑の隅っこに置く。

「あれ？こんなものあつたけ？」

畑の中にきらきらと光るものが見えた。

僕は、箒を壁に立てかけ、それを見に行く。

「流石に下駄で畑を歩くのはむずい」

そんな事を言いながら、きらきら光るものを持ち上げる。

「なんでこれ？」

それは、微かに神力を感じる物であつた。

丸い球体に三つの勾玉？の模様が彫つてあり、その模様は僕が持ち上げると虹色に変わつた。

装備品？

とにかく、書庫で調べよう。

僕は、持ちながら母屋に戻った。

そういえば、火つけっぱなしだったな。

(大丈夫です、私が火をきちんと見ていますから)

共禰が答える。

あ、そう、ありがとな。

(「ほんと、湖南様って雑なんだから」)

仕方ないだろ。

しかし、次の瞬間、空が紫色に変わった。

「っ異変か!?!」

僕は、走って母屋に戻り、装備を整える。

しかし、空は元の青色だった。

第3章 「他世界ですか?」

第33話 『神界ですか?』

※脳内会話ですが、面倒くさ……もとい普通の会話ですので括弧ははずして行きま
す。

湖南：（作者、異変終わったら、ぶつ殺す!）

「で、どうしようか?」

異変が始まったとは言え、情報がない!

「とりあえず、調べるか?」

現分想衣が提案する。

そうしますか。

《キングクリムズ……

させねーよ。

そんなー（泣）

あたりまえだろ、作品の浮陰気を壊すな。

「処で現分想衣、難しい顔をしてるけどどうかした？」

「いやなー、さつきから神界の感じがするだよね。」

もしかしたらけど、風渡雷神やぱつり・・・」

「やはりな、神力結界の外に出ないと分らん」

ちよつと、待つて色々付いていけないんですけど。」

幻想入りした翌日から、弾幕打てたり適合能力も高いけど、何なの、神力結界って!?

「ま、ことは調べようだ、外に出るか」

「ちよつと待つて下さい話について行けないんですけど。」

何なんですか、神力結界とか神界とか」

雷神様は少し間をあけて、

「神力結界とは、他の神に神社をのつとられない為の物であり、神界は物造大神とある人間が作り上げたものだ」

? なんて、物造大神様は指捨て何だ?

それに、とある人間?

「一ついいですか?」

「なんだ?」

「なんで、物造大神様は、呼び捨てなんですか?」

「我が日本最高神だからだ」

へ？

今なんて仰いました？

雷神様が日本最高神ですか？

「守矢の神々が信仰不足で現世から龍神が作った幻想郷なる楽園に移動したらしいが、
ともかく、豊作、地震・火災よけ、家内安全、家庭繁盛、．．．上げたら切が無いな。
ともかく、現在日本で一番進行されている訳だ。」

今さらだが、私の能力は『天地を司る能力』お前さんの能力の最上位召還な」
．．．。

チート能力過ぎでしょ。

俺の能力。

「ま、とにかく今から結界の外にですぞ。早くせい！」

「これが、神界ですか。居心地がいいですね」

「まったく、アザトースだったら、なぜ強制的に呼び出した。」

「武神の妖怪でも使えばよかろうに」

「現分想衣、アザトース様?の武神妖怪って一体何の?」

「・・・。仕方が無い、話すか。」

我々武神妖怪は、神々に使えることで、お互いに存在意義を達しているわけだ。

ちなみにだが、我の場合、能力の汎用性であつちこつちに派遣されたがな。

それうえg「そこらでやめんか!」すまないな、風渡雷神」

なんだろう、途中で言いかけたこと。

げ?

一体どうゆう事なんだろう？

このことに関して、触れない方がいいのかな？
いつそのこと、慧音にでも聞こうかな？

第34話 『神界探検①』

横丁らしきものがあり、神々？が昼間から飲んでいるのが眼に入った。中には、もう出来上がっているものまで居た。

大丈夫なんだろうか？これ。

「そこ、昼間から飲んでるんじゃないぞ？仕事はどうした？」

雷神様は、酒を飲んでいた神に説教を開始する。

これ、空気読んだ方がいいよね。

『風符 風中同化』

風になりました！

(実績解除 空気化)

なんだ？さっきの？

気にしちやいけないうつてやつ？

とにかく話を聞いてみよう。

※ここからは先は湖南が空気になっている関係で第三者目線です。

日本最高神が墮落している春の神の説教を開始してしまった。

一度、最高神の説教が始まると、最終的には実力勝負になる。

なので、神界に滞在している神々の間では、

“一度、最高神に見つかると最後はやり直しと”

「えっと、これには、理由（わけ）がありまして・・・（がぐぶるがぐぶる）」

「問答無用！『雷符 空中放電』！」

そして、両手から、稲妻が出てくる。

「あ、オワタ＼（。）。＼／」

バゴーーーーー

「ぎゃーーーー（ピチューーン）」

その時、神界中に一人の神の悲鳴が響き、他の神をびびらせた。

そして、とある神は恐怖を思い出してしまった。

「——の時と同じ感じ！もしかして、また遣っているのか！まずい、今度こそこの神（被害者）が！」

そして、最高神による制裁は終わった。

再び湖南目線

やっと終わったよ。

「解除」

そして、実態に戻る。

ちなみにだけど、風中同化は実態はないが、存在している為に、一部の人には見える上、攻撃もすることが可能らしい。

以上、優樹の仮説だった。

まったく、風土族に関する情報がなさ過ぎなんだよ。

「雷神様と、はk・・・坂上湖南様、それに現分想衣、邪神アザトース様がお呼びです。」

至急、宮殿の方へ来てください」

さつき、現分想衣が言っていた、武神妖怪が来た。

宮殿つて、あくまでも、神界だよね？

最高神一行 宮殿へ移動中・・・。

流石、アザトース様の宮殿だけあって、でかい。

「ほれ、さつきと入るぞ」

雷神様がさつきと入っていく。

「ちよつと待ってください！」

俺は空を飛んで雷神様を追いかける。

宮殿内の一室

武神妖怪に案内された部屋に入る。

「気を確かに持つてくださいいね」

「?」どう言う意味ですか?」

俺は、疑問に思い聞き返す。

「入って見れば分ります」

? 入って見れば分る・・・、って言われてもね・・・。

分りませんよ。

しかし、俺は、アザトース様の部屋に入った瞬間、眼にしては行けない物を、眼にしました。

第35話 『神界探検②』

あ、俺オワタ＼（。）。＼／

「どう言う意味でのオワタかしら？」

また、読まれてるし。

しかも、右目が光ってるし。

「さすが、私が見込んだこともあり、チート性能ね、現分想衣」

そして、右手を翳してくる。

「精神世界に隠れても無駄よ。」

『現実 一心一体』

「『やもえん、』幻想 常識に囚われない武神妖怪』

俺の近くで別の声が響く。

え、これって、俺巻き込まれるフラグ？

仕方なく、右目に妖力を送る。

そして、相手の心理を見ようとする。

しかし、神力によって防がれる。

「そんな事で、私を見ようとしても無駄よ、その”すべてを見通す邪気眼”は、元々私の物を分け与えたもの。元の私に勝てると思ったかしら？」

「？どう意味だろう？しかし、このままでは、いろいろおつかないから、ごめん、現分想衣。」

「スキルカード『連携 邪神の二元武神』」

しかし、

「『全力でお断りしたいが、強制償還だからやもえんか』」

そして、端っこに半透明から一気に実体化する。

「しかし、話すつもりは無い、『現実 超えられない高壁』」

そして、弾幕を打ってくる……。

フラグ回収乙

「ちよ、『風符 我心は風と共にあり』」

なんだかんだで、初めて使うな、このスキル。

『風符 下総海岸の海風』

なんか、大乱闘になってるし、しかも、どのスキルカードも、高密度すぎるし。

「あらあら、どうしてこうなったのかしら？」

まあ、いいわ『現実 再開始の隕石』

ちよ、隕石はやめてよ、しかも、全然制限時間が終わる気配ないし。

「！そうだ、あの手があった。『理論 弾幕が消える日』」

神々＋α和解中

「で、どうして呼んだんじゃ？」

雷神様が聞く。

「そうですね、我々神々が、そのれ・・・湖南に対し、どうしてチートのような力を渡したかについて、話したかったんですが、あまり戻っていないようですね。

それに、風渡雷神に現分想衣、あなた方の意思を見る限り、まだ早かったようですね。今回は、”すべてを見通す邪気眼”について話しましょう。

それと、あの人達には、まだ、きずかせない様に、操っておきましょう」

そして、一息ついてから、

「その邪気眼は、元々創造神である私の力でした。

しかし、この邪気眼は強すぎて、私だけでは扱えませんでした。

そこで、”あらゆる物を操る能力”をもった、現分想衣に眼を着け、私の武神妖怪にしたうえで邪気眼の力を分けたのです。

しかし、それでも邪気眼の力が強すぎるので、私はどうすることも出来なかったのです。

まあ、それは置いといて、何故、湖南・・あなたに挙げたかについてです。

それは、簡単です。

何故ならば、その邪気眼はいつか必要になるからです。

ま、その時になつたら分るでしょう。

一応、私の能力で見えない様にはしていただきますが。

さとり妖怪もどきがらいは出来るでしょう。

「けれど、忠告です、」
「けて力に任してはいけません」
飲まれてしまったときは、自滅するくらいの覚悟は持ちなさい。

力は薄めないと取り返しの付かないことになりますよ。

生まれつきの力にまだ、全然きずいてないようですが、あなたの本当の力は、その程度ではありませんから。

ま、頭が重くなる話はこのぐらいにして、少しは休んだらどうですか？
帰りは、幻想郷にでも、寄らせますか。

「お帰りはあちらですよ」

そういつて、スキマを開いた。

第36話『夢想天成』

幻想郷に戻って（この表現は、少々意味が違うが）博麗神社で、修行をしていた。正確には、さらにあるという、力に慣れるためである。

しかし、一人でやるのも暇すぎる。

神社の（二様）巫女でもある、霊夢は、

暢気に縁側で、お茶を飲んでいる。

「霊夢さん、良かったら相手してくれませんか？」

俺は退屈しすぎて、霊夢さんに声をかける。

霊夢さんは、少し間を開けて

「は、仕方ないわね。良いわ相手してあげる」

そう言って、湯飲みを置きお祓い棒を構える。

『霊符 夢想封印』

『風流劍 瞳風神雷』

お互い弾幕を打ちながら避ける。

『競争 横須賀京浜のガチバトル—easy—』

とある同人ゲームネタ。

横須賀線電車がスカ色を描いた弾幕を、浜の赤いあん畜生が（けして京葉線ではない）赤とクリームの弾幕を飛ばしながら、何回も走っていく弾幕が生成されていく。

しかし、意図も簡単に避けられる。

「拡散アミュレット」

そして弾幕を止める。

しかし、鉄道ネタ二枚目。

『競争 東海道横須賀京浜のがちバトル—normal—』

今度は、東海道電車が、湘南色弾幕が追加された二枚目。

『夢符 対魔陣』

対魔陣対策もしてあり、

「ポイント転換」

弾幕はそれ、列車が対魔陣を避ける。

「ちよつと、反則じゃない！」

もう、こうなった意地でも博麗の巫女としての強さ 見せて上げる。

『夢想天成』

それも反則じゃないの？

「仕方ないな〜『競争 東海道横須賀緩行京浜がちバトル―hard―』」

そして、無理げー弾幕で抵抗を開始する。

一応、俺の能力でこの世界の存在からは飛べていないので弾幕は一樣あたるはず。

しかし、全然あたらず、すり抜けていく。

「弾幕は当たらないわよ」

挑発と取れる一言。

『応急 逝つとけダイヤ―Lunatic―』

競争系の最高難易度。

列車弾幕が不規則に反射するので、避けるのは不可能に近い。

しかし、霊夢は余裕でかつ無言で避ける。

やばい、そろそろ全部変化し終わる。

こうなったら、変化同時に一か八かのスペルカードを放つしかない。

そして。

「これで終わりよ（デエエエエンンンンン）」『妖砲 ファイナルマスタースパーク
!!!』
お互いの最後の一撃が激突した。

はずだった。

『霊符 夢想封印 殺』

まだ、弾幕を打ってくる。

仕方なく、

『最後 風土族としての最後』

「はあああああああああ」「はあああああああ」

ドツカアアンンン

「はあはあはあ、くそ、やっぱり負けたか」

俺は息を上げながら敗北を認めようとする。

しかし、霊夢は

「いいえ、私のまげよ（最後はすこし油断したわ。だけどやっぱりね・・・）」

そうして、霊夢は一息挟んで、

「一休憩したら、ちよつと永遠亭に行くから付き合って」

はい？

何で、また永遠亭？

第37話 「実年齢と力の年月」

今永遠亭で、紫が頼んでいたという、地力検査を受けるために血を抜いていた。ついでに体質などを調べるらしい。

その間暇なので、適当に永遠亭の中を歩いていた。

しかし、廊下を曲がった所で、紐のような物に足を引つ掻けた。

その瞬間床が消えた。

「てゐふざけぬな」

当然ながら空を飛びながらてゐを探す。

邪気眼を使い探してみると、すぐに見つかった。

え？ 適合能力高い？ そんなん幻想郷では常識に囚われてはいけないんだぜ☆

そんな事より、てゐを捕まえないと。

『終結 終演結界』

「さてと、てゐ何でこんなことをしたんだ？」

てゐを捕まえ、理由を聞く。

「そりや、侵入者対策ウサ」

「嘘だね。嘘をつくときの癖が出てるよ」

そう言うと、てゐはびっくりした。

「なんで分かったウサ」

そりや語尾のウサが大きいから。

しかし教えない。

教えてしまうと、分からなくなるからだ。

「今回は許すけど次は無いからね」

そういつて、雷電を右手に流して脅してみる。

「湖南さん、検査が終わりましたので来てください」

鈴仙が呼んでくる。

「良かったな、助かって『風符 風中同化』」

そして、霊夢と永琳がいる部屋に入る。

「簡潔に言うは、貴方幻想郷生まれのような、あとがあるの。」

それに自力は年齢に比例するんだけど、あなたの場合は少なくとも百年近くはあるは。

それに、……。此は靈夢だけに教えましょう。

貴方の地力は靈力だけだけど、何故か妖力も混ざっているは。

とりあえず、貴方の靈力回復速度は異常に速いは。

少なくとも、骨折位の怪我だったら、靈力も含めて何も無かったかなのように回復するは。

だけでも、此がきつかけで靈力が暴走する事があるは。

だから、香霖堂にいつて、靈力を調整する道具でも探したら？」

そして俺は一足先に部屋を出て広間で待った。

靈夢達が残った、部屋のなかでは。

「それで、私にしか言えないことって何なの？」

靈夢が永琳に聞く。

「そうね、貴女弟がいて音信不通でしょ？」

永琳が靈夢に質問返した。

そして、靈夢は凶星された様にびっくりした。

永琳は道具を片付けながら、話を続ける。

「博麗神社での宴会の時、博麗大結界が歪んで湖南が消えたでしょ？

その事を紫から聞いて、色々調べたのよ。

そうしたら、湖南は貴女の——だって言うことが分かったのよ。」

霊夢はその事を聞いて非常に驚いた。

「嘘、湖南が私の——だって言うの？

だったら真っ先に気づいている筈よ!?

なのになんで!？」

永琳は霊夢の顔見ながら言った。

「幻想郷は常識に囚われては行けないのよ」

霊夢はその言葉を涙目で聞いていた。

第38話 「歴史と記憶」

迷いの竹林を歩いて数十分、全然竹林を抜ける気がしない。
そして小屋のある広場に出た。

妹紅の家に着いた。

しかし妹紅は居なく、困り果ててしまった。

そうだ、いつそうの事飛んでしまえば良いじゃん。

こうして、無事(?) 人里に着いた。

しかし、入ろうとすると門番に止められた。

仕方なく事情を説明した上で、やっと入れた。

人里の中は江戸時代にタイムスリップしたのかのような風景が広がっていた。
里の人に道を聞いて、寺子屋に入る事にした。

「いらっしや、って誰だね君は？」

慧音が聞いてくる。

「えっと、坂上湖南つとって、一応風士族をやっています」

俺は次期神主であることを隠して答えた。

「そうか、私は上白沢慧音、此所の教師をしている。

所で一つ聞いてもいいか？君は今何歳何だ？

見た目に反して、結構歴史があるんだが」

俺は正直驚いた。

永遠亭でも言われていたが、どうしてこんな風に年齢詐欺扱いされてるんだろう？

「そうか、分からない様だから教えてあげよう。

君は、外の世界で生まれて育った。

そして、（この発言は何者かによって発言できません）

そして、（この発言は何者かによって発言できません）

で、今に至る訳だ。

あれ？途中変だだったか？」

慧音さん、途中で聞こえませんでしたよ？

「な、なんにも無かったと思います。

多分、前世の事でしょう？（棒）」

「そうか、だったら私の能力が強すぎたのか。

今夜は満月だしな」

そう言ってお茶を出した。

「そうだ、確か君は結界術が得意みたいだな。

私にも簡単な結界を教えて欲しい。

生徒にも教えたいならな」

頼まれては仕方がない。

素人でも出来る簡単なもの避け結界でも教えるか。

俺はお茶を一飲みして外に出た。

「そうですね、それじゃ霊力も使わない結界のような物を教えましょう。

簡単です、まず自分の力を信じて自分の気配を出来る限り消します。

そうしたら、右手に力を入れます。

これで攻撃去れ憎くなります。

だけど、そこまでは持たないので、逃走だけに使ってください」

慧音さんは、メモを取っていた。

「成る程こうするのか」

そういつて、結界を展開する。

「教えてくれてありがとうな。

こんど、お礼を用意しとくよ」

「お礼なんていいですよ」

そういつて、俺は寺子屋を出た。

そこでは、早苗が布教活動をしていた。

ところで思うんだが、妖怪の山に里の人間は入れないんだから、此処で信仰を集めようとしても、意味が無いような気がする。

後で、守矢神社に行つて、教えておこう。

第39話 「守矢神社の説教」

幻想郷・人里

早苗が布教活動していた広場はすっかり人が居なくなり、錆び付いている龍神の像がひっそりと建っている。

此処の人里では龍神が余りにも忘れられている。

まあ、手入れしにくい場所にあるから、俺の勘違いかもしれないけど。

俺は靈力を調整するための道具を香霖堂にでも探すために人里を出ようとした。

その時だった。

何が此方に来る！

その直ぐ後、妖怪の山の頂上付近で雷雲が掛かったのは。

微かに風渡雷神様の神力を感じる。

となると、二柱神に何かが起きてしまう。

ヤバイ！

どうにかしないと二柱神が殺られてしまう。

『雷符 雷流放電』・『風符 風中同化』

??? 「やっと見つけたわ、協力できるものを」

へ？八雲紫？

紫ならば妖怪の山にいるはず？

デシッ

後頭部に衝撃が走った。

どうやら境界を弄られたらしく、次第に力が抜けていく。

次の瞬間、俺は幻想郷から姿を消した。

幻想郷・守矢神社

結界で隔離された守矢神社。

其処の中では風渡雷神が八雲紫 三柱神とゆつくり話をしていた。

幻想郷で一からやり直すと言うことには感心を懐いて居るらしく。

最初から開催と言うことは、無いようだった。

しかし、話を聞いていくと自分勝手しすぎて呆れてしまい、結局やることになってしまった。

神奈子は抵抗しようとしたが、天気すら操ることも出来ずただただ待つことしか出来なかった。

そして、風渡雷神は稲妻を手に持ち構えた。

「待ちなさい！何処の誰かは知らないけど、勝手にライバルを倒さないでくれる？」

風渡雷神が振り向いた其所には、札とお払い棒を構えた霊夢の姿があった。

「この前の異変の主犯ね、幻想郷にどうやって入ったか知らないけど、また退治されたいの？」

霊夢が続けて言う。

しかし、風渡雷神は冷静で、

「巫女が神にでも叶うとでも？其処の馬鹿神共でも在るまいし、そう簡単には殺られぬぞ」

そう言つて稲妻を構える。

「ごや、勝負！」

そう言つて二人の勝負が始まった。

「拡散アミュレット」

「風鎌鼬」

鎌鼬を拡散アミュレットで防ぎながら次の一手に出る。

「霊符 夢想封印」

「天符 関東の空つ風」

夢想封印は風に乗り霊夢の所まで戻つてしまう。

「霊夢だけずるいぜ、私も混ぜてほしいんだぜ 『恋符 マスタースパーク』」

「魔里沙!? 何でここに!?!」

其所には、ミニ八柱炉を構えた魔里沙が居た。

しかし、マスパは当たらず弾幕も戻つてきてしまい、またもに攻撃すら出来なかつた。

そして、

『雷符 信頼の雷』

一斉に力尽きてしまい、誰も立てなくなつてしまつた。

「全く情けないわ、この程度で負けるなんて」

紫がスキマから顔を出し言う。

今年を振り替えまして

「ということでも今年も色々ありまして」

湖南「というか、これ言うのも三回目だけどな」

霊夢「テイク3なんて有り得まいわよ」

「しかたないじゃん、消させて2日目に書いてるんだから」

魔理沙「というか、真面目に飽きたぜこのテンプレ」

霊夢「というかあんた、語尾は？」

「めんどろだから、つけてない」

魔理沙「てめえ、くらえ『恋符マスタースパーク』！」

「.....」

魔理沙「消した!?!」

「俺の能力」くじを当てる程度の能力」はな、こんな感じでイベントすら当てること
出来るんだよ!」デエエエエエエエエ

魔理沙「な!」ピチューン

霊夢「一回休みね」

湖南「で、さっさと回収しておきますかね」

「そんなじゃ、能力がまだわかってない皐月の能力だけど」乱数調整を行う程度の能力
要するにTASで別作品に置いてはかなりの重役になるかな。

まあ、期限に間に合わなさそうだけど」

湖南「なんだよすの作品」

”鉄ヲタかと思つたら神使でした”小説家になろうの方で先行公開している」

霊夢「あの名前の分らないやつが主役の？」

「いや、出さないだけで、きちんとある」

魔理沙「というか、東方乗車録の方はどうするんだぜ？」

「魔理沙、こいつが丁度良い時になったら書く」

霊夢「というか、外に誰かいるみたいだけど？」

？「まったく、寒いんですけど」

「仕方ないだろ、もう12月なんだから」

湖南「作品内はまだ4月だけだな」

魔理沙「というか、誰なんだぜ？そいつ」

「秋山翔、バックストーリーの方で主人公の様な存在。

こつちの方でもキーパンソン。」

今いえるのはそれだけ」

湖南「なんか、すげー気になるな」

「妹空じゃないんだから、メタ会話には含まれないから」

翔「おい、ロリコン作品を出すな」

「結構迷作だぞ」

魔理沙「字が違う気がするぜ」

「気のせいだ」

霊夢「というか、このメンバーの意味は？」

魔理沙「何なかの作品の主人公だろ？」

霊夢・魔理沙↑東方project

湖南↑東方風雷郷

秋山翔↑東方風雷郷ボックスストーリー

作者↑？

湖南「おい、最後お香椎のような気が」

「両方とも気のせいだ」

湖南「台詞奪いやがった」

」」

魔理沙「というか、終わりは何時なんだぜ？」

「飽きたら」

霊夢「それじゃ、終わりは突然に来るわけ？」

「多分」

湖南「それじゃ、俺たちはどうなるの？」

「それについては、他の人が出していてくれるから大丈夫」

翔「だと思った」

全員「それじゃ、今年も色々ありましてお騒がせしましたが、来年も東方風雷郷をよろしく願います！」

第4章 「東方紺珠伝」 Legacy of Lunatic Kingdom」

第40話 「浄土の探査機」

博麗神社の中で何時もの様に話しているらしいが今日は話題がおかしいらしい。

と言うのも、紫さんから召集を受けて幻想郷に来ているわけであるが、空気が重い。因みにだが極力博霊大結界には触らないでほしいらしい。

前回、博麗大結界に干渉した事で結界が不安定に成ったらしい。

「そう、そんじや行つて見ますかね。

湖南行くわよ（この呼び方は変な気がするわね、だけど慣れるまで我慢しなきゃ）」
？

何のことだろう？

しかし、霊夢と早苗が飛んでいくので後を追いかける。

「そうですね、最初に見たところから行きましょう」

そう早苗が言い、さらにスピードを上げていく。

俺も置いていかれないようにスピード上げ追いかける。

と、ここで異変に気づく。

何でも、何もなかっただ剥き出しの地面がそこにあつたからだ。

「どう言う事よ、これ」

さすがに霊夢も驚いた様子で聞く。

「ここを金属蛙が通つて行つたら皆枯れちゃつて、何もなくなつたんですね。

他にも在りますから見に行きましょう」

そう言つて移動しようとした瞬間、

「動くな！ 打つぞ！」

其処には、餅を突くやつ（なぜか血がついている）を構える兎の姿があつた。

「メーデー、メーデー、こちら地上人と遭遇、交戦を開始する」

そう言うのと弾幕を放ってくる。

しかし、手からではなく、後ろにある魔方陣から出ていた。

やも得ず弾幕をよけ追跡符による攻撃ショットを打つ。

『凶弾 スピードストライク』

俺達を狙う細かい弾幕が一気に放たれてくる。

『風流剣 瞳風雷』

スキルカードで向かい打つ。

しかし、中々当たらないままタイムアップ。

弾幕が消えてしまう。

『蛙符 手管の蝦蟇』

早苗さんがスペルを唱えるのがわかる。

『弾符 イーグルショット』

今度は、雑にあっちこっちに巻き散らかせる弾幕。

しかし、依然として細かい弾幕の集まりであることがわかる。

多分、当たたら一溜りも無いだろう。

俺は、回りに来ないように二枚目を唱える。

「『雷砲 直流電磁誘導砲』ッ！」

なぜか特殊ルビがついているが気にしない。

真つ直ぐ敵の方へ飛んでいった雷は周りにある弾幕ものの破壊していく。

しかし、当たったはずなのに相手は無傷で居た。

そのまま攻撃をやめ、次の手段を考える。

相手の弾幕も止み、

『銃符 ルナティックガン』

三枚目のスペルカードに入っていた。

『霊符 夢想封印』！

今度は霊夢がスペルカード使っているのが分かる。

しかし、相手は倒れない。

ここまでくると何か、裏があるように思える。

「さてと、アンタのことを教えてもらおうわよ」

霊夢の声が聞こえる。

どうやた霊夢がやったらしい。

「湖の畔に基地があるなんていえるわけ無いでしょう」

兎は涙目で言った。

次の瞬間、後ろから弾幕が撃たれた。

『月符 ムーンライト』

別の兎が救援に来たかもしれない。

『曲線 直流電磁曲線誘導砲』

第42話 「湖上の秘密基地」

守矢神社で体制を整えているところに、魔理沙と鈴仙が到着。

なにやら師匠から薬を貰っているらしい。

すごつく不安なんだが。

そんなこんだで夜に成ってしまっていた。

「それじゃ出発しますかね」

早苗がそう言い、守矢神社を後にする。

湖と言つて良いのだろうか？

守矢神社の隣にある湖に来ていた。

そこには、一つの豆腐と言われてもおかしくない建物があった。

ここが昼間に会った兎が言っていた基地だろうか？

それ以外にそれらしき建物が見つからないので、入ることにする。

中に入ると暗闇がひらがついて、魔理沙が八卦炉を使い明かりを付ける。

しかしあんまりよく見えない。

そう言えば兎は暗いところでも好く見えると言うことは、相手にとって有利って訳

か。

と、ここで左にガラスが見える。

ガラスの向こうには、なにやら機械っぽい何か窓から入る月光に照らされてうつすらと見える。

「こんな所に入って何をやる気ですか？」

何処からか、声が聞こえてい来る。

次の瞬間、四方八方から弾幕が迫ってくる。

「いい、けしてはられないで！」

霊夢が叫ぶが、既に鈴仙の気配が無い。

『天符 三番瀬の干潮』

弾幕を消し、状況を確認する。

やはり、鈴仙が居ない。

「やっとな終わった。」

全く、雑魚が強いのよ」

鈴仙が兎を連れてくる。

「まさか、その兎が？」

霊夢が兎を指差す。

「え、そうよ。」

屋上にボスがいるらしいから行くわよ」

そう行つて、兎を投げる鈴仙。

痛そう。

階段を上がり扉を開ける。

「お待ちしました」 M G M G

団子食べながらしゃべる妖怪。

その後ろにある月から赤いオーラが出ている。

「青蘭から M G M G 聞いてるわ M G M G 面白い人間と M G M G 対戦したつて」

それは俺達の事なのか？

「だけでも M G M G 変な感じよね M G M G 月の兎 M G M G 同士で M G M G 戦う

のつて M G M G 」

多分、鈴仙の事だろうか。

「ま、いいや M G M G 。

ここで M G M G 大人しく M G M G 倒されると M G M G 良いわ。

一度の M G M G 被弾ミスマスも許されない M G M G 狂気の弾幕にね M G M G 」

そう言つて、弾幕を展開してくる。

『兎符 ストロベリーダンゴ』

赤い色の細かい弾幕と白色の細かい弾幕が散らばっていく。

どうやら、イチゴと団子を表現しているみたいだ。

『恋符 マスターズパーク』

魔理沙がボムを使い、手柄を立てようとしているみたいだ。

次の瞬間、俺の目の前に弾幕が出てくる。

「つち、『天符 三番瀬の干潮』」

俺は弾幕を消して、反逆に出る。

『天符 北陸の大雪』

一気に相手の弾幕を凍らせながら攻撃をする。

「成る程M G M G一筋縄ではM G M G生かせてくれないかM G M G」

団子を食いながら言う敵。

『終結 終演結界』『風流剣 瞳風神雷』

「ああM G M GやられちゃったM G M G

それじゃM G M G彼方たちのM G M G見たいものへM G M G

いざM G M G月ルナティックキングダムの都へM G M G（みたらし団子美味しい）」

第43話 「アポロ経路」

あの兎・・・鈴瑚って言ったけな？

最後に言ってた言葉ってどう意味なんだろう？

それ以前にここ、宇宙？

あ、酸素があるから違うか。

取り敢え進んでみるしかないか。

と言いかさつきから雑魚が多くて困る。

スキルカードをぶっぱなせば良いけど。

それ以前に、これってもしかして精神世界とかっていうオチは無いよね。

はあ、雑魚が多い多い。

『活線 列車で行く日本一周の旅』

うーん、うちのクラスの奴らが多いな。

『物理 エターナルナイフ』

部長、それは怖いです。

「ちよ、おま」ピチューン

「魔理沙!?!」

どうやら魔理沙に当たったらしい。

と言うか、物理つてまさか、

「魔理沙————!」

やっぱり。

「ふいー、永琳の薬を飲んでおいで正解だぜ」

心配させるなよ。

『競技 横須賀京急のガチバトル—easy—』

はあ、その後知り合いが集団で襲ってくるが

『競技 京浜横須賀京急のガチバトル—normal—』

全くこのままじゃ逝つとけにを使うのとなに成増か。

「因みに誤字じゃ無いぜ」

「誰に説明してるの?」

突っ込んででは行けないんだぜ。

「何でこんな所に、つてもしかして生身!?!」

ビックリして顔がおかしくなるドレミー・スイート。

「えーと、生身なのか?」

魔理沙が聞く。

「何でこんな所に、獏バクが!？」

「あらあら、鈴仙居たのね」

「何ですか、二人とも知り合いなんですか？」

「・・・」

今は眠りなさい、貴方達の快夢は今作られる」

っ！

『結符 理論結界』ッ！

「あらあら、貴方には効かないのね。」

では、力付くで眠らさせるまで！」

『超特急 ドリームエクスプレス』

仕方がない。

『競技 東海道京浜横須賀京急のガチバトル—hard—』

これを使うと次は・・・。

「考え事をしている暇は在るのでしようかね? 『夢符 刈安色の悪夢』」

そう、ドレミーはスペルを宣言し俺の回りに弾幕が展開される。

「ボムッ 『天符 三番瀬の干潮』ッ！

『応急 逝つとけダイヤーlunatic』

お互いにスペルを掠り会ながら距離を取る。

此処はドレミーにとって有利な場所。

だけど、それじゃ、此方に持つてこれるとしたら？

『天符 関東の空つ風』『風符 狭きビル合間縫いし隙間風』

「！何で、私の能力が効かないの！」

スペルで一氣に空間フィールドを変えドレミーの能力を無効化、理論結界の効果で精神世界に戻すことは出来ない。

「これで終わりだ『風流剣 瞳風神全』」

しかし、いとも簡単に避けられえしまう。

「貴女達の快夢は無事作られました。

だけど此処から先に進むのであれば、私は知りません」

第44話「寂れの来ない町」

変な通路を抜けた先に有ったのは、氷でおおわれた街だった。

何もなくて人の姿のない街は只の廃墟としていた。

「本当、前に来たとき止まった変わってしまったよね」

そう、霊夢は呟く。

「しかし、こうなつたつてことは、まさか——」

そう言う風に鈴仙が言うが最後の方が全然聞き取ることが出来なかつた。

どうやら地上人には発言できないらしく、聞き取ることも出来ないらしい。

そんな事を話ながら道と思われしき所を歩く。

「と言うか、此処つて月の都で良いのよね？」

そう言う風に鈴仙が言う。

「そのはずだけど？」

霊夢が言う。

「ただど何も無い街は本当に只の寂れた街かと思われた。

「生まれ」ガクブルガクブル

そう言つて、兎は銃剣を構えているが腰が震えている。

あれは、レイセンだろうか

しかし、俺達には攻撃する理由はない。

「無視しよう。」

攻撃しないで、相手の出方を疑うんだ」

そう、指示を出す。

「もう、怖いんだから」

そう言つてレイセン（？）は銃剣を引く。

「はあ、『劍符 風切残刀』」

銃剣から出される弾を切りレイセンの銃剣も切る。

「さてと、『印符 せいりゆうしもうさこぶんふういん 清龍下総古文封印』」

レイセンを小さい結界の中に入れる。

「全く、こんな兎一匹からじゃ何も手に入らないわね」

そう、霊夢が言い兎を投げた。

「キャフー！」ドデン

雑だな。

「あらあら、兎を投げて何をするつもりなの？」

そこにいたのは、マントを付けた銀髪の女性だった。

「まあ良いわ、貴女達は私には勝てないから」

「そのセリフ、そっくりそのまま返してやるぜ『恋符 マスターズバーク』」

「甘いわね、だけど私は弱いから当たるとかもね」

しかし、その女性は全く弾幕に当たることなどなかった。

「以外に強そうね『霊符 夢想封印集』」

しかし、全く当たらない。

もしかして、”真逆の事を起こす程度の能力”？

そんな都合の良い能力が有るわけないか。

『雷砲 直流電磁誘導砲』

完全誘導のスペルで当たらないとなると、やはり仮設は当たってるか。

「それじゃ、当たらないはずの『玉符 鳥合の呪』」

それと同時に、弾幕に囲まれる。

どうゆう風にも避けても当たるとる配置のようだ。

ならば、消すまで。

『天符 三番瀬の干潮』

「ふうん、そうくるか『玉符 鳥合の二重呪』」

しかし、同じように絶対被弾の配置。

『理論 弾幕が消える日』

絶対何かが可笑しい。

なぜ、必ず被弾ルートにあるんだ？

『玉符 穢身探知型機雷』

またしても被弾ルート。

『劍符 風切残刀』

「そうね、彼方たちは絶対に負ける」

何言ってるんだこいつ？

第45話 「星条旗のピエロ」

銀色の髪的女性が指差した先、何も無い唯の月の海に出た。

そこには多くの闇を纏った妖精が大量のレーザーを撃つて来る。

ついでに、星の弾幕も撃つて来る。

「きゃはははははは！」

面白いことが起こっているわー！」

そういつて出てきたのは、星条旗模様の服を着た女性ピエロもどきの女性が飛び出してきた。

「妖精達よ、もつとスピードをあげていこうよー！」

そう言う風にピエロもどきが言うと、周りの妖精達が声を上げる。

「イツツ、ルナティックタータイム！」

「狂気の世界へようこそ！」

そう言うのとピエロもどきが消えて、さらに過激に成った妖精たちの攻撃が始まる。

「まったく、何なのよあの妖精、あの妖精のせいで雑魚共の攻撃が増したじゃない『無題

空を飛ぶ不思議な巫女』」

まったく、うざく感じるな。

「おとなしく焼け焦げな『雷符 雷流放刀』」

バチバチと言う風流剣を構え、敵を切っては投げる。

そんな感じで敵を一掃してもどんどん沸いてくる。

そんな感じで、どんどん敵が消えていく、

「随分と荒涼としていているところに来てしまったわね、だけど、私達が月の都を救う？」

何だか変な話になってきたなあ、それに何だか普段見かけない妖精達がハッスルしてたけど……

あいつ等は何処にでもいるのね」

そんな感じで霊夢が独り言を言う。

「それは違うなあ、本来、サーフェスマーン表の月は本来無生命の世界

妖精だって生まれ得ないのさ」

そういふうちに、さっきのピエロが出てくる。

「あ、さっきのピエロやろう！」

魔理沙が八卦路を構える。

「野郎はひどいな。」

私は、地獄の妖精“クラウンピース”。

この大地を友人様に載いてから、貴方達が初めての来客だわー!」
「頂いた?」

鈴仙が聞く。

「そうよ、あんまりは言えないけど友人様にこの月の都を貰ったのよ。
さてと、あたいの領地に入ってきたから排除するまでね」

そういつて一気に弾幕を放ってくる。

「そんじゃ、お構いなく『蛙符 手蛇の蛙墓』」

『劍符 風切残刀』

「はあはあはあ、こんな早くにやれるとは」

霊夢がお払い棒を構えて話を聞いている。

「さてと、あなたの負けよ、大人しくしなさい」

「何で!？」

妖精が、全力を出せる環境のはずなのに!？」

クラウンピースはおびえながら答える。

「そんなの私達には関係ないでしょ」

「あなたは一体!？」

「私は博麗の巫女、博麗霊夢よ。

覚えておきなさい」

「博麗の……巫女!？」

（「そんな、それじゃ勝てるわけないじゃん」）（小声）
「全部聞こえてるわよ」

そう言葉を残して霊夢はその場を後にする。

第46話 「俱に天を戴かずとも
| P u r e F u r
i e s」

月のくぼみ——いわいる海の反対側。

一つの洞窟の前にいた。

「何者だ！」

「またしても兎が出てくるが、今度は長髪のメス兎だった。

「何者って、博麗の巫女でしょ。」

「見れば分るでしょ。」

「そういう風に、霊夢は誇らしげに言う。

「そう見たいね。」

「正攻法では勝てそうに無いね。」

「でも月の科学を甘く見ないことね。」

永琳様永琳が作った開放符。

「こいつを使えば内部分裂を起こせるッ」

「そうやって兎は御札を投げってくる。」

しかし御札を交わし

『風雷 雷玉』

通常弾幕の代わりに打つ。

しかし、全然当たらない。

「マジックミサイルッ」

魔理沙が通常弾幕？を打つ。

所詮は雑魚。

スペルカードは使いたくないのだろうか？

「追跡倍増符ッ」

最初の札が戻ってきて、増えた御札が兔の急所にヒット。

「ダメッ！こっから先は立ち入り禁止なんだから！」

「だから、それが如何した？」

「いや、何でも」

そう言つて兔は洞窟の入り口に在った結界を外す。

「いかに策を練ろうとも、相手はそれを乗り越えて来る。

口惜しや。もう少しで宿敵に手が届くというのに」

そう言う風に、狐妖怪の女は言う。

「貴女が月の都に侵略した張本人ね」

そう言う風に霊夢は言う。

「とりあえず負けを認めよう」

「あああ 霊夢、理由を聞こうか？」

そう言う風に俺は聞く。

「まさか月面に地上人を送り込むなんて、頭の片隅にも無かったわ。

僅かな瑕疵でも厭う月の民が、こんな姑息な手段を使うなんてね。

私の読みが甘かった。

既に勝負は決したって事よ」

そう言う風に理由を述べる。

「随分と余裕ね。闘いはこれからなのに」

「私の名は純狐。

月の民に仇なす仙霊である。

正直、今回の戦意は喪失したが……ここまでやってきた貴方を持って成してやろう。

それが礼儀つてものでしょう」

「そうだな、では遠慮無く『天符 北陸の大雪』」

以下第三者目線

いつもと明らかに様子が違う湖南は一気にスペルカードを発動する。

弾幕は彼の能力で誘導され明らかに敵のほうに向かって展開され、味方には全然当たらないのである。

『霊符 夢想封印』

とあるゲーム——ラク○キ王国において隠しキャラ・ハクレイのミコが使っていた技である。

しかし、敵はすばしっこくなかなか当たる気配がしない。

『恋符 マスタースパーク』

『蛇符 手管の蛙墓』

霊夢をライバル見ている二人も負けじとスペルカードを放つ。

「そうね、本当は使いたくなかったのけれど。」

スペルカード『障壁イビルアンジューレーション波動』

鈴仙もスペルカードを放つ。

次の瞬間、敵が倒れたのは言うまでの無い。

第47話 「切り札はいつだって最悪」

主犯をフルボッコにして異変を無理やり解決した。

そんな中で、ただ一人だけ明らかに様子がおかしい人物が居た。

半人半妖の次期神主——坂上湖南で在った。

本人はただ月の環境に疲れただけと言っているが、明らかに無理をしていた。

周りの人が休むように言っても、”本人は大丈夫だから”と言って、休むことは無く歩き続けていた。

「!」

一緒に歩いていて、何かを感じた湖南はそのまま感じた方向へ、向かっていつてしまった。

「あらあら、また来てしまったのですね」

そう言つて、ドレミー・スイートが弾幕を放ってくる。

「さてと、教えて貰いましょうかね。」

月の都を夢の世界に閉じ込めた理由」

そう言う風に弾幕を避けながら、理由を聞く。

「何故、それに気付いたのですか!？」

そう言う風に、弾幕を打ちながらビツクリする。

「単純に俺の右目で見えたから、それだけ」

「そうですか、では、消えてください『超特急 ドリームエクスプレス』」

『風流剣 瞳風神雷』

「そうですか・・・、この先に進んでも何も無いですけどね」

月の都の奥・神殿

「何の用ですか？」

そう言う風に言って、出てくる妖精。

左手には、地球。

右手には、月を持っている。

「あんだだろ、月の都を精神世界に入れ替えさせたのは」

「何ともいえないな、まあそれを知っているのであれば消え・・・狂気!」

「消えるのはお前だっ! 『鉄符 混雑激しき5号線』」

そう言いながら弾幕を放つ。

スカイブル
水色の弾幕は混雑率198%の電車の中にある”乗客・zip”の様にどんどん増えていく。

『鉄符 ダイヤ乱れし13号線』

茶色の弾幕は、一定の法則を持っていたが突然乱れて襲ってくる。

『鉄符 戦前からの狭き3号線』

今度は黄色の弾幕が狭い逃げ道を作って迫る。

『鉄符 戦後の規格外4号線』

赤色の弾幕が大回り弾幕を打ってくる。

『鉄符 小さきカーブ2号線』

ねずみ色のレーザーが細かいカーブを描きながら移動する。

「さっきから、ごり押しねー。」

でも、甘いッ

弾幕が展開される中に、一人の物理攻撃で攻めていながら喋る女性。

『鉄符 13号線勝負』

弾幕を纏った六角石風流剣を相手の攻撃を防ぐ。

そして、相手の体力をどんどん削っていく。

「まあ、教えないけどヒントは上げる。

人間はあるものが無いと生きていけない。

さようなら〜」

そう言って、湖南は強制的に幻想郷に戻される。

「しかし、あの少年。

正気の沙汰では無かったわね」

そう言って、その女性はその場所を離れる。

第5章 「神の裁きは幻想となりて」

第48話 「酒！飲まずには居られない！」

異変解決の後に必ずやるもの。

それは、宴会。

幻想郷中の神妖が集まって酒を飲み交わす。

勿論、主役は異変の関係者である。

しかし、幻想郷でお酒が飲めるのは自立できる15歳からである。

勿論、異変解決に関係していた早苗は強制的に飲ませられて、すっかり出来ていた訳である。

それを見ていた、鬼共は「もっと飲めよ」とさらに進めている。

「しかし、静かにできないものかね」

奥で倒れていた湖南が扉を開けて出てくる。

夕方、霊夢が宴会の準備をしていたときに倒れているところを発見し、奥で休ませ居

たのである。

本来であれば、異変解決に関わった一人として、宴会に出るはずのだが、倒れていて起きそうも無いので、無視して始まってしまったのである。

「お、起きたか。

では、酒を飲め」

そう言つて酒を勧めてくる萃香。

「だが、断るっ」

しかし、それを断る湖南。

「何でだ、鬼の酒が飲めないって言うのか」

萃香は怒りながら酒を飲む。

「だて、未成年だもん。

それに、幻想郷では15歳未満は酒を飲めないんでしょ？

俺は14だし」

そう言う風に理由を言う湖南。

外の世界では、普通の理由である。

「ああん? —— の癖に生意気なことを言うじゃない」

そう言いながら酒を飲む萃香。

「萃香、そこらへんでやめなよ」

そう言う風に抑える霊夢。

「見つけてたッ!今すぐこの幻想郷から出て行きなさい!」

そう言う風に言いながら飛び降りてくるレミリア。

その跡を追いかけて降りてくる、紅魔館組。

「なんていうことを言うだぜ、レミリア。

酒が不味くなるんだぜ」

そう言う風に言う魔理沙。

しかし、酒を飲んでいるため説得力が足りない。

「貴女は知っているはずよ、その半人が暴走する事を」

レミリアは「スピア・ザ・グニングル」構える。

「なにおう!」

そう言う風に怒る魔理沙。

「ッ!」

次の瞬間、幻想郷中が雷雲で覆われた。

神界

「さて、行きしよ。

ワールドリセット

世界再始動を止に」

「分かりました！」

「たかだ人間ごときに負けるんじゃないぞ」

「しかし、本当沿うだつら良いんだがな」

そう言つて、神界からとある集団が出発した。

???

「そうですか、始まりましたか。

面白くなりますよ」

そう言つて、この様子をずっと見ていた男性は笑いながら言う。

「しかし、我々の情報がもれているということは無いだらうか」

「そんなのあるわけ無いじゃないか」

「だったら良いんだが」

そう言う風に話す二人。

この二人が、今後の異変の主犯になつていくことは誰も知らない。

第4⑨話「古き知恵は風と化する前編」

幻想郷に雷雲が広がってすぐに雷が落ち始める。

「今すぐに終わらせるぜ。『恋符 マスタースパーク』」

魔理沙がスペルカードを放つ。

しかし、弾幕誘導の効果で中心に放ったはずなのに全然当たってない。

「何ダソノヘナチヨコ弾幕ハ。」

俺ノ右手ヲ0トシテx45y|02z|30ニ向ケテ雷撃」

それを宣言した習慣、魔理沙に雷撃が発生する。

そして魔理沙が構えていたミニ八卦炉が壊れる。

「な、バカな？」

「魔理沙、下がってなさい」

霊夢が御払い棒を構えながら魔理沙の前に出る。

「止めなさい。

貴殿方達が関わっても勝つことはありません」

そう言う風に出てくる女性。

「誰？あんた」

「そうね、この子をよく知る女神って所ね」

そう言う風に言ってから、霊夢を遠くに飛ばす。

「そんじゃ、始めましょう。」

対象を傷つけないようにね」

そう言われて一気にフォーメーションを組み上げる。

「東方ね……。」

創作『銀河崩壊物語』

一気に空から星の弾幕が落ちてくる。

しかし、一発も当たらない。

それもそのはず。

これはあくまでも、囿であるためである。

『理論 弾幕が消える日』

「そんじや始めて」

そう言う風にアザトースが宣言するとすぐ後ろに居た男性の神が始めた。

「若干痛いと思うが、我慢してくれよ」

そう言つて一気に手をかける。

次の瞬間湖南が二人に分かれる。

別れたほうが一気にテレポートする。

残ったほうが姿が変わつて小さい女の子の姿になった。

「とりあえず持ちこたえて。」

その間に目覚めさせておくから」

そう言つてアザトースはテレポートをする。

湖南が目覚めた場所は洞窟の中だった。

「やつと目覚めたようね」

そう言う風に言うアザトース。

「！」

湖南はびつくりしあわてて起きようとするが体が動かない。
体に負荷が掛かりすぎて動けそうに無い。

「あの、ちよつと——」

湖南は赤くなりながら。

「——退きたいんですけど」

「嫌ね」

何故なら、湖南はアザトースが膝枕をしていたからだった。

「うー——☆」

しばらくそのまま時が過ぎていく。

しかし、初めての膝枕であった湖南は休むこともできなかつた。

5分後

「何とか、体動くようになったけど何か足りない」

そう言う風に言いながら起き上がる。

「妖力0・霊力30%の状況で戦えるのかしら？」

心配そうに言う。

「大丈夫・・・です」

（本当かしらね？）

「それじゃ、戻りますか」

そう言う風に言つて魔法陣を展開し、そのまま消える。

第50話 「古き知恵は風と化す後編」

幻想郷の中に響き渡る雷鳴。

それを起こしていた張本人は湖南の姿をした妖怪であった。

破壊に関して快感を得るその妖怪は、どんどん幻想郷の自然を破壊し続けていた。

必死になって抵抗する住民もいたが、攻撃を無効化する彼の前では全くの無力であった。

ところ変わって、湖南の魂は、幽霊として分裂していた。

肉体と霊体の間にある細い線をたどって何とかして止めようとしていたが、彼は存在するだけの最低限の霊力しか持っていなく、これでは能力どころか弾幕すら出せない状況下にあった。

「所で貴殿方はこの状況をどうにかすることが出来るのかしら？」

「どうするにもこうするにも、とにかく返してもらわないと」

「オソイオソイ、イツマデマタセルンダ」

時間稼ぎに出ていた神々はすべて倒されて、借り物姿の妖怪のみが残っていた。

「マ、イイヤ。」

、サテトアソビニイクカ」

そう言う風に言っ出て出ようとした時

「我衣に秘められし力を解き放ち、この場に頑丈な結界を張りたまえ、スキルカード『終結終演結界』」

聞き覚えのある術式とともに妖怪を封じ込める。

「ね、言っただでしょ手段があるって」

「ま、貴方の技の半分以上が自然現象だからできたことだけど」

「とりあえず、体だけは返してもうよ」

そう言う風に言った瞬間、実体が出現する。

何という謎技術だが、一応結界内の方はと言うと、黒い影が出ていた。

「すみませんねアザトース様、後は僕の方で殺やつと来ますから」

そう言う風言いながらにお札を構える湖南。

「大丈夫かしら？」

心配そうに言うアザトース。

「大丈夫です。」

これは僕の問題なので僕でやりますから」

「そう」

「そんじゃ、キチンと封印されて下さいね」

そう言う風にお札を構えながら言う湖南。

「アナタハコワレナイ人間？」

「弾幕ごっこ程度ならば」

そう答える湖南。

「ソレじゃ、カンタンニコワレナイデネ」

次の瞬間、結界の中で魔方陣を展開し始めた。

「つち、面倒な」

そう言う風に言いながらお札を展開する。

あちらこちらで御札が止まり、一つの巨大な儀式場を形成していく。

「ソウハサセナイ」

そう言う風に黒い影が言うと一気に弾幕が形成されていき、やがて結界内の様子がまったく見えなくなってしまう。

これでは相手が何処に居るかわからずそのまま発動すると威力が薄くなってしまう。

「それはどうかな『印符 清龍下総古文結界』」

次の瞬間、あちらこちらの御札が一気に小さくなり結界に張り付く。

「これで終わりだね」

しかし、次の瞬間湖南にある姿が見えた。

「威力縮小！」

そう宣言した瞬間、結界の圧力が下がる。

その後結界の中の様子がわかる。

「！解除」

結界を解除して、中にあるもの広いあわてて木陰に置く。

第51話「白紙のように白い女の子」

「？」

目が覚めると木の下で寝かせていた。

しかし、何故この場所に居るのかわからない。

と言いかさつきから暖かさを感じる。

私は、すつと横を見る。

そこには男性の姿が見えた。

あれが人間の温もりやさしさと云うものだろうか？

しかし、人間の温もりすら感じたことが無い私にとってはまったく分らない物であった。

「あ、気がついたが」

そう言う風に男性が言うのが分かる。

しかし、なぜかあの男性の事についてはなぜか分るような気がする。

「よかった、あのまま封印してしまう所だった」
？

封印？

何の事だろう？

だけれども、私には分らない。

ただ分ることといえば、この人が始めて私にやさしさと言うものを教えてくれたことだった。

「ねえね、何でこんなことをしてるの？」

私は、知っているわずかな言葉で聞いてみる。

そして、お返事はすぐに返ってきた。

「何でって、俺は怒りに任せて一線を越えてしまうところだったんだ。」

そんな奴がほったらかしにしてもいいと思うのか？

俺はただ、お前さんのことに気づいてたけど、遅くって、何かが封印されてるかもし

れないんだよ。

そんな奴をほっとけるかっていう話だろ？」

そんな事って、私はそのまま放置されても良かったのに。

私は、その場から離れようとしたが、まったく体が動かない。

というか、体が言う事を聞かない。

どうやら私は、この男性から離れたくないみたい。

「そんじゃ、場所を移動するか」

そう言う風に私を背中に乗せて、そのまま空に飛び出す。

この男性はそのまま何食わぬ姿でどんどん高度を上げていく。

私は眠たくなってそのまま寝てしまった。

さてと、博麗神社まで戻ったわけだが、何これ。

「あ、湖南お帰り」

そう言う言う霊夢。

「とりあえず奥の部屋借りるぞ」

そう言う風に言いながら奥まで進む。

「さてと、下ろしますか。」

「……寝てるな。」

困ったな、起こさないように下ろして寝かせるか」

そう言う風に眩きながらすつと布団に寝かせる。

やはり、封印してしまったのか？

「ちよつと、魔理沙！」

はあ、何やってるんだがあの子は。

俺は、部屋を後にして外に出る。

「霊夢、お前だつて出来なかつたじゃねえか」

「だからつてなんで私の服着てるのよ！」

何だよと庭を見ると魔理沙が巫女服を着て空を飛んでいた。

「霊夢は、異変解決のいの字もやってねえじゃなえか、だから今日から私が博麗の魔法使いになるんだぜ」

「もう、魔理沙つたら！『夢想転生』！」

ほつとこう。

庭を後にしてあの子を寝かせた部屋に戻る。

第52話「妖女と下総の半人半妖」

目を覚ますとそこは見慣れない部屋だった。

体を起こしてみると、布団の上に置き手紙が置いてあることに気づいた。

”さすがに夜になってまでお前の面倒を見ることには限界があった。

それと、御腹が空いていたときのために握り飯を用意していたから、食べとくと良いよ。

上湖南”

その手紙の横にはお握りが置かれてあった。

私は手紙にかいてあった通りにお握りを食べることにした。

僅かな塩味と香ばしい香りのする焼き魚が入っていて、美味しかった。だけれども、それだけでは物足りない。

もつと知りたい。

そんな思いが心の底から沸き上がってきた。

いつか聞いたことがある。

——人間に武神にさせてもらえれば、一緒に行動することが出来る——
そうだ、武神にさせてもらえば良いんだ。
早速、戻ってきたらお願いしよう。

「フエクシヨイ！」

うう寒気がする。

「風邪？」

心配する霊夢。

「いや、この季節に引くわけがないだろ（誰か噂してる）
（誰かが噂してる見たいね）

霊夢の勘はすごいと思う↑邪気眼使用

「居た！」

ねえねえ、私を武神にして！」バサツ

置くから出ていきなり飛び付いて言う事がそれかよ。

「はあ？」

「何言ってるのお前？」

「貴方も厄介な子に纏われ憑かれてたわね」

「いや、霊夢助けてよ」

「はーい、武神と聞いて飛んできましたよー」

スキマから出てきた紫に助けを求めようとする。

「残念だけれど、貴方を助けることは出来ないわ」

「ちゃっかり心を読むのは止めてください」

俺はさすが突つ込む。

「良いじゃない♪」

「いや、良くないでしょ。」

「それじゃ、武神について説明するわね。」

武神は双方の了承があり、かつ信頼を寄せ会うことが前提条件とかるわ。

そして、きちんとバックアップが出来ればそれで、成立となるわ。

武神として動かすには、式による演算が必要だけど、それは今は関係ないわ。

それじゃこれをお互いにもって念じてね」

そういつて俺とあの子の手にカードを握らせる。

しかし、何にも反応が起きない。

「やはりね。」

所で彼女の事についてきちんと知っているのかしら？」

いや、名前すら知らない。

「でしようね」

だから心を読むのは止めてください。

「その子の名前すら無いものよ。」

当然ね狂気から産まれたものなのだから。

そのせいか吸血鬼の狂気が消えてるみたいだけど。

それより、当然ながら狂気から産まれた存在に名前なんてあると思う？

本当にそうならば武神契約も結べないわね。

だけれども次第に種族は、変わっていくもの。

暫く一緒に過ごすことね」

そう言う風に紫は笑顔で言う。

ああー、不幸だー。不幸だー。不幸だー。

第53話「新人教育——世界に新たに生まれし生命——」

紫にとりあえずは三日間、一緒に過ぐすことねと言われて、外に連れて帰ることに
なつてのだが、見るものすべてが珍しいのか、あつちこつちを見て回っていた。

「はあ、家に着いたぞ」

とりあえず、家に帰つたのは良いけど、名前どうしようか。

「お帰りなさい、と言うか、また、面倒事に巻き込まれているのね」

俺の右側を見て言う。

「名前……、どうしようか」

とりあえず、靴を脱がせて、家に上げて、色々教えて、とりあえず何とか落ち着いて
いた。

「名前……」

俺は、ずっと難題に悩んでいた、名前がないと色々面倒だし、どうしようかほんと。

「そうね、今は四月だし、」
卯月うづき 春日はるひで良くないかしら？」

なるほど、季語と来たか。

確かに卯月つて言う苗字も在るみたいだし、悪くないか。

「それで行くか」

とりあえず、春日を呼び、名前を教える。

「お兄ちゃん、ありだと♪」

やばい、可愛い過ぎる。

「困みにだが、その名前を考えたのは俺じゃなくて、その巫女さんな」

俺は訂正を求める。

しかし、居候が増えるところちとしては色々と面倒なんだよな。

あ、そろそろ植え時か、今年は何を育てようかな？

「とりあえず飯を作るか」

はあ、何を作ろうか。

— 2 —

いつもご主人様が幻想郷から帰ると何かしらの面倒ごとを持ってくるんだから困る

のよね。

まあ、ご主人様が楽しそうで良いのだけれども。

「このお守りをください」

あ、

「はい、300円です」

そう言ってお金とお守りを交換する。

「はい、ありがとうございます」

さっきのお客さん、子供をつれていたわね、進学した子のなのかしら？

そう言えば、ご主人様ったら、始業式にも出てないのよね。

まあ、特欠扱いだから良いのだけれども。

確か、高校にも行かないのよね。

私たちのことを思つてのことだと思ふのだけれども。

だけれども、自分の事をまったく考えていないのよね。

まったく少しは自分のことを大事にしてほしいのだけれども。

そう言えば、ここ最近と言うか、私の知る限り一週間何も無かつたっていう事は無かつたような気がするのだけれども。

私が作られたのも、異変の最中だったのだけれども。

「すみません、豊作祈願ってどれかしら？」

豊作祈願？

何でまた。

「これですね、畑にまくと豊作になります」

私は、置くから清めの粉を渡す。

「これを、二つくださいな」

「はい、1000円です」

私は置くからもう一袋持ってくる。

すでに、お金が置かれていた。

「はい、確かに預かりました。」

豊作になると良いですね」

そう言いながら、清めの粉を渡す。

「そうですね」

そう言つて農夫さんが帰っていく。

しかし、ここらへんで農家ついていたかしら？

「おーい、昼飯だぞー」

置くからご主人様の声が聞こえる。

私は、休憩中と書いた紙を置いて、休憩に入る。

第6章 とある下総の半人半妖 Thunder wi

nd j e r m e n t o r .

第54話「久しぶりの学校」

学校を実質サボり状態に成っていたので久しぶりに学校に行くことにした。

もつとも、受験をするわけではないので中学校の授業を受ける意味はないのだけれども。

「遠い・・・」

学区の端から行くと25分かかるんだよな。

さらに新町からわざわざ通う物好きも居るけど。

「やっとなつた」

歩くこと20分後、なんとか学校に着いた。

あ、そう言えばもう授業とか始まっているのか？

別に授業に遅れるわけではないけど。

「おい、坂上今まで何をしていた!」

校門で担任が待ち構えていた。

「え……(どうしよう、幻想郷での事を言うことわけでもないし)」

「ま、良いからとりあえず来い」

そう言われて着いて行った先は屋上だった。

「それで、何があったのか説明してもらおうと思ったのだがな、お前いったい何をした?」

そう言いながら封筒を取り出す先生。

「まったく、学園都市から招待状が来るなんてな」

そう言う風に良いながら中の書類を出す先生。

そのまま、中の書類に目を通してみる。

“招待状

拜啓 坂上湖南様

学園都市統括理事会は、本日^{デュアルスキル}多重能力者の参考として貴方を5月6日から2週間、学園都市にご招待させてさせていただきますました。

もし、お越し頂けるのであれば5月6日午前10時に新立川駅の北口改札にお越しい

ただければ幸いです。

学園都市統括理

事会”

．．．。

「え、先生何ですかこれは？」

「とりあえず、八雲紫に相談してから決めるんだぞ。」

「ついでに先生は幻想郷の協力者だからな」

「良い先生に当たって良かったと思うぜ。」

「はい、分かりました」

「お、坂上じゃないか今まで何してたんだ？」

「教室に入るとすぐにクラスメイトが話しかけてくる。」

「いろいろとな」

「そういう風に言つて机に鞆を置いて朝の支度をする。」

「しかし、俺が学校に来ているとの情報が回るが早く、朝の会が終わると直ぐに集まってくる。」

もつとも、この中には物珍しきで来ているの奴が多いんだけど。

「ま、居るわけないか」

そう言いながら、教室の中に居ながら時間をつぶす。

一時間目は学活かよ。

「授業を始めるぞ。」

そんじゃ、学級組織を決めるから、まずは学級委員長から」

やはり北本がやってくれるのか。

これで前期は安全だな。

「北本以外は居ないのか・・・。」

そんじゃ、北本決意表明を頼むぜ」

「1年の時も学級委員長をやっていて、今年もやらせて頂きます。」

学級を学年一のきれいなクラスにするので、よろしくお願いします!」

「はい、ありがとう。」

次は副学級委員長、男女1名ずつだぞ」

手を上げたのは横芝と高島か、うーん、二人とも知らんが良いか。

その後も役員決めは続いたか、手を上げずに終わってしまった。

第55話 「結界破りの天才少女と無力干渉」

入浴

日本人が好んで行うことであり、体を休める効果があるという。

しかし、海外の人々はシャワーのみで済ませてしまいうらしい。

浴槽は、うちにもある。

ある程度大きいのだが、混浴はまずいので一人で入っている。

——昨日はいろんな意味で大変だった——

そんな事を考えながら服を脱ぐ。

共犯はそんな事をしないからいいけど、春日はまさか突っ込んでくるとはな。

「取り敢えずと『終結 終焉結界』」

——不思議な力に掻き消された——

.....。

「は？」

え、何拒否されたの？

いくら付喪神が沸くって言っても結界まで発生するもんなの!?

「……『結符 風見結界』」

取り敢えずこれで我慢しよう。

今度から扉を閉めると結界が発動するようにしないとな。
そんな事を考えながらさささと体を洗い、湯船に入る。

「えーい、壊しちゃえ！」

パリン！

え？

「妹形入浴アタック！」「飛鳥文明アタック！」

「ぐふう」

「とりあえず、何でこんなことをしたのか聞こうか」

俺はタオルを巻いてから理由を聞く。

「さびしいから」

「今度からやめてくれよ」

「うん」

俺は共祇を呼び風呂をでる。

「全然ゆつくり出来なかった」

レスファレスアレソファレスファレスファ→レスガチャ

「はい、もしもし?」

『あ、湖南か?』

「何すか先生」

『お前に三者面談の事を聞くのを忘れてな』

「それで、何ですか?」

『お前、志望校何処にする気だ?』

「えっ……(やばい考えてなかった)とりあえず神社の仕事を継ぐつもりですけど?」

『そうか、それと、部活の継続届け早くしてくれよ?』

「はい」

『そんじゃな』

……、面倒なことになったな。

「とりあえず考えないとな」

——何故ならば、その邪気眼はいつか必要になるからです——

ふとアザトースの言葉を思い出す。

そう言えば、何の事だろう？

確かに邪気眼は問答無用で発動するけど。

っ!?

——「何だよ、何でこんなことになるんだよ!なあ——!」——

・・・何だよ今は。

未来は見えないようにしているって言ってたよな？

それじゃ、これは一体・・・？

まさか、これって。

ふと時計を見る。

10時・・・。

「お前いい加減に寝ろよ!」

後ろで騒いでいた春日を寝かせる。

「風渡雷神様、過去にあのような事があったんでしょうか？」

俺は、昔から事情をやる雷神様に聞く。

『いや、しらんのお（まさか、誰かが干渉してきてるのか？）』

「そうですか」

雷神様が知らないとなると、まさか未来の出来事か？

「考えても無駄か？」

（まさか、な）

第56話「学園都市」

改札機にカードをタッチして改札内に入る。

通勤時間帯と言うこともありホームへ上がる通路はどれも混んでいる。

「流石混雑率ワースト1位この時間を選んだのが間違えだったか？」

俺はそう眩きながら階段を上がる。

数多くのスーツをある中、学生服を着ていると浮いてしまうのか？

「まもなく2番線に電車が到着します。白線の内側で御待ち下さい」

いや、もう止まってるし。

俺は押し込まれく人混みの中電車の中に入る。

辛い……。

「間もなく中野です。」

お出口は右側です。

この電車は三鷹行きです。

中野から先は中央線線内も各駅に止まります。

本日も御利用くださいまして有り難うございました」

しかし、俺は快速に乗り継ぐ。

直通？

俺は座りたいんだ。

「快速の高尾行きです。

次は荻窪、吉祥寺、三鷹、武蔵境、東小金井、武蔵小金井、国分寺、西国分寺、国立、新立川、お出口は右側です。

南武線、北環線、武蔵野鉄道新拝島線はお乗り換えです。

3番線到着します。

お出口は左側です。

南武線快速川崎行き1番線から50分、そのあと普通川崎行き52分、北環線、青梅・五日市線直通、小手指回りの青梅・武蔵岩井行き6番線から55分、武蔵野鉄道新拝島線拜島快速新新宿行き00分、そのあと各駅停車小平行き02分、そのあと本川越行き12分です。

この電車次の新立川で後続特別快速待ち合わせの為に少々停車します。

新立川の発車は49分です。

なお特別快速は新立川48分の先発です」

中央線新設区間上にある新立川駅。

北口には武蔵野鉄道新拝島線（拝島に行くとは言っていない）と北環線が乗り入れている。

「一応制服で来たけど、必要なかったかな？」

俺は北口の改札口で手紙の指示通り待っている。

元々今日は学校公開の振り返りで休みなんだよな。

「無駄なことがあると思いますか？」

学園都市は教育設備の集合体ですから制服を着ていただく都合がいいのですよ」

そう言う風に言う女性。

「そうですか」

俺は返答を返す。

「ええ、それでは向かいましょうか」

そう言つて俺の右手を掴んだ週間風景が変わり部屋の中に出る。

「座標移動？」

俺は適当な憶測を出す。

「あらら、直ぐにバレましたか。

とりあえず、今日は観光をしても構いませんよ?」

そう言つて封筒を残して部屋を後にする。

「授業の成果なのかな?」

俺はそう呟きながら封筒を開ける。

中には書類と携帯とゆうか通信端末が入っていた。

書類は学園都市内のルート等が書かれている紙と地図が入っていた。

「取り合えずどうしたものか」

第57話「とある変〇の風紀委員《ジャッジメント》」

拠点と成っているホテルから外に出る。

科学が発展しているとはいえ、さすがに空飛ぶスケボーとか車はないか。

変わりに沢山の学生が街を歩いていると思つたらそこまでは多くなかった。

「みんな学校だからそこまでは居ないか」

学生が居ない学園都市の中をぶらぶら歩いてみることにした。

大通りということもあり、両側に店が並んでいるがほとんどの店が閉まっている。

というかこの生徒はどうやってお金を得てるんだ？

「おい、ちよつと君、学校はどうしたんだ？」

明らかに武装した軍人（？）に声をかけられる。

「学園都市って治安悪いのかよ『風流剣 瞳風雷』」

「おい、何をするんだ！」

というかこんな能力者って居たか？

「こちら19190000、暴走能力者と対戦中応援を求む場所は！」

っち、面倒な、電波妨害して置くか。

「お待ちなさい！」

ジャッジメント
風紀委員ですの！

応援要請にあつた暴走能力者って貴方のことですよ！

大人しくしないと拘束しますわよ！」

そう女子中学生（？）が言う。

というかなぜか右腕に腕章を着けているのだが。

って言うような事を考えているといきなり鉄矢が飛んできた。

「危つぶね、殺すきかお前！」

「抵抗しない限りは行いません。」

私だつて始末書書くのは嫌ですし」

「めんどくさいけど『風流剣 瞳風雷』

「弾幕を張る能力者!？」

初春、この能力の正体は！」

『ちよつと待つてくださいいね・

つてあれ？

白井さんその能力で合ってるんですか？』

「それはどういう意味ですの初春?」

無線でやり取りしているらしいが、テレポートを続けられて弾が当たらない。

『そのような能力は書庫バンクに載って無いんです』

「初春!それは本当ですよ!」

『ええ、詳細はマシンパワーが不足しているので230万も見れていないのですが、目次から見る限りそのような能力は見つかりませんね。』

学校の方から調べてみたいので、服装を送ってみてください!』

「面倒ですね、とにかく上から撮って見ますわ」

「つち面倒な『風符 風中同化』」

弾幕は出しっぱなしにしといてあるから、当分はばれない筈。

「そんな、視覚障害ダミーチエックつて、そんな多重能力デュアルスキルなんて!」

おいおい早く気づかされても困るんだけれども。

『白井さん、正体不明カウンスターストツつて可能性は無いでしょうか?』

それとその制服はその学区のものではないですね』

「初春、色々聞きたい事が有るのだけれども、まずは正体不明カウンスターストツとは何のですの?」

『そうですね、簡単に言えば、何もかも分かっていないって言うことです。』

能力についても何も分かってないというですし、大体誰の能力かも分かっていませ

ん』

「次に、あの制服は何処の物ですか？」

テレポートしまくっていた少女がもの影で俺の事を探っているらしいが無理だぜ。

『単純に言えば、あれは外の標準制服ですね。』

学園都市の予定を調べたところ、今日から一週間外から、多重能力者の参考人として

訪問者が来ていますね。

名前は、坂上湖南、能力は風雷操作と理論創造の二つに成っていますが、白井さ

ん見事に予想的ですね』

「ちよつと待ってくださいの初春、訪問者って言うことはもしかして」

『あれ、もしかして白井さんもう攻撃したりしてます？』

だとしたら今すぐ止めた方が良いでしょう？

統括理事会から極力の行動支障を排除するようにって要請されています。

もしかしたら始末書かも知れませんか？』

「ちよつ、初春それってまさか——」

次の瞬間、携帯の着メロが鳴り響く。

「——って何ですか？」

「——分かりました、とりあえず始末書をつて、ええ？」

書かなくてよろしいのですか？

え!? 分かりました、では、そういたしますわ。

はい、分かりましたわ、では、失礼しますわ」

第58話 「とある人物の自己紹介」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「アーむうん、美味しいー」

「取り合えず、状況を整理したいから佐天さん、一回パフェ食うの止めようか」

「えー、何でですか御坂さん？」

「取り合えず状況を整理しようか」

「はあ、はいですの」

「まず、今朝俺が学園都市に来て」

「私が、誤って交戦をしてしまい」

「上の方から、一緒に行動すること言われて」

「それで皆でいつもの店で話して見ることになって」

「いま此処ですね」

「如何してこうなったし」

カフエオレを飲んで一言呟く。

「取り合えず自己紹介から始めましょうか」

取り合えず自己紹介つて話を脱線させるな。

「取り合えず私からですな。」

常盤台中学2年、白井黒子ですわ。

基本的には、お姉様の露払いをしていますわ」

「同じく常盤台中学3年、御坂美琴よ。」

呼び名は何でも良いわよ。

能力は超能力レベル5の発電能力エレクトカルマスタね」

「えーと柵川中学2年の初春飾利ういはるかざりです。」

特に特筆する事と言え、情報能力ぐらいいすかね」

「同じく柵川中学2年の佐天涙子さてんるいこです。」

能力も何もありません」

「えーと特能学園中等部1年の中目田奈なかめたなです。」

能力は、良いですよな？」

「後は俺だけか……。」

浦安市立富士見中学校3年坂上湖南。

「能力は皆知ってるから良いよな？」

「ええ、それでこれから黒子どうする気なの？」

「あ、渡された本ホテルに置いてきちまった。

「そう言えば葉を挟んでつけたけ？」

「あれ、観光マップだったらネットで見れますよ」

「初春つと名乗った女子中学生がノートパソコンで見せてくる。

「いや、そうじゃなくって”偽造収納符・同名移動”何ちやつてな」

ポトン

「翳していた手を離すと本が机の上に置かれている。

「あれ？」

「本って在りましたっけ？」

「いや、無かったわよ」

「さてと、タネを明かそうか。」

「此処で問題だ、パソコンで同名のファイルを開くようにプログラムしたらどうなるか

？」

「えっ、複数ファイルを開いてしまいエラーが出ますけど？」

「そこでファイル検索をかけて普通にファイルを出す？」

「ファイルが入れ替わって出てくることありますけど——あれ？」

「その理論だ。」

同名移動って言うのはこの本に挟んである葉とまったく同じ番号、此処でいえば2—433—4って番号指定して有るからその間を移動するようにしているから、この様に移動する訳だ」

そう言う風に言いながら、机の端にあるペーパーを飛ばす。

「成る程、私の空間移動テレポートと似たような物ですわのね」

「一旦、話を終わらせますね」

「初春、誰に説明していますの？」

第59話 「とある庭師の半人半霊」

「御坂様？」

「ア—もう何よ、面倒くさいわね」

「あれ？」

妖夢、此処で何やってるの？」

「うそ、妖力ってあれ？」

「いや、なんで白井と同じ腕章付けてるの？」

「え、いや、その、ゆ、紫様、どう言う事でしようか？」

『さてと此処では邪魔だから、精神会話テレパスで話すわね。

まったく妖夢、貴女は幽々子からのお願いで特能学園に送ったら、常盤台へ交換留学したと思つたら今度は——の——にで会うなんて考えても居なかつたけど、彼はさつき言った様に——だから、幻想郷の関係者だから別に敵対する必要は無いわ
『よ』

『紫様、つまりこの方は——の——だから敵対するのは止めろと。

いや、真実は斬ってみれば分ります』

「いや、ちよつとだからつて簡易スキマから日本刀出すのは止めて！」
「いえ、師匠からの教えです！」

眞実は斬れば分ると」

そう言つて日本刀を構えてくるんだけれども、マジで怖い。

「仕方ない、偽造収納符・六角石風流劍、乱雑座標移動」

——2——

一気に河原に移動して風流劍を構える。

「さてと相手に負けを認めさせたら勝ち、それで良いな？」

「ええ、構いません」

「いざ、勝負！」

——3——

「お姉様、あの女性の方とどう言う関係なんですか？」

空間移動移動して土手に座つて隣に移動し座っている美琴に話しかけている。

「あー、黒子、魂魄との出会い何てね、中庭で日本刀の練習をしていて、そこで砂鉄の劍の扱い方を教えてもらったのが始まりね。」

因みに今年の4月に転入したばかりだからあんたが知らないのも当たり前なのよね」

「そうですの」

「いや、ですから、何でも無いです。」

はい、そう言うことで」

「どうしたの中目さん？」

「いやですね、店で話していたと思つたら行き成り消えたから大丈夫かつて先輩から電話が掛かつてきたんです」

「そう」

（可笑しいですわね、私達空間移動能力者は自分の1次元座標の劍算式を意識しているから、他人の空間移動の効果を受けないはずですよ。）

でもさつきはどう考えたって空間移動。

なぜ飛んだのか分りませんわね）

「黒子、難しそうな顔をしてるけど大丈夫？」

「い、いえ何でもありませんわよお姉様？」

——4——

流石に半人前とは言え、本物の劍士を相手に生半可な技は通用しないか。

「仕方ねえ、スキルカード『劍符 風切残刀』」

「見えない衝撃波、面白いです。」

ですがその程度では私に勝つことなんて3334万年早いです」

日本刀を一定のリズムで振りながら防御をしているが、こっちにじわじわと来ている。

「ここで御終いです！」

「そっくりそのままそのセリフを返してやるよってな『雷剣 雷流放刀』」

「!?」ビリッ

第60話「とある不幸の男子高校生」

「そんな、まさか私が負けるとは」

土手に座っている妖夢が呟く。

「能力の連携は流石に卑怯だと思うけど、いきなり勝負を挑んでくるお前もいけないんだぞ」

俺はすぐさまに妖夢に説教をする。

(ここで想衣、妖夢が風紀委員^{ジャッジメント}って何か有ったのか?)

あれ、返事が無いって言うことは、まさか……ね?

「おい、ビリビリ、こんな所で何やってるんだ?」

「あんた、今日という今日こそ決着をつけるわよ」

「はー、またかビリビリ」

(それより坂上、ちよつと教えてほしい事が有るんだだけでも)

(うん?)

(いやさ、あの球体の攻撃の出し方をさ、ね?)

えーと、手を合わせてお願いされてもそんなすぐには教えられないだけでも。

(とりあえず俺の奴貸すから後でな)

俺は適当に”サンダースパーク”と”雷玉”の2枚をとっさに渡す。

(後で返すわね)

そう言いながら一気に男性の所へ走れながら一気にスキルカードを宣言する。

「ふん、他人の借り物だけれどもきちんと思えるのかしら? 『風雷 雷玉』」

弾幕が展開されている様子を見るときちんと思作しているみたいだな。

「はあ?」

何これ(まさ)。

って消せない!」

「ふん、今までとは違うのよ」

「くそ、こうなったら真面目に使ってみるか」

(え、何、コイツも秘密兵器を持つてるわけ?)

「何チャってな!」

「しまった!」

だけれども一つだけとは限らないのよね!

『雷砲 直流電磁誘導砲』」

此方もきちんと思作しているみたいだけれどもこっちの方が威力高いつてどう言う

事？

「今度は雷かよ。」

「ってこつちは消せるのな！」

— 2 —

「つまり、あいつの能力の正体を教えてほしいと」

再び店に戻り御坂の無理な注文を聞く。

「はあ、分かった、知ってるかどうかは怪しいけど一度聞いてみるか。」

”偽造収納符・力学書物” ってな」

紙を机の上に叩き付けて本を取り出す。

「『理論 ポルターガイスト』 ってな」

「やっぱり本は出てくるもんなんですな」

「おい、そんなのに乗ってるのか？」

「甘くないことだな」

《さてと、何ついて知りたんだ？》

「おい、俺にも聞こえるって言う事は？」

《おやおや、また珍しい所で呼び出すな》

「いえ、色々聞きたいことが在るみたいですので」

《何ついてじや?》

イマジンプレーカー
「幻想殺しについてね」

(おいおい、何で気づいているんだよ)

「そうよ、何でそいつの能力で消せないものがあるのよ」

「そう言えば、貴方の能力で飛ばせた理由も聞かないといけませんわね」

《それでは、わしが知っている範囲での話を使用かのう》

第61話 「とある魔術の強制干涉」

《さてと、そもそも特殊能力とは大きく分けて2種類あるじやのう。

生まれつき持っている天性のものと、なんらかしらの理由でつく後天性のものとの二種類があるのう。

もちろんそれ以外の例外があつて、魂にくつつている場合があつていてな、その人数は少ないはずなんじやが……。

二人も居る見たいじやの。

さてと、イマジンプレイカー幻想殺しについてじやの。

イマジンプレイカー幻想殺しだかの、元々——》

解説を始めようとした瞬間消えてしまった。

「え……？」

ちよつと消えないでくださいよ」

俺は机に偽造収納符を叩き付けるが反応が無い。

「とにかくどうするのよ？」

「うーん、如何しましょうかね？」

「質問を質問で返すんじゃないわよ。

あー、もう面倒くさいわね門限だから帰るわ。

お金、これでお願いな。

黒子、行くわよ」

「はいお姉様」

テレポートで消えて行った後、皆で解散することになった。

2

ホテルに戻るために街中を歩くが、あまり人が見当たらない。

門限と言うことは、皆寮に戻っているのか？

にしては静か過ぎる。

適当になんか聞いているか。

そんな思いで適当に携帯に保存してある曲を開く。

しかし、聞こえてきたのは甲高いモスキートンだった。

「あれ？」

「こんな曲が無いような？」

取り合えず携帯をしまつて周りを見渡す。

そこには影に居る一人の青年（？）の姿があつた。

「つち、探索中止、面倒な手間を描かせるな」

そんなことを呟いた後にいきなり水が飛んでくる。

「仕方ないな『雷符 雷流放電』」

水を利用して相手に電撃を浴びせようとしたがまったく当たらない。

「Veritas Vincit 眞実 は 勝 つ」³³⁴

何だ？

まさか、ラテン語？

となると・・・？

「影Lux umbrae Shiの中に光はありし」

「つち面倒な『風流剣 瞳風土』」

「何故、魔法名乗らないのか気になるが突つ込まないほうが良いか」

「仕方が無い『風流剣 瞳風神雷』『成長 一つの種は大樹に成りて』」

久しぶりに使うスキルだけど、全然当たらない。

やっぱり遊び相手じゃだまなのか？

「おい、インデックスあの魔術師は何だよ」

角を曲がってきた上条が隣にいるシスターに聞いている。

「分らないんだよ。」

基本的な理論は八万百の理論だけれども、まったく乗ってないんだよ。

私だってキチンとすべての魔道書を把握しているわけじゃないんだよ」

取り合えずどうにかしないと。

『終結 終演結界』

結界に閉じ込めて戦闘を終わらせる。

第62話「とあるの戦闘理由」

取り合えず公園に縛り付けて置いておく。

「さてと、色々聞くとしますか。

まず、名前と所属、攻撃理由について教えてもらおうかね」

俺は問いたです。

「名前はいなりやまえいいち稲荷山永」。

所属は童謡木津英協会。

魔法名はVeritas Vincit334
実は勝つ」

成る程、

「次、何で攻撃をしたのか」

「俺が攻撃をしたかと言うと、とある魔導書を探してるからだよ。

その名前は”光陽信書”と魔導書だ。

イギリス清教が誇る禁書目録にすら収録されていないレア物だ。

この魔導書が我が家の呪われた血統をの呪いを消すための魔法が乗っている奴だ。

我が家は家訓で自分の親戚同士でしか結婚できないんだぜ。

呪いのせいで他の家系に影響を与えないようにするための物なんだが、その呪いが本当に影響しているからって言う理由で結婚が出来なかつたんだぞ。

だからそんな呪いさえ消せればいいと思つてその魔導書のありかを探したんだが、まったく見つからないから、探していない学園都市内を探すことにしたんだ」

上条は隣にいるシスターに聞いているみたいだが、そもそもその魔導書はうちの書庫にあるんだが。

「そんなの、本当にあるかは知らないが、そもそもそんな呪いならこの俺の右手で消してやるよ。」

な、だからそんなくだらない幻想から手を引こうぜ」

上条は右手を差し出すが受け取らない。

「そんなのでやってたまるか」

そのセリフをはいて消えてしまった。

「さてと、ホテルに戻るか」

俺も独り言をはいて座標移動する。

翌朝、部屋に向かいに来た人と一緒に研究所に来る。

「それでは、全力で能力を使ってみてください。」

それと、出来れば同時に複数の能力を使ってください」

俺は、脳波測定用の機械をつけて実験を開始する。

『活線 列車で行く日本一周の旅』『成長 一つの種は大樹になりて』

『風流剣 瞳風雷』『理論 弾幕が消える日』

「こんな感じで良いですか？」

「少ないけどもう良いかな？」

それじゃありがとうね」

俺は機械を置いてベンチに座る。

「あれ、これで終わり？」

学園都市に来た理由を考えると、もう済ませちゃったんだよな。

今日帰る予定だし。」

「さてと、これで帰りますね」

「はい、それではお疲れ様でした」

「あ、湖南様、新立川駅前まで送りますね」

そう声をかけられたと同時に駅前に空間移動させられる。

「何か、変な感じだな」

何かを忘れているよな気がするけど良いか。

俺はそんな事を考えながら改札に入る。

「あ、（無いに等しい）荷物を忘れた」

第63話 「とある東京の絶対建築」

学園都市から戻ってきた翌日、朝から客人が来ていたようのでぜんぜん眠れなかった。

「忘れ物を届けにきましたと、ミサカは素直に忘れ物と手紙を差し出します」

そう言ってごっついい軍用ゴーグル(?)をつけた御坂が忘れ物を突き出してくるので忘れ物だけ受け取る。

「あの?手紙も受け取ってくださいとミサカは手紙を突き出します」

手紙を渡してくるのでしぶしぶ中を開ける。

『実験の協力の願い』

軍用モデルとしての妹^{シスターズ}達には能力上の欠陥が存在し、それを補うために外部の発芽能力者としては初の超^{レベル5}能力者判定を受けた坂上湖南殿に能力の講習をした頂きたいと思っただいでございます。

どうか協力して頂けませんでしょうか。

尚、生活費については同封している小切手をご使用ください』
.....

「だが断る」

俺は手紙を付き返す。

「だが断るは自分に都合の良いこと断る為に使うのでこう言う時は使い時ではないとミサカは訂正を求めます。

それと此処で追い返されても帰る所がないとミサカは、ミサカの事情を話してみます」

うーん、仕方ない。

「分かった、その代わり面倒事を起こすなよ？」

「分かりましたとミサカはお世話になる母屋の中に入ってみます」

そう言つてミサカは中に入った。

「眠い」

俺は一言呟いて二度寝をしようと思つたが時間も時間などで仕方なく着替えて学校の制服を着る。

そのまま身支度を済ませて学校に行く。

学校には既に連絡を済ませておいてあるので後は行くのみである。

大通りを曲がって小道に入る。

小学校の前は混んでいて歩きにからこつちを歩いている。

後ろから車の音が聞こえてくるが大三角も混むから迂回だろうか。

しかし車は俺の止まりいきなり扉が開いて中に引きずり込まれる。

突然、睡魔が体を襲いまぶたが重たくなる。

クロノホルム
CHC13だろうか？

発がん性があるが強力な睡魔をは s s

？

目が覚めると息苦しい暗闇に放り込まれていた。

とりあえず、ここから脱出しないと。

しかし、なぜか能力が発動できない。

壊婁石かいろうせき、能力者の情報処理を妨害し能力を妨害する鉱石

東京湾の深海の海底で採掘できる鉱石。

これで作った手錠を嵌められたら能力の展開などまず無理。

「しかし、通常だったら無理だけれども。

『我ノ身ニ誓ヲチ、コノ場ニ神ノ天罰ヲ起シ、貧シキ人ニ恵ミヲ。古文術式ニ色天罰』
ってな。

うん、出来た」

とりあえず手錠を破壊して柱から離れる。

「ざっきの音は何だ！

人質が逃げたぞ！

探せ！」

男の声と共に不気味な足音が響く。

「とりあえず、此処は何処だ？」

第64話 「とある右翼の秘密基地」

「とりあえず、追っては巻いたけどこれからどうしましょうかね？」

壁に寄りかかりながら考え事をする。

「おい、まだ遠くには行っていない筈だぞ」

追つての声が構造物に反射する。

「さつきから魔力の流れを感じると言う事は……」

何故か此方に向かって足音が聞こえる。

「おい、居たぞ」

やっぱり、こつちに來ますか。

「仕方ない『風流劍 瞳風水』」

空気中の水分から水滴を取り出して弾幕を即座に形成する。

「我が名譽A per iatur terra pro honore meeに従い大地よ開け」

謎の言語の詠唱が聞こえ、それと同時に地面などが捲れ弾幕を消されてしまう。

「仕方ない『風流劍 瞳風水』」

土を地面に戻して重力を33.4倍に変更して一気に相手を伏せさせてその内に再

び他の場所に移動する。

次の瞬間地面が裂けて床が消える。

「成る程魔力を使つて蓋をしていたわけですか」

空中に浮名がらそう呟いて反対側に渡る。

次の瞬間だった、謎の破壊音が聞こえてこつちに向かつてくる、何かの足音がする。

「おい、何であんたが居るんだよ」

角から学園都市で見た上条の顔があつた。

「お前かーつてかちよつとこつちに来い」

俺は上条の手を掴んで角に隠れる。

「こつちだー！」

叫び声と共にこつちに向かつてくる足音がでかくなる。

「一発で決める」

俺はそう、呟いて表にでる。

「おい」

上条の声が聞こえるが気にしない。

『雷砲 直流誘導電磁砲』

相手に対して雷撃を浴びさせると同時に、上条の手を再び掴んで通路を突つ走る。

「おい、何でこうなってるが説明してくれないか？」

『雷符 雷流放電』

上条が喋り掛けてるがそんなのを無視して壁もすら突き抜けて一気に親玉の下へ向かう。

「トンネル効果だね、実際に使われるところを見るのは初めてだけれども」

「まったく、これを使うと筋肉痛に成るから嫌なんだよね。」

とにかくあんたを倒して鬱憤うっぷんをはらせて頂くぞ。

『風流剣 瞳風雷』『成長 一つの種は大樹に成りし』

弾幕を張り、それを利用して敵の死角に回ろうとする。

しかし、次の瞬間、死角から砲弾が飛んでくる。

強制的に弾の軌道を反らす。

「これは、炭素？」

となると、宮澤製のエネルギー砲？」

科学冊子に乗ってたけど、まさかこんなところで魔改造されてるとは。

「よそ見してる暇はあるのかな？」

次の瞬間、地面から人形が出てくる。

「面倒くさいけど、相手するか」

「ゴーレムⅡエリス!？」

上条がびっくりしている様だがそんなことを無視して一気にスキルカードを起動する。

『理論 貴方の理論が崩壊する日』

土で出来た人形を土に戻して一気にショットを放つ。

「そんなもので聞くわけが無いが、相手をしてやるか」

次の瞬間剣が飛んできて一気に残撃を飛ばしてくる。

『終結 終演決壊』

結界で防護しながら一気に敵の背後まで向かうが、ここで何故か一気に足が止まる。

次の瞬間、血塊を吐き込んで倒れてしまう。

「靈力逆流魔術か・・・」

誰も聞こえない結界で術式の正体を呟く。

同じ座標に在りながら干渉することが出来ない結界の中でそう呟く。

第65話 「とある神主の絶対攻撃」

「とりあえず、例の奴を使いますかね『風流剣 瞳風緑』」

持っていた種から傷薬の元であるアロエを取り出して取り合えず即効で薬を調合して傷を塞ぐ。

「後は『治符 自然治癒力』」

傷から出た血を増やして取り合えず応急処置を終える。

しかし、そこから一気に気分が高まる。

そう言えば、これを使うと暴走したようなきが――。

いや、それは確か――

やばい、何か考える前に体が勝手に動く！

結界を解除して新しい結界を張る。

『結符 風軽結界』

一気に敵の抹殺を開始する。

「成る程、これが噂の神主の実力か・・・」

「喋りながら！避けるな！とっと当れ！」

風流剣を振り回しながら一気に相手に畳み掛ける。

「くそ、こっぴなつたらー！」

一気に弾幕を纏わせて相手に足して並行に斬りかかる。

次の瞬間、相手の首から——（察してください）

その後、敵の拠点から外に出されて、千葉市内の病院に入院させられた事を知らされた。

「まったく、食道を切って出血してたなんて情けないわね」

見舞いに来た姉さんに叱られる。

「というか、また記憶が飛んだんだけれども、何で分かる？」

俺は、たまに起きる症状について相談する。

「二重人格かしらね？」

半人道的な人格と一緒になのかしらね（まさか・・・ね）？」

まさか想衣が？

「お兄ちゃん！」

倒れたってほんと!？」

学校から帰ってきた春日と優樹が病室の入り口からゆっくりと入っているのが分かる。

「いやさ、この子が病院の中を走るからさ、引張りながら来て見た分けれども……、大丈夫か？」

「取り合えず検査入院って訳かな？」

明日には退院出来るってさつき先生が言ったから大丈夫なはず」

俺は取り合えず二人（？）の心配を解く。

「そうか、ならば良いんだが……。」

学校に来ていないないからどうしたかと思っただぞ」

……。

そう言えば今年の四月に親の転勤でこっちに引っ越してきたんだよな。

「悪い」

俺は謝罪の気持ちを出しながら謝る。

「取り合えず、これが今日の学校の課題な、通学鞆は……、有るよな？」

そう言う訳だ、取り合えず先生に報告しとくから」

そう言つて携帯を取り出して、どこかに言つてしまった。

「取り合えず、今回の入院費は400円だから良かったわね？」

浦安市の方針で、一回の診療と一日の入院費が2000円なので、4000円か。そうなると来年度以降がやばいな。

それに先生に言われた進路の事も有るし、本当に考えることが多すぎる
というか時間もないし、レポートどうしようか。

「レポートの資料・・・」

取り合えず鞆の中から資料を取り出してレポートを書く。

とある小説の人物紹介

名前：そんなのは無かった

能力：『空間移動』^{テレポルト}（大能力者^{レベル4}）

11次元上の座標を移動する事で3次元上の制約を無視して移動する事ができる。

最大重量は110kg・最大移動距離は40km

人物像：成績は優秀であり、その実力は学園都市でもトップ100位に入るほど。

また、暗部の組織『チョーカー』に所属している。

名前：白井黒子^{しろいくろこ}

能力：『空間移動』^{テレポルト}（大能力者^{レベル4}）

詳細は上記の通り。

また、通常は同系統能力の力は働かないという特徴がある。

人物層：ああお姉様！

風紀委員第177支部所属^{ジャツジメント}

4 + 6 + 1 + 9 | 6 | 5 || ⑨

常盤台中学の2年生であり、御坂とは同室。

しかし、それを逆手にとって毎晩やってくれている。

弱点は寮監。

名前：御坂美琴

みさかみこと

能力：『超電磁砲』(超能力)

レベルガン

レベル5

学園都市最強の発電系能力。

連発能力は一秒間に10発。

射程距離はゲームセンターのコインで50m。

摩擦により射程距離は変わる。

着弾分布は5m。

最高速度は10km/s

電子機器等への干渉、磁力の操作等の応用はかなり利く。

ただし、使いすぎると充電切れを起こす。

人物像：基本的にお子様趣味であり、その事をいつも黒子にからかわれている。

またゲコ太というマスコットキャラクターが好きである。

常盤台のエースとして扱われるのはあまり心地よく思っていない。

また、正直になる事はできない。

誰にでも平等に接するが、上条当麻に対してはいつも空回りする。

名前：初春飾利ういはるかざり

能力：『定温保存』サーマルハンド（低能力）

触っている物の温度をそのまま保存する事ができる能力。

人物像：風紀委員第177支部所属のオペレーター。

基本的に佐天にスカートを捲られる側である。

パソコン上での情報操作はトップクラスであり、守護神ゴールキーパーと呼ばれている。

能力についての描写は超電磁砲側ではあるが、禁書目録側では描写が無い。

西葛西出身（あつ近い）

頭の花冠は実は造花

名前：佐天涙子さてんるいこ

能力：『空力使い』エアロハンド（無能力者）

幻想御手使用時に発現した能力。

しかし、葉を数枚浮かせる程度で有った。

人物像：う〜い〜は〜る〜！

何時も初春のスカートを捲っている元気な女の子。

流行に敏感な少女であり、何気に私服を一番着ている。

また、バット一振りですべて1億円の損害を出している。

名前：中目田奈なかめたな

能力：『思考再現』ルールオーバー（強能力³）

他人・世界のルール等に影響しない範囲内で現実を曲げる事が出来る。

ただし、実際に思った時に指を特定の形にしている時にしか発動できない。

能力自体も珍しく、世界に3人しか持っていない。

人物像：基本的に無口であり、何を考えているかわからない。

能力にどうしてはどうでもいいと考えているが、周りからの視線が不安に感じられる。

チャイルドエラー
置き去りであり、能力で常盤台に進学したが、その後幻想学園との交換学生に

なる。

御坂との出会いは、数少ない学び舎の園内での生活。

両親の事については覚えてないらしく、有一覚えている事は自分が原石である
と言う事の一つのみ。

また、人見知りである。

名前：魂魄妖夢こんぱくようむ

能力：『万物切断』オールカット（大能力者⁴）（正『剣術を扱う程度の能力』）

物理・幻想関わらず物質を切断する事が出来る。

人物像：御坂に対して剣術を教えているが実は半人前（半人だけに）

横に飛んでいる白い物は切断した幻想と説明している。

本来は幻想学園の生徒であるが上記の中目田奈との交換学生で常盤台に来て
いる。

しかし、寮は幻想学園のものである。

白玉楼の庭師でもある。

名前：上条当麻

かみじょうとうま

能力：『幻想殺し』

イマジンプレーカー

科学・魔術ともに説明できない能力であり、システムスキャン身体検査では無能力者扱いである。

非論理的現象をのみ消すものであり、能力で出せれた炎は消せるが、それが壊した
破片や灰は消せない。

効果範囲は右手の手首から先であり、同時に処理できる量には限界が存在する。

また、理論で補強されている湖南が発動するスキルカードは消す事が出来ない。

人物像：基本的に不幸であり、家にはイギリス清教のシスターが居候している。

ケンカに対しては強く、多少のケンカならば勝つ事ができる。

また、正義感が強く、基本的に誰にでも救いの手を伸べる。

第7章 「国家特殊公務員のお仕事」 第66話 「政府のボランテイア」

「坂上湖南様、少々お話が御座いますのでお時間はございますか？」

春日達が帰った後、女性が警察手帳を出してこちらに向かつてくる。

「えっと、もしかして殺人で補導で・・・？」

やはり警察の人が来るとなると、昨日だろうか？

「さてと、そちらについては、障害にも成っていません。

それよりも、今回は此方の辞令を御覧頂きたいのですか、とりあえず唯の検査入院みたいので明日の朝、十時程に向いにきますのでこちらの方をご参照いただけましょうか？」

そう言つて分厚い本を置いて行つてしまった。

「取り合えず先生に報告しといたけど、まさかそんな分厚い本を鞆に入れてたのか？」

机の上に置いてある本を見て若干引いているみたいだ。

「まあ、察してくれ」

取り合えず本をしまっておく。

「取り合えず、もう少しで面会終了だから帰るや」

そう言つて帰つてしまった。

そう言えば読んで置いてつていつてた本つて……。

「読む気が引けるな、これは」

取り合えず辞令を本に挟み込んで本を読む。

「時間つぶしには良いかもな」

取り合えず、分厚い本を読みながら時間をつぶす。

——2——

翌朝、検査を再び受けて取り合えず、退院して良いとの許可を先生から受けたので、取り合えず向かいを待つことにする。

「やはり、先に退院でしたか」

昨日、病室に来ていた女性がこちらに向かつて来る。

「それでは、向うとしますかね?」

そう言つて駅に向つていく。

「あ、渡していませんでしたね」

そう言って封筒を渡してくる。

中には、警察手帳と前払い式のクレジエツト機能がついた*Suica*が入っていた。

「えつと、これは？」

俺は封筒に戻して聞く。

「気にしてはいけません。」

取り合えず、今回はそちらを使ってください。

そう話しながら歩いていると、千葉みなと駅が見えてくる。

改札に入場して、快速 北有楽町行き³の到着を待つ。

どうでも良い事だが、京葉線の東京駅から丸ノ内駅舎まで遠すぎたから、もう公式で北有楽町の愛称ついちゃったんだよな。

「まもなく3番線に東京行き快速が到着します。」

黄色い線までお下がりください」

やはり、A T O Sの導入は、時間掛かるのかな？

今年の十月からA T O S入るらしいけど、鉄道幻想入りシリーズ予備軍の記録はお早めに。

作者は、「上野バアが消える！」とか言って大騒ぎだったけどな。

「次は、稲毛海岸です。

この電車には優先席があります。

優先席を必要とされています方がいらつしやいましたら席を御譲りください。

The next station is Inage-Kaigan JE
15 door said rated said will open.

そう言えば、ROMも変わったけど、LCDは変わらないのね。

第67話 「舞浜発大阪宝塚行き086861H」

「まもなく、新木場 新木場 お出口は右側です。

潮見・越中島へおいでのお客様と、地下鉄豊洲線、関東高速鉄道湾岸線はお乗換えです。

新木場の次は八丁堀に止まります。

The next Station is Shinjiba JE-05
 or recte side open.

Please changing for Toyosu subway line
 and Kantō-rapidity railway Wangan line.

Will be stop after Shinjiba will be
 Hattyoubori.

そう言えばナンバリングついたんだよな。

作者が必死に対応していたけど、東京電車特区無いしかないけど変な連番なんだよな。

常磐緩行線とか。

「取り合えずシヨートカットしましょうかね？」

そう言つて降りてしまう。

名前聞いていなかったけど、取り合えず追いかけないと。

「まもなく2番線に熱海線方面、『特急ゆめなごみ64号』熱海方面行きが一部指定席の8両で参ります。

関東高速鉄道線内の途中の停車駅は、東京臨海・新大井・羽田空港・横浜・湘南藤沢・

西寒川・箱根口・熱海でございます。

自由席は1・2号車です。

自由席以外のご乗車の場合は特急券が必要です。

次は東京臨海に止まります。

新土浦（筑波鉄道）・浦和美園・烏山・南前橋方面には参りません」

放送長い、と言うか今年のダイヤ改正で関西私鉄連合との直通始めたわ良いけど、誤乗多発らしいな。

新土浦・烏山・南前橋・川越・新岐阜・伊勢・名阪京都・大阪難波・和歌山市・中央林間田園都市・（神戸急行）神戸三宮・（大阪急行）神戸三宮・（神戸急行経由）山陽姫路・宝塚・京都嵐山・（大阪急行）京都河原町・（枚方電鉄）京都出町柳つて最終行き先多過

ぎなのが原因だよなこれ。

「鶴見国道で再び乗り替えるわよ」

そう声が聞こえていたが、家からボイスレコーダーを取り寄せる。

『関東高速鉄道をご利用くださいまして有難う御座います。』

この電車は大阪方面特急「ゆめなごみ61号」宝塚行きです。

次は東京臨海です。

新土浦・烏山・南前橋・大崎方面と東京テレポート・天王州アイル・品川シーサイド・

大井町へおいでのお客様はお乗리카えです。

東京臨海の次は新大井に止まります。

自由席は1・2号車、指定席は3〜8号車です」

取り合えず、放送は録音したけど英語は……。

止めとこう。

「もしかして鉄かしら?」

ボイスレコーダーを天井に向けている時点ではな。

「え、まあ」

取り合えず返事を返す。

(まさか特急だとは、鶴見国道通過じゃない)

第68話「第一京浜（国道2号線）」

結局、新大井で各駅停車に乗り換えて来たのが、鶴見国道とか言う、小さな駅。一応、鶴見線の国道駅とは乗り換えは出来るが、これ業務委託駅って・・・？

「取り合えず、此方です」

そう言つて何やら廃屋のベニヤ板の前で扉を一定のリズムで叩く。

モーレス信号？

叩き終わると同時に扉が開く。

取り合えず、ついに行くと何やら一つのオフィスに出る。

「取り合えず、此処が事務所ですね」

そう言つて、机に座る。

「そう言えば自己紹介していませんでしたわね。」

関東高鉄大井乗務員区所属の稲垣若葉です。

一応、警察庁特殊状況下部公安零課鶴見詰所の所長やつています。

ここに居る人の大半が乗務員ですから、こうして駅の下に居ると都合が良いですよ。因みにですが、この詰所は裏の世界ですから、通常の物理法則は利きませんか？

それでは質問を受け付けましょう」

そんな事を言いながら机を出してくる。

通常の物理法則が働かないと言うことは質量保存の法則も聞かないと言う事だろうか？

「それじゃ、裏の世界とはどう言う意味だ？」

俺は、さっきの説明で疑問に思つてことを説明する。

「そうですね、簡単に言えば幻想在に成れなかつた物物の為の世界ですね。

この世界には幻想郷という所も在ります。

しかし、そこにすら行く事が出来ずにこの世界に残つてしまつた物為の世界です。

裏の世界の住民は外の世界に通常は干渉することが出来ません。

しかし、偶に干渉できてしまい、表通常の世界世界に悪影響を与えてしまいます。

その為の公安0課です。

通常時は逮捕権すら在りませんが、先程もでた、表の世界に干渉されている最中は、特殊自体発生宣言が発動している最中は、通常の警察官以上の権力が存在しその範囲は国会内まで及びます。

もちろん、条件もありますが拘束権は通常時も存在します。

これを用いて、通常時の協力者を拘束し、警察官に引き渡すことが出来ます。

これ等については公安維持法に記載が在ります」

おう、過剰応答有難う御座いますや、おかけで質問の手間が省けたや。それじゃ、後は一つだけだな。

「昨日、俺と戦闘した奴はどうなっている？」

俺は、ずっと気になっていた事について質問する。

「ああ、あれですか。」

魔術を使用していたので、ロシア正教に目を付けられていたらしいですね。

あれの魔力は、現実を曲げるまでの量でしたから。

正直、貴方がやってくれたおかげで手間が省けましたが、あれの正体は——」

第69話「幻想に成れない物」

「——あれの正体とは、” 霊装大地グラウンドソードの剣ですよ」

そう言う風言いながら封筒の中から外国語で書かれた文章をだす。

「? 霊装とは、道具であつて意思は無いはずでは?」

そう言いながら色々考えてみる。

つまり、誰かが意識を付けたのか?

「そうですか、ではそこから説明する必要がありそうですね。

すべての道具には意思と言うものが在ります。

その意思は、通常は何も効力を持ちません。

しかし、一定の条件を満たした場合はそれが実際にでる事があります。

妖怪や霊装等がそうです。

霊装とは、人間がより多くの効率を求め意思を反映できる様にした者です。

逆に妖怪とは、人間の意志が道具に溜り結果として神様に成つたのだが、信仰が集まらなず結果として妖怪として残ってしまったものです。

妖刀等の例外を除き、基本的に裏世界は幻想在に成れなかつた物物が幻想郷に行ける日を

待つ為の場所です。

勿論、向こうが必要としない限り行く事が出来ませんが。

そこに漬け込んで通常世界此方の世界に持つてくる物が居る、と言うのが先程の説明です。

それで、これは稀な例で道具自体が人化できる程の強い意志を持った又は、受けた場合です。

勿論、これも私達で対処しないといけないのですが」

つまり、物はすべて意思を持つと。

一斉に反逆されたら今の生態系は一気に終わりを向えそうだ・・・。

「それで、今のお仕事がこの霊装大地グラウンドソードの剣を捕まえることです」

つまり、あれを捕まえろと。

確かに違和感是在ったけれども。

「因みにですか、あれには50万円の懸賞金が掛かっています。

今も三河がやりに行っています。が期待はしていません。

因みにですか、あそこは世界革命軍と言うテログループの拠点で、すでに中にいた組員は公安維持法違反の容疑で全員拘束済みなので、あそこにはもう居ないと思いますけど、一応聞きますけど、参加する気ですか？」

「何故、俺を狙ったのかについて気になるからな」

俺はそう言いながら外国語の文章に目を通す。

どうやらラテン語で書いてあるようだが内容までは分らない。

「そうですか、取り合えず扉はモーレス信号で”開け”とロックすると、大半の扉は開きます。」

勿論、対策さて無ければの話ですか。

あ、取り合えず之をもってくださいね」

そう言つて机の中からSDカードを出してくる。

「腕時計のパッチが入っています。」

反映して頂くと在り難いです」

取り合えず、パッチを反映させる。

しかし、何故多機能腕時計チエンジウツチヤイの事を知っているのだろうか。

取り合えず、考えても無駄か。

「それじゃ、行つてくる」

そう言つて表世界日帯に出て行く。

「——はい、そうです。」

私です。

予定通り”下総の半妖神主”を加えました。

しかし、彼のような未成年を巻き込んで良いのですか？
私が言うものあれですが、本当に良いですね？

——藤枝総理？」

第70話 「人の能力を学習する程度の能力」

取り合えず、昨日居た所をもう一度調べようと思ったがそもそも何処だったのかが分からないので諦め、俺が誘拐（？）された所に行つて見る。

取り合えず、回りを見回しているが、特にめぼしい物も無く後にする。

しかし、ここで不気味な視線を感じる。

俺の体質かどうかは知らないが、俺の事を理解しようとしないうつは基本的に避けようとする。

勿論、知ろうとした場合は必ず接触してくるはずなので、基本的に覚えている。

しかし、この様なヤツは覚えが無い。

取り合えず、風の流れを使つてどんなやつか調べようとするが、風に当たらない。

つまり、実体の無い奴となる。

ここで考えられるの可能性は二つ。

①・・・この視線は俺の勘違い。

②・・・カメラ等を使つて見ている。

普通に考えてどちらも当てはまるところと当てはまらない事がある。

考えて見るより実際に知ったほうが速いなこれは。

そう考えた俺は後ろを振り返る。

そこに居たのは――

— 2 —

「そうか、報告ご苦労様」

そう言つて電話を切る男性がすこし思い溜息をつく。

「一体何時からこうなつてしまったのと言うのだ」

そう言つて報告書に目を通す。

文化省から送られた失われた文化財に関する幻想郷との取引に関する物である。

そこには幻想郷から弥生時代の貴重な資料を渡してもらう代わりに、食料品の提供に付いてだった。

普通に考えればなんとも無い取引内容だったのだが、問題はその食料である。

生きの良い人間を毎月10名ずつと言うものだった。

過去の事を知ることについては、過ちを繰り返さない為に必要であるが、その代償が人命との成れば、話は別である。

今までは死刑囚等を提供していたが、もうその策は使えず、別の方法を考える。

「この件についての話し合いは次は何時だったかね？」

男性は隣に控えている秘書に聞く。

「はい、明後日の19時からです、総理」

— 3 —

——そこに居たのは幽霊であった。

「何のようだ？」

俺は偽造収納符から御払い棒を取り出し向ける。

「おい俺はあくまでも、守護霊だぞ。

別にお前と言う訳ではないがな。

まあい、一つだけ警告しとくぞ、霊界に関わるつもりだったら、覚悟しとげ」

「おい、それ一体どう言う事だ？」

俺は御払い棒に靈力を集め聞く。

「さあな、自分で考えるだな．．．」

という言いたいところだが一丁手合わせを願おうか 『靈符 二重弾幕結界』
ツ！

『活線 列車で行く日本一周の旅』

取り合えずスキルカードを使い応戦する。

ふと、後ろの電柱に人除けの札を貼っているのが見えた。

何時の間に張ったんだコイツ!?

「ツ！」

本物よりも硬い！ 『風流剣 瞳風雷』

とつさに弾幕を消し別の弾幕に切り替える。

「まずは、その自由を消すまで！」

しかし、意識が一瞬飛ぶ感覚がした直後、首に“黒曜石のナイフ”が乗せられる。

「甘いな」

「ツ！ 『雷符 雷流放電』」

とつさに電柱にくつつき距離をとる。

「しかし、こつとも簡単にやれてしまうと、戻ったときの制限が気になるな。」

まあい、この霊能力だってあくまでも簡単なもの——何だからな！」

再び意識が飛ぶ感覚するのと同時に”黒曜石のナイフ”が首に向けられる。

「ツチ、修行が足りないか『風符 風中同化』」

取り合えず、一旦離れる。

また、意識が飛ぶ感覚がするのと同時に座標情報が固定化される。

「流石に風に同化されていると探すのに手間を取るな。

まあい、これで決着だ。

そこに居るのは判っているんだぞ」

そう言つて俺の目の前に黒曜石のライフが止まる。

「ッ！」

お前は一体何者なんだ」

風中同化を時訪ねる。

「只の守護霊さ」

第71話「阪神と弾幕」

「修行不足か……」

俺はそう眩きその場を後にしようとした。

「お兄ちゃんだやっぱり」

角から出てきた春日に見つかり、どう答えるべきか考えていると側からミサカ10334号が顔を出してくる。

「小学生にお兄ちゃんと呼ばせる趣味があるみたいですね、とミサカは少々呆れます」
そう言ってくる。

「あんな、俺だつて呼ばせてる訳じゃないんだよ。

勝手に呼んでくるだけ。

後、何でお前が此処に居る?」

俺は歩きながら聞く。

「ミサカは共祁とか言う巫女(笑)に言うやつにこの子と一緒に居ろとか言われたからです。」

と、ミサカは報告します」

全く、余計な事を……。

「ま、良い。」

取り合えず帰るぞ」

おい、共祈春日に着いていけってミサカに言ったのか？

<はい、ミサカが何もする事がないと言うので>

そうか。

<はい>

確かに、ミサカが来た理由が理由だもんな。

「ミサカ、戻ったら一回付き合え」

「やつとミサカの存在理由が認められたと、ミサカは一人喜んでみます」

はあ、一体何時から人間に対する恐怖心が薄れてるんだ？

取り合えず良いけど。

神社に戻り、皆に指示を与え商店街にでる。

嘗ては浦安銀座と呼ばれたが、今では何処にもあるような商店街に格下げ去れてしまったが、未だに活気は若干残っている。

取り合えず、裁縫道具を買い足さないとな。

「取り合えず鉄針1400本とカラー糸基本色」

財布を出ながら取り合えず必要な物を言う。

「何に使うかは知らんが取り合えず1334円な」

財布から1500円を出す。

「それじゃ、釣り銭をと——」100円だけで——あいな、結局5000円近く預かってるけれどもよ、大丈夫か？」

俺の癖で基本的に細かいやつは受け取らないので、商店街自体にかなり預かってもらっている。

これは、万が一の事が有ったときのためなのだか、かなり不思議に見られている。

「それじゃ」

そう言って神社に戻る。

途中に聞こえてくる会話の内容は様々だが中でも怪しい獣の影を見たと言うのは気になる。

神社に戻り色々準備をしてからミサカを呼び出す。

「しかし、的と線とは一体何をやる気なのかとミサカは不安の声を냅니다」
「別に何でも良いだろう。」

「取り合えずこの鉄針を其処的に撃つてみる」

「そう言つてさつき買った鉄針を渡す。」

「お姉様オリジナルの真似ですかと、ミサカは取り合えず撃つてみます」

「邪気眼を使つてみると速度は30 m/m。」

「電圧は10万ボルトか。」

「取り合えず打つてみるからどういう風に撃つてるか見ろ」

「そう言つて一発撃つてみる。」

「超電磁砲レールガンの真似をしてみるが上手く力が入らない。」

「確かに別の方法を考えた方が良さそうだな。」

「取り合えずひたすら馴れるまでだな。」

「俺もやるからひたすら慣れるか」

一時間後

「駄目だ、疲れた。」

「休憩しようか」

そう言つて中に戻る。

「ご飯冷めてますが、もう一度温めますか？」

奥から共禰の声が聞こえてくる。

「あー、頼むはー」

適当に返事をして、居間に出る。

前までは住居スペースで十分なのだが、春日の夜中の攻撃が怖いので鍵の掛かる部屋に一人で居、二人には宴会場の一部に寝てもらっている。

「持つてきましたけど、此処に置いておきますね」

ミサカには外で待つて貰っているので、スキルカードを持つて出る。

3

夕食を食べ終え、もう一度外に出る。

「それじゃ、弾幕に付いてやってみるか」

そう言つて弾幕を出す。

「どうやるのですかと、ミサカは質問してみます」

「それじゃ、一回やってみるか」

第72話「所でさクローンに霊力ってあるの？」

『 坂上湖南に関する調査報告書

報告先 学園都市統括理

事会

報告元 検体番号103

34号

報告書番号：114514

本報告書は、あくまでも5月10日時点のものであり、後に追加していききたいと思いません。

1 概要

本報告書は多重能力者デュアルスキルに関する法則解明、及び原石バーチカルリアリティに置いて第二位相当の能力法則解明。また、自分だけの現実以外の能力の法則解析。

更には能力の限界値測定、我々とは異なる法則に関するデータ収集を目的とします。

2 報告

今回の調査に置いて解明した点が二つ存在する。

一つ目は、能力の応用範囲の広さ。

磁力を操作し空中を飛行することはおろか、他人と脳内接続テレパシーを使用している事。

また、弾幕というエネルギー球体を放つことが出来る他、之を使用した競技がある模様。

尚、こちらについては特能学園においての時間割カリキュラム参照。

二つ目は、彼自身の存在について。

彼自身、元々養子であるが出生記録が付いておらず、戸籍上も通常とは対応が違う模様。

また、現代では知りえない知識を多数所持している他、人間では不可能とされていた、神Sならぬ身Yにて天上Sの意思Tに辿り着くものにもっとも近い人物かもしれません。

なお、弾幕については本人より指導がありすでにミサカ10901号通じて統括理事会の方に伝わっていると思いますが、“自らの中にある僅かな力を理解しようとしないう限りは使用できないとの事です。

また、その僅かな力を感じるにもそれなりに手順が必要との事です。

3 考察

以上の点より坂上湖南は我々の理解を超える存在であるということがお分かりいた

だけだと思います。

ただし、これらは生活風景の一部にしか過ぎず、全体像はいまだに不明であります』

「やつと報告が終わりましたと、ミサカは報告します」

そう、ミサカは言うのと携帯ネット端末の電源を切る。

「しかし、フリーWII-FIが入るとは以外です、とミサカは独り言を呟きます」

ミサカはそつと立とうとした所で後ろに殺気を感じた。

まるで、かつての『実験』の時に仲間が感じた恐ろしき殺気。

「別に報告書を送るなどは言わない。

だが、人には知られたくないところがあるんだ、分ってるよな?」

その声の主の表情はミサカには見えない。

しかし、見なくても分る。

普段、大人しい人程の闇の深さは薄っすらと感じる。

ミサカは恐怖を覚えた。

人間であれば、教えて貰わなくても分る事。

それは、人間と言う生命体の中に元々ある感情。

ミサカは他の仲間から教えてもらった感情。

——死への恐怖——

それさい感じれば十分だった。

ミサカの額に冷や汗がかよう。

かつて、仲間のみんなで決めた二度と死んでたまるか。

その決意の終わりを始めて感じた。

「人間の感情って言うのは簡単に壊れる。

それについては俺等が一番知っている基礎だ。

そうだろ？

ミサカ10334号？」

ここで、この殺気の正体が誰なのかにミサカは気づく。

しかし、もう遅い。

今更戻ることは出来ない。

そう言った考えがミサカの頭の中を回る。

「之はあくまでも忠告だ。

人のことについて調べるときは気を付けるんだな」

そのセリフと共に殺気が消える。

第73話 「学校七不思議—1」

5/9（火） 2:23 富士見中学校放送室前

第三者目線

何時も学校の塀の中で生活する生活。

もう何年も生活しているから慣れてしまった。

2007年以降私を認識出来る人が年に数人居たから暇はしなかったけど。

でも今年表彰を（強引に）受けたあの生徒だけは違う。

私に対して探りを入れていている気がする。

同日 13:15 富士見中学校放送室前

「学力テストの時に見たのはここだけでも、本当に幽霊とかこの時間帯に出る訳？」

やっぱりあの生徒ここに来た。

あの生徒、人あらざる者が見えるらしい。

授賞式の前に二人で何かしらの事を話した後体育館でパフォーマンスをしていたけ

れども一体なんだろうか何たつのかしら？

「まあ、いる訳が・・・」

とにかく隠れないと。

私はとっさに壁をすり抜けようとしたその時だった。

「あっ」

目と目が会う瞬間私は慌てて姿を消す。

しかし、どう言う

「逃がすか！」

何で追ってくるのよ。

「取り敢えず、待てよごらあ」

どう言う方法で施錠されている放送準備室に入ったのだろうか。

「とにかく、時間が無いだぞ、手短に聞く。

お前は何をしたい？」

同日 13:21 清龍神社 居住棟

「取り敢えず、学校に行っているであれば仕方ありませんねと、ミサカは縁側に腰を掛けながら腰を掛けてみます。

心が落ち着きますとミサカは感想を述べます」

「あのですね・・・」

「?」

「取り敢えず、ご主人様から支持を受けたので修行の方をしますよ。」

昨日、弾幕を出す所まで行っただので今日は遂にスキルカードですよ」

「めん d」

同日 同時刻 富士見中学校放送準備室 第三者目線

「取り敢えず、お前を今封印する気は無い。」

でも、一つだけ聞いていいか?」

「?」

「お前、学 校こんな所でをやる気だ?」

何処からか取り出したか不明の（不要物持込として校則違反の可能性あり）を向けて威嚇する。

「別に好きで此処に留まっているわけじゃないです」

つまり地縛霊なのだろうか?」

しかし、あたりを見回しても結界の様な物は見えない。

「地縛霊でも無いとなると?」

しかし、それと同時にチャイムがなる。

「つち、予鈴か」

そう言つて再び湖南が 姿を消える。

「嫌だ、待つて」

彼女（？）の口から言葉が漏れる。

自分の久しぶりの素直な感情に枯れた涙を流しながら、追いかけていく。

同日 13：40 富士見中学校 某教室 科目：歴史 湖南目線

「というわけで、前回の復習は此処までだ。

大宮島^{グアム}諸島を落とされた日本海軍は極東同盟の宮沢国軍に支援を依頼。

翌日、宮沢より第二実利艦隊が送られ、日本海軍の鳳凰艦隊とともに・・・」

まったく蒲原新矢先生の歴史は黒板に書く速度が早くてノートに書くのが間に合わないし。

『何がそんなに面白いの？』

机の横に座つて聞いてくる。

「あいな——」

「さてと、坂上、どうしてか答えてみる？」

俺が文句を言おうとした所を先生に遮られ、ご丁寧に質問まで振られたので素直に答

える。

何故、海軍が一度落としてグアム諸島を取り返したかって、

「大宮島諸島から日本本土へ直接空襲が可能だからでしょうか？」

俺は、教科書に書いてあった一文を読み上げる。

「そうだ、但し連合国軍は水上機に改造して本土空襲を開始したかな。

その後、連合国軍はポツダム宣言を出すか、日本はこれを黙認したわけだな。

その後は、8月6日広島に原爆が落とされた。

これに対して宮沢国軍が黙っているわけが無く、その二日後つまり8月7日にニューヨーク、ワシントン、モスクワ、ロンドンの五都市に水素爆弾を落とすわけだ。

原爆のような破壊力はあったが、汚染が無くて、その後の事もしつかり考えていたわけだ。

8月9日に連合国軍は戦争行為を中止し、8月14日に太平洋終戦宣言を出したわけだ。

日本は8月15日に、この宣言を受け入れ終戦って言うわけだ。

8月16日には独露戦争も、休戦って言うわけだ。

こうして8月16日に第二次世界大戦は終戦って言うことで、さっさとノートを書いてくれ」

あれ？

俺の知ってる世界史と違うような気が、まっいか。

第74話 「学校七不思議—2」

放課後、あえて教室に残って再び現れるのを待つてはや数十分。
やつとこさつとこ姿を現したかと思つたら一気に周りの雰囲気が変わる。

「七不思議の一つ疲れているように見える教室か」

そう呟くと六角石風流剣を構えながら結界を発動させる。

「全く、7個中2つに関わつてるとはな」

俺の背後に突如として霊圧が掛かる。

俺はあえて後ろを向かないまま一つの質問を投げ掛ける。

「お前、こんな所で何をしている」

「私がここに居るのに何か理由が必要ですか？」

∴。

「別に、全く無い。

という訳じゃないんです。

あの子に仕返しが出来れば良いんです」

「別に答えてくても良い。

誰に對してだ」

「坂上臯月。

私の良き友でありライバルであり同業者であるんですよ」

「俺がそいつの弟だと言う事は知ってるんだよな」

万が一の為にポケットに護符を忍び込ませて置く。

「ええ、でも、貴方可笑しいと思わないの？」

「何がだ？」

「何もかもが貴方の都合の良い良いに回っていることに」

「それがどうした？」

俺は過去の出来事を振り返りながら聞き返す。

「やはり分かっているみたいだね」

?

「何がだ？」

「別に良いけど、さつきから外で聞いている人が居るみたいだけれども？」

確かに外から魔力を感じるが、それがどうかしたんだ？

「これは極秘事項だから言えないけども、それ以外なら答えるわよ」

そう言っつて小さなビー玉を残して消えていった。

「全く何だったんだよ」

そう呟きながら教室をでる。

「ニャー」

何で校舎内に猫が居るんだよ。

「まっ、良いか」

猫を校舎内に残し、最終下校時刻ギリギリに学校をでる。

と、此処で共祈からの通信要請が会ったのに気付く。

ここからだど弁財天經由かめんどくさいな。

そう考えながら、追伸をかける。

昨日から、通信する際にはお互いに要請してからにし、狛犬の通信装備を経由す利用にしたため、ペアとなる通信用に心通席の玉を持つとく。

こうすることで春日とも通信できる様になったのだが、霊力を使わなうと行けないのがいたい。

ま、常に結界を纏える程度には余裕があるが。

〈それで何の用だ〉

俺は周りに気を付けながら、家に帰る。

〈それがですね、ご主人様の許嫁だと言っている人が来ているわけですね〉

は？

許嫁だと。

〈何か手紙を持ってきているのですが〉

本家の奴は何を考えてるのだから。

〈取り敢えず待つてもらえ、すぐに帰る〉

そう伝え通信を切る。

全く、明後日でミサカが帰るかどうか決めると言うのに、この時期に。

「と言うか、許嫁って違法じゃないっけ？」

第75話「学校七不思議—3」

残る七不思議は、

最終下校時刻をすぎた生徒に出てくる悪魔

満月の夜に動くマイケル（人体模型）の謎

秋に咲く桜の死に誘う花弁

無限に続く廊下

最初の奴だけ今は心配すれば良いか。

そんな事を考えながら帰るが、途中で猫が飛び出してきたので少し驚いたが、特筆する事と言えばそれぐらいかな。

〈今帰ったぞ〉

心通石に霊力を通して直接通心を開始する。

〈はいはい、来客は客間ですよ〉

客間って、宴会場を仕切っただけなんだけれどもな。

〈分かった、もう少し待ってもらえ〉

〈？何故ですか？〉

〈ちよつと調べ事があるからな〉

そう伝えて通心を終える。

「神事記録―2000は何処だっけ」

書庫内でそう呟きながらバックナンバーを調べる。

「あつたあつた、後は人事記録と」

―2―

伝書鳩に確認の手紙を持たせて本殿に送る。

それから鞆を置いて客間に入る。

「待たせましたね」

そう言つて中に入る。

「あの、これ……」

そう言つて手紙を渡してくるので目を通しておく。

「くつそめんどくせ、わざわざ暗号にするなし」

取り敢えず、手持ちの知識でなんとか解説して読んでいく。

「本家より葛南分家に重要な通達」

現在我らが風雷族が存続の危機に当たっている事が既に御存事の通りである。

現在2000年戦争の影響により、現存する風雷族の神司の儀が全て失敗した事も御

存知の通りであると思います。

そこで唯一神使として発芽している湖南殿にそちらに居る志津と一緒に（以下略）
「……」

「ふざけんよ」

「何だよこれ、確かに本家からの重要連絡に使われる乙種暗号法だけでも、

「本家の連中は基本的自由人権を理解してないのか」

「そう言いながら手紙を読み進める。」

「そこで、俺は最後の一行に目が行く。」

「なお、今夜一晩過ごして考えて見るように」

「あー、これあれだ、

「ゆうべはお楽しみでしたね」とか言う奴」

「いや、健全な作品に十八禁要素持つててくる無し」

「そう言いながら手紙を机に叩き付ける。」

「誰に言っているんですか？」

「本家の奴らだよ」

「そう言いながら部屋を出る。」

「あの、どちらへ」

「夕飯を作りに行くの！」

— 3 —

予想外の来客が来てしまい、これ以上やると変な方向に方向に進みそうなので大人しく銭湯に行く事にした。

「銭湯代が地味に痛い」

4人で1500円、何処かで削らないとな。

「お、御神様所のお坊ちゃんじゃんよー」

げ、酒屋のおっちゃん。

厄介な事になる前にさっさと上がろう。

薄い結界を纏って湯船に浸かる。

「結界無しだと熱すぎて入れないだよな」

そう呟きながら適当に時間を潰す。

「逆上せて寝ちやうと死ぬから上がるか」

適当に温まったのでさっさと表に出てみることにする。

「春日達大丈夫かなー？」

女湯の方を見ながらそう呟く。

—— 風中同化で覗け ——

その様な悪魔の眩きが聴こえるが無視する。

「そう言えば七不思議の悪魔の奴、結局なんだんだったんだ？」

自費でコーヒー牛乳を買って飲みながら春日達が上がのを待つ。

第76話 「学校七不思議―4」

結局、昨晚襲ってきた悪魔を追い払ったところまでは良かったのだが、一度起きたらもう1度寝ることが出来ないと言う体質のせいで渋々起きる事にした。

二度寝しない事は良いのだが、結局睡眠不足のまま朝を迎える事になりそうだ。

志津に襲われるや、学校七不思議の悪魔に襲われるや、なんと言うか。

「不幸だ」

望む奴は代わってやっていいぞ。

取らりあえず、今出来ることを考える。

しかし、何も出来る事は無いと言う結論に至った。

「朝からパソコンとか」

適当に新しいテキストファイルを開きプログラムを書き込む。

「また頼まれたけれども、俺はあくまでも一般民なんだけどもな」

この前頼まれた、AIの構文をドンドン書いていく。

――1時間後――

「後は、これをこうしてつと」

取り敢えず、自立駆動の部分を終わらせ、今まで作っていた部分と合わせて一つの巨大なプログラム構文を作る。

「後は起動するだけ」

<P A S M O . 0 . 0 . 1を起動しています…:

画面に文字が表示され、その後一気に構文の読み込みが行われる。

<P A S M O . 0 . 0 . 1は正常に起動されました

<ボデイが認識できません

<演算起動モードに変更されました

<スキンを確認しています

<スキンが確認できません

<スキンを検索しています

<スキンの用意ができました

<入出力言語を日本語に統一しています

<起動が完了しました

<A Iを起動しています…:

<A Iが起動されました

『始めまして。私は東長椎名です。』

よろしくお願いします。』

「やっぱり、起動に時間かかるか」

『それは、私に対する苦情でしょうか?』

画面の中にある、椎名が困った顔見せる。

「いや、別に」

『ネットワークに接続して今の状況を学習します』

＜ネットワークに接続しています

＜浦安築基地局↓東京地方基地局↓東京中心基地局

＜インターネットワークに接続出来ました

＜学習中です：： 1%完了 推定残り時間約760時間

：：。クッソ長げ。

「ま、取り敢えず放置だな」

電源をつけたまま部屋の外に出る。

何時もの様に紫色の気持ち悪い空だな。

「何時から俺はこの世界に違和感を感じないようになったんだ?」

日常のなかに混ざる非日常。

「異変か。」

くつそめんどくせ」

時計を見て時間を見ようとするが午前3：34で止まっている。

「まだ、始まってばかりと言うことは主犯は逃げきれていないな」

倉庫に行き装備品を取りに行こうとするが鍵がかかっているのか扉が開かない。

「鍵……」

鍵を取りに居間に戻ろうとすると右手に鍵があることに気付く。

「成程、そういう事か。」

「やってくれるぜ——」

第77話 「心の世界の住民の住民」

神社から外に出るとやはり、懐かしいの風景が広がっている。

風渡雷神様の時以来だが、一応変わってないな。

「自動術式で30分後に自動復帰だからな。

それまでどうした物か」

街と思わしきところに出るなり

「あ！主様！」

と、声を掛けられたので、振り返ってみるが誰も居ない。

「下です！」

「顔が近い」

反射的に殴ろうとするが、何故かわきされてしまう。

右手に靈力を込めもう一度殴ろうとするが受け止められてしまう。

しかし、よく見てみると色々突っ込みどころがある奴が受け止めているみたいだ。

まとめて見ると。

まず、男か女か分からない言わいる男の娘。

続いて獣耳——恐らく狼かと。ついでに尻尾も。

後は右手に持っている霊銃。

「色々可笑しい」

右手に六角石風流剣を呼び出し構える。

「何か敵対されているみたいですけども、主様が私達心の住民に手を出すことは無理ですよ」

それと同時に戦意が消える。

「ふん、くだらない」

俺はため愚痴を言いながら風流剣をしまう。

「それよりも、僅かながらこちら側にいるのであれば色々紹介してみたいと思いますし、お寿司」

「お寿司？」

「あ、お寿司食べたいなって」

「それじゃ、寿司屋行く？」

確か、駅前商店街に会った様な。

「はい、それでは駅前にも」

何か考えているみたいだが気にせずに手を握る。

「え!?あの!?!」

動揺しているみたいだが気にせずに一気にテレポートする。

「え、あの、」

「色々考えるな」

「あっはい」

最も、心の中では俺の思っているとおりに動くけどな。

「さてといい加減自己紹介しないとイケないですね。」

僕の名前は枚方樟葉。

心の世界では唯一外の世界に出ても自我ができるものです。

0と1のこの世界では僕を含め皆、只のアルゴリズムに従ったものです」

「あっそう」

適当に相槌を打ちながら話を聞く。

「それで、お前は男なの?女なの?」

どつちにしろ面白いけどな。

「でも、僕に性別なんてありませんよ?」

「で?」

「ないです。」

「中性です」

「どちらかと言うと?」

「真ん中です」

「男が0だとすると?」

「0.5です」

「外に出ると?」

「知りません」

「それじゃ、男女設定をonと。」

「ひゃっ!?! / / /」

— 2 —

二日前

「取り敢えず、こんなものでしょうか?」

大量に読み込まれる英文。

その下にある一つの小惑星の破片の映像。

それを指させながらキーボードでコマンドをどんどん打っていく男性。その横では同じようにパソコンに向かって格闘する女性？。

「ああ、それよりもどうやって誘導すり気だ？」

一通りコマンドを打ち終わった男性が隣にいる奴に聞く。

「地球の公道に乗せた。」

後二日ぐらいすれば勝手に落ちる」

そう言いながらコマンドを打つと、一箇所の衛星画像が出される。

「もしも、これに書いてあることが本当であれば——」

「——我等の神が正しきあることを——」

第78話「対宇宙空間迎撃兵器—1」

30分後通常世界に復帰するとご丁寧に龍脈が曲がっていた。

おそらく、こいつのせいで自動防衛が働いたのであろう。

「くつそめんどくさいが、一応原因を調べてみますかね」

しかし、神社の外に出ようとするがそこで結界に阻まれる。

こう言う時に自動書記が役に立つ。

母屋に戻って自動書記をつけている日誌を開くと何が起きたか大まかに書かれている。

「ふむふむ、つまり地球に隕石がぶつかったからその影響で色々狂っていると」

しかし、スカイネットによって監視されているはずだから隕石ぐらい予測できても可笑しくないはずなのに、何故出来なかつたんだ？

読み進めているとある一文に目が留まる。

『なお、この隕石は明らかに人為的である（下記の注意書き参照）』

「やってくれるじゃないの『風符 隙間ぬい氏ビル風』」

「ここから先は悪いが俺のシーケンスだぜ」

一気に地球規模の術式を発動する。

探索目的の一つ、明らかに力の量がおかしいやつ。

「見つけた」

二人だけ力のオーラが明らかに違うやつが居るのがわかる。

「座標情報整理、確定、『理論 乱雑座標移動』」

— 2 —

「やってくれるね、人間」

神界に用意された最高神アザトース専用の神殿。

その中で満面の笑みを浮かべながら身支度するアザトースがそうつぶやく。

彼女が邪神と言われる理由はここにあった。

一度彼女を怒らせると存在そのものが消えるまで相手をさせられるからである。

そんな彼女が身支度を済ませていざ、向かおうとしたその時に彼女の神使の一人が慌てて入ってくる。

「アザトース様、貴女様がわざわざ行かれなくてももうすでに例の神主が動き始めてい

ます」

その報告を聞くと手を止める。

「そう、例の細工はきちんと働いているのね」

「？」

例の細工とは何でしょうか？」

神使が質問する。

「そうね、彼みたいな純粹で強い神使は非常に珍しいからね、簡単に変化しないようにし
といたのよ。」

死ぬことも人として精神活動する事も難しくなる。

もともと、関心のなかった彼のことだから気づいていないみたいだけれども」

「それは、どう言う事でしょうか？」

神使が聞き返す。

「そうね。」

彼の対人恐怖症は幼いころのいじめや彼の育った環境以外にも、私の部下に監視させていたのもあるわね。

只でなくとも貴重な資源。

「純粹なカタチで残しておかないと」

「それってまさか」

神使が焦った顔で聞き返す。

「ええ、彼は人間との関りを少なくして、精神への汚染を少なくさせてつもりだったのだけれども、帰って常識が少なくなってしまったわね。」

だから、今、エンカント率を弄ってまで、枠を作らないとせつかくの資源が無駄になってしまわね。

それよりも地上はどうなっているかしら？」

第79話「対宇宙空間迎撃兵器—2」

欧州連合政府英国自治府の管理下にあるロンドンはかつての科学・魔術共に一番の都市として発展していた戦前の面影はもうどこにも無く、現在は廃墟がただ並ぶだけの街並みが広がる。

「そう言えば客が来てたんだっけ、戻ったらどう説明しようか」

そんな事を考えながら、例の二人がいる建物の前に来た。

『偽造収納符 六角石風流剣』

・・・。

「召喚失敗、壁にめり込んだ」

もう一度やり直す。

『偽造収納符 六角石風流剣』

きちんと償還できた。

「やつぱり誤差が大きいかなー?」

1mにつき0.01mm、だけれどもやつぱり長距離になればなるほど誤差が大きいな。

これが星間単位になると・・・。
考えたくない。

取り合えず今はこの事変を解決しないと。

「お邪魔しまーす」

静かな声で言いながらこつそりと中に入る。

中は、きちんと清掃されていて以前テレビで見たイギリスの一般民家と同じような雰囲気の流れている。

取り合えず怪しいのは地下かな？

階段の裏にある地下への扉がある・・・、と思ったけど・・・。

「あれ？AMS規格よりも建てられたの前なのか？」

取り合えず、探さないと・・・。

— 2 —

「ない・・・。」
実際には10分
体感時間で1時間ぐらい探したけど無い。

後は、隠してあるとか。

「さすが魔術の国英国、魔術で隠すとは」

まさか、今立っているところの真下にトラップドアがあるとは。

取り合えず能力で魔術無効術式を起動する。

やっと、床との繋がりが外れた。

トラップドアを開け中に降りる。

そこには奇妙な光景が広がっていた壁一面に広がる機械。

恐らく、スパコンでは怪しまれるから大量の自作PCを繋げて並列演算させているの
だろう。

その奥に多くのケーブルが集まる部屋がある。

そこに入ろうとした瞬間

「じゃ試してみるか」

一気に弾幕が迫ってくる。

ッ！

『風流剣 瞳風雷』

弾幕を張り返して応戦する。

「このコンピュータ、代理演算させれば使える！」

並列演算機構接続指定術式の代理演算を実行。

甲種術式指定時間への時間移動を發動準備」

取り合えず復帰の準備はおkと。

「後は・・・、あ、一人やつてるからあともう一人・・・」

そんな事を考えながら中に入る。

しかし、そこにあつたのは絶対にあつてはならない光景だった。

天使を利用して回復を試みようとする人間の姿・・・。

「てめえら、こんなこと事をして許されると思っているのか？」

無詠唱で右手に強化術式用の陣を展開しながら睨み付ける。

「待て！俺たちは——」

「問答無用！『雷砲』サンダースパーク 直流電磁誘導砲ッ！」

第80話「対宇宙空間迎撃兵器—3」

「4発だ。

保険として15分ごとに落ちるようにした」

なん…だと…!?

「成功した場合はどういう風にする気だった？」

俺は止める方法を聞く。

「こいつの力で予定だった」

そうか、つまりどうすればいいのさ？

〈貴方は、馬鹿なの？〉

おい、アザトースいくらなんでもバカは言い過ぎだと思っただが。

〈呼び捨てについてはひとまず置いておいて、今から貴方を宇宙空間に送り飛ばすは。

後は、分かるわよね？〉

アレだろ、衛星についてる対宇宙空間迎撃兵器を手動起動すればいいんだろ。

〈それじゃ、行くわよ。3、2、1〉

「やっぱり空気と重力が無いと移動しづらいな」

こまめに座標移動を繰り返しながら目的の7番衛星の背面に移る。

こいつはもう使われていない宇宙ゴミで明日回収する予定だが、衛星砲はまだ使える。

「えーと、手動操作作用のアクセスポイントは……」

あつたあつた。

よし、アクセスアンド起動。

エネルギー砲スタンバイ」

「目標確認、発射！」

目標撃破確認、帰還準備開始。

アクセスポイントを戻して。

多分、これで問題ないはず。

〈そうかしら？〉

この魔術を解くには術者を倒さないといけないのよ？〈

おい、ちよつと待て、術者つてさっきの？

〈ええ、そうよ。

さっすきの二人組完全なる自作自演よ

ってまさかさっすきの天使は!?

〈気付くのが遅れたけれども彼らが召喚したものよ〉

やっぱり……。

あの時殺つとくべきだったな。

〈とにかく戻すわね〉

—3—

「全く、素直にあの時に殺つとけば良かったな」

元いた地下室に戻り今回の主犯に向けて刃を見せる。

「ハハハハ。」

気付いてしまっか。

ならば仕方ない」

「予定よりは早いが、Go white further hunter!」

そう言う上上の扉が壊された音がし、続いて地響きが部屋全体に響き渡る。

まさか、こいつツ!

「You are dei now.

For white further」

何を言ってるんだコイツ？

明らかに文法が違う！

「ハハハハ。

流石に英語までは理解出来ていないか！

そうか！それは傑作だ！

Go！」

「ッ！

仕方ない『終結 終演結界』

慌てて結界を貼るのと同時に一気に力がかかる。

原爆程度なら防げると言われるこの結界だが、只の人間如きに破られるとはな。

ん？

何でこいつ限界出力を超えたパワーを持つてるんだ？

と言うかそもそもこいつから霊力とかそういうったモノを一切感じない！

まさか、こいつ！

正体に気づいたと同時に結界が物理的に壊される。

「You are dei now」

右手に持ったナイフで首すぎに切りに掛かってくる。

第81話 「対宇宙空間迎撃装置—4—」

「まったく只の馬鹿だったらありたがったのだがな」

首筋に別種類の結界を張り咄嗟とっさに防衛に入る。

そしてその間に新しいスキルカードに情報を書きこむ。

『理論 現想同一性症候群』

一気に俺の周りにあるものが一気に解け炭素となつて俺の後ろに箱型に集まる。

「やはりな、精神疾患者か」

やつぱりそう呼ぶか。

確かに俺達能力者は病名上そうなるんだよな。

能にある種の障害が生まれつき存在していて現実を正しく見ることが出来ずに逆に

現実を曲げてしまうことがある。

また、能の稼働率が他の人に高いと言うことが言えるな。

これを応用して人工的に超能力を開発しようとした研究がアメリカであったが失敗に終わったなしいな。

「ま、別にそう呼ばれるには慣れたし。

とにかくこの事変を終わらせて早くあったかい布団で寝たいんだよこっちは」
 後ろにある炭素の塊から水素銃を練成する。

「何だ、その後ろにあるものは「敵が行動に移る前に攻撃せよ」

相手が指示するのと同時に練成が終わり乱射体制に入る。

無効がどこからか黒曜石のナイフを取り出してこっちに標準をあわせてくる。

しかし、向こうが攻撃に入る前にナイフを酸素に変える。

そのままこっちから拘束するように二人に酸素から作り出した鋼鉄の拘束具を設置する。

そう言えば何かを忘れていたような……

次の瞬間、後ろから銃声が聞こえると同時に頭に鈍痛が走る。

まさか、この俺が銃に撃たれたのか

何だろ う、力

がぬけ てい く

このなかんか く は

目が覚めると一面彼岸花の花畑。

.....

つまり俺は死んでしまったのか。

「お、やっと目が覚めたか？」

ふと後ろから声をかけられる。

振り返ると自己主張の激しい実をもった小町が鎌を右肩にかけてこつちに来いと手招きをしている。

「えつと、やはり閻魔様の所へ？」

俺は万が一の為に右の腰袋に入れてある100円玉に手をかける。

その素振りを見かれた小町はあきれた顔をしながら

「そっだい、あんた何をしたかは知らないが準備が出来次第つれて来いって言うもんだ

からね」

そう言うのと小船に乗り、こっちに來いと手招きをしてくる。

俺が小船に乗ると小町がゆっくりと小船を漕ぎ出す。

「あ、渡し代はどうすれば？」

右手に100円玉を握り何時言われてもいいように準備する。

しかし、小町はその様子を見るなため息をついて。

「別に必要ないよ、仕事だし。」

でも気持ちとチップは後でもらつとくよ、今漕ぐのをやめると大変なことになるからさ」

そう言うのとさらに漕ぐスピードをあげてくる。

本当に死んでしまったらどうなってしまうのだろうか。

神社は大丈夫だろうか。

そんな心配が頭を過ぎる

第82話「モロクロの境界に立つ地蔵様」

三途の川を渡る事30分。

何とかして向こう岸の”あの世”へ渡ることが出来た。

小町に渡銭を渡して閻魔様の所へ向かう。

渡るや否やこちらの方へと死神が手招きをするので中に入る事にした。

以前の様な強制離脱では無く、自然離脱であるので霊力はきちんと使える。

万が一に備えて全身に対して結界の補強をして閻魔様の所へ向かう。

2

閻魔様の判決は黒。

過去のやらないといけない試練から逃げていたので、試練の部屋の中で突破してからもう1度来るようにとの事だった。

ちなみに試練の内容を聞いても答えてはくれず、実際にやってみればわかるこの事

だった。

あの世の中心にある裁判所から少し離れた林の中に試練の洞窟なる物があつた。閻魔様の説明によればこの中にその試練があるとの事だった。果たして、試練とは一体なんだろうか。

3

湖南が倒れた翌日・国立高度医療センター

「全く、君の弟さんは無茶な事をするのかね？」

ディスプレイにカルテに出して医者が臯月に聞いてくる。

素人に見ては一見何ともないが専門家にとつては生きている方が奇跡に近かつた。

脳細胞使用率96%。

気絶している人間・・・ましては起きている通常の人間でもありえない数値である。

現想同一視性症候群を発病した人の脳の稼働率は普通の人より高くなる傾向にあるのだった。

しかしそれでも40%であり^{能力使用}覚醒状態でも60%でありどのような事をしても絶対にありえない。

そして人間の脳は一定以上の負荷をかける機能停止に陥ることになってしまい、最悪の場合再起不能になってしまう。

この様な事になっている原因は一つ。

銃弾が当たって損傷した脳細胞を修復するためである。

人間の脳細胞は一度破損すると再生不可なのであり、代理として電子補助脳を使用するが特殊能力は使えなくなってしまうのだ。

普通の能力者であれば、この時点で諦めるのだが湖南の場合には脳の修復を選んでいく訳であるが……。

「弟さんなんだけれども、絶賛昏睡状態なのは良うんだが……。

このペースで修復させてたら……その……半年後になるよ?」

「そうね……、私の方で手配はしているけど、何とも無いのね?」

この場合の皐月の心配事は一つである。

【今まで隔離していた人間関係を一年以内に常人並みにする事】

半年の時間ロスとなるとそれだけ機会が減るといっわけである。

「出来るだけ早くしないとイケないのに、ホントめんどくさいわよね」

「それより、弟さんには何時になったら話すのかね？」

君が血の繋がって無い無い姉だと言う事を」

「本人も薄々気付いているわよ、まあ本人から言い出さなければ言うつもりはないわ」

第83話 「紅霧異変」

「何だこれ」

赤い霧の反射する湖。

まさか、これは紅霧異変？

後ろから氷の弾幕が来る。

「記憶の欠片……と言う事は鍵のレミリアを倒せばいいな」
メモリアルストーリー

後ろにいるであろう氷精に向けてショット打つ……。

「外した!？」

「アタイは最強なのだ、出オチなんてないんだよ!」

それと同時に視界が真っ暗になる。

混ぜるな危険、戦えない。

「私とチルノが混ぜれば最強なのだー」

それと同時に弾幕が迫ってくる。わずかな風の違いで間一髪で避けるが後を追って冷気が襲ってくる。左手に炎を纏い弾幕を溶かしながら相手の位置を調べる。

「見つけた、『風雷 雷玉』」

二人に被弾するのを確認するが、一人の反応が可笑しい。
「全く、これだから妖精は……」

解けた氷をを投げすて闇の剣を向けてくる。

「邪気眼でやつと成れたというのに……くっそめんどせ」

取り合えず、ルーミアの姿を把握するが俺の知っている姿と違う。

もしかして、EXルーミア？

そんな事を考えている間に、弾幕に囲まれる。

「考え事をしているみたいだけれども、そんなに私に勝てるのかしら？」

次の瞬間、一気に弾幕が迫ってくる。

グレイズしながら以前から研究していたベクトル変換の応用業である力の蓄積と放出をする為闇の結晶を集める。

る。

しかし、蓄積まではよかったがその先の放出はできず、その場で爆発してしまう。

「馬鹿なやつ、まさか自分で攻撃の威力を高めるとは」

クツソめんどくさいから、さっさと終わらせるか。

『雷砲 直流電磁誘導砲』

しかし、交わされる。

「誘導までついてるのはよかったけど、直前で交わされてどうやって攻撃できるのかしらっ。」

「こいつ、まさか俺のことを学んで!？」

「お返し『魔砲 ダークスバーク 闇の中の絶望』」

目の前に終焉結界を出して食い止める。

「結界を出しておいて正解だったな」

傷一つない結界を消しながらつぶやく。

「ほんと、見様見真似で撃った不回避弾幕を止めるとは、面白い奴。

後でたっぷり、食べてあげるからね」

その瞬間弾幕の量が増える。

『闇符 亡き者の涙』

一気に闇を帯びた水属性の弾幕が迫ってくる。

どうやら俺の周りに纏わりつくらしい。

『天符 三番瀬の満潮』

俺の放った光を帯びた水属性の弾幕がルーミアの弾幕を消していくが、それよりも溜まっていく量が多い。

次の瞬間、ルーミアの弾幕が消える。タイムアウトだろうか。

「ふん、まだまだこれからよ」

そのセリフとともに弾幕が再び迫ってくる。

しかし、俺自身もルーミアの弾幕の法則性を見つけたので、グレイズしながら交わしていく。

そして、右手に緋色金製の本物の4六角石風流剣を呼び出す。

それに合わせるかのようにどこからか闇で出来た剣をこつちに向けてくる。

チャンスは一回、俺にあたる前に相手に当たれば俺の勝ち。

相手の攻撃が俺に当たれば俺の負け。

『闇符 デイーマケーション』

相手の弾幕が一瞬止む、今だ。

『剣符 雷流包刀』

スペルを宣伝し、ルーミアに向かって突進する。

「今のは良かった、しかし、私の方が早かったな」

俺の右腕に弾幕が被弾する。その瞬間右腕が重くなる。

どうやら、俺の負けと見ていいらしい。

しかし、俺はまだ気絶はしていなく戦える状況にある。

何がどうであれ、取り合えず勝たなければいけないのである。

「本当なら負けてるんだろうけど、基準を決めていないからな

『風流剣 風切残刀 瞳風雷』

使用を自粛していたスペルだが止むを得ず使用する。

次の瞬間、一気に弾幕が消える。

「へー、面白いスペルだね」

そう言いながら闇の剣を俺に向けて、突き刺しに来る。

一か八か、再びベクトル量の蓄積をする。

「また、それ？ いい加減詰まんないよ」

しかし、今度は出ごたえがあった。

『理論 エネルギー保存の法則』

次の瞬間、結界に封じ込められたエネルギーが一気に爆発する。

ルーミアはその衝撃で気絶。

それと同時に周りを覆っていた霧が晴れる。

どうやら、めんどくさい試練のようだ。

紅い館には目もくれずに一気に屋上を目指す。

さっきの通り同じフィールド上にいる敵をすべて倒すのが条件で敵の制限が無ければ、レミリアを倒せば取り合えず、この試練が終わるはず。

次の瞬間、時が止まる。

「何故かしらね、時を止めている間、貴方が動いて居たのかの様に見えたのだけれども気のせいかしら」

銀のライフをこっちに見せつけながら咲夜がそうつぶやく。

実際問題咲夜の能力は俺の中でエネルギーの値を瞬間的に0にしているという風に変換して出力しているので咲夜が時間を止めている間でも動くことが可能である。

と言うかこんな事を書物で見たんだが筆者とタイトルが思い出せない。別に関係な

いが。

「さっさと終わらせたいからどいてくれるか？」

偽造収納符からお祓い棒を取り出し咲夜に向ける。

それと同時に四方八方からライフが飛び出てくる。

どうやら咲夜自身の時間を早めたみたいだ。

「めんどくさいからさっさと終わらせるけど文句を言わないでね。

『理論 あなたの理論が崩壊するとき』

次の習慣咲夜の動きが遅くなり周りの風景も普通の速度に戻る。

「咲夜、下がちなさい」

上からレミリアが降りてきた咲夜を後ろに控えさせる。

そして、俺を睨み付けこう言った。

「てつきり博麗の巫女が来るかと思ってたのだけれども……」

どうやら違ったみたいね。まあいい。

私の邪魔をする人間はすべて排除する『神矛 スペア・ザ・グリーングル』

一気に神矛を構えてレミリアが突進してくるのでわずかな隙間を作って交わす。

「どうした人間、戦わないのか？」

レミリアがこっちに神矛を投げながら聞く。

「そうだな、お遊び程度なら付きやってやる」

虚空から緋色金製の六角石風流剣を取り出しレミリアに向ける。

「なめんなああああ」

次の瞬間さっきの倍の速度で再び俺に突っ込んでくる。

「な!?!」

鼻先寸前で神矛を止め押し返す。

動揺しているレミリアをよそに一気に畳みかける。

『剣符 風切残刀』

しかし、蝙蝠上になって交わされる。

それと同時に俺の周りに纏わりつく。

『獲蝶 スカーレットバンパイア』

周りに纏わりついている蝙蝠から一斉に弾幕が出される。

交わそうにも交わしきれない量であり仕方なくあの手段を使用する。

『印符 清龍下総古文封印』

本体の一匹を除いて周りに纏わりついた蝙蝠が一斉に消える。

しかし、再び増える。

「甘いな、こんなで私を敗れると思っていたか」

「いや、しかしこれで終わりは見えたな」

そう言いながら虚空から銀のナイフを取り出し、右手に電圧を一気にかける。

何処かの人間が行っていた、あの技…。

『雷符 超電磁砲』

「ッ!？」

祝 紅霧異変解決（?）

第84話「春雪異変（東方妖々夢より）」

レミリアを倒した俺は時空の境界線へ飛ばされる。

つまり、試練は一つだけではないと言う事である。

そして、飛ばされる先はそれぞれのステージであることを考えると、やはり原作に沿った試練であると言う事だろうか。

「くくろくまくく」

御馴染みの台詞を吐きながら出落ちするレティは無視して、原作通りの目的地である冥界を目指す。

結界の歪みの方向は大体わかるので後は他の奴に会わないように飛ぶだけである。

「見付けた、結界の綻び」

当然ながらその目の前にいる幽霊楽団。

「貴方に眠る幻想の音本当の気持ちここで演奏させて」

『騒葬 ステイジャンリバーサイド』

行き成りのスペルカードの宣言。

緋を取りながらエネルギーの回収を行う。

しかし、一人が散弾を撃ち、それ以外の二人が移動するとなるとくつつそ交わすのめんどくさいんだが。

「めんどくさい『風流剣 瞳風神雷』

三人が中心に集まった時点でスベカを発動する。

『幻音 変わらない現郷』

大玉は弾かれそこから出て行く雷も弾かれる。

「本当のプロはこの程度ではめげない。

見せてあげる、私たちのプロ魂」

その宣言とともに大量の散弾が俺をめぐけて飛んでくる。

「甘かったな『結符 風重結界』

三人の動きを封じてから一気に大玉を打つ。

「そう、まあいい、貴方の幻音は私たちには演奏できない」

その宣言とともに一気に姿が消える。

しかし、あの台詞の意味って……。

結界の綻び——この世と冥界の境界——を強行突破し冥界に侵入する。
勿論、帰りのための現実と幻想の境界を設置する。

「ここは幻界、亡き者の集う場所。」

命ある人間、とくとお前等の現界に引き帰すと良い」

半魂をなでながら進路を塞ぐ妖夢。

しかし、お前にかまっている暇はない。

「すまないが、俺にも仕事があるんだ。」

とつとそこをどいてくれ。

どかぬならば、力をつかわせていたただくがな」

虚空から六角席風流剣を取り出し妖夢に対して威嚇を行う。

「ははははは、何を言うかと思えばつまなることを……。」

いいだろう人間、これが私の力だ」

左腰にぶら下げている長いほうの桜観剣をこちらに向けていつきに掛かってくる。

右手で攻撃を防ぎながら左手で空間に対して演算結果を記述していく。

「何か迷いが有るみたいですが、その程度の実力では私に勝つことなどできないですよ

『修羅剣 現世妄執』

一気に力が増し周りから散弾が飛び出す。

「不十分だが、仕方がない『神術 在りしものに対する神断』

古事記に書かれている術式を再現するが、威力としてはいまいちのまま時間切れをも帰る。

「人間、ここまでだ『天神剣 三魂七魄』

っ!?

咄嗟に発動した結界において攻撃は防いだが靈力を無駄に使ったので少しばかりか脱力感が出る。

「人間、もう諦めるが良い」

そう言つて喉の前に刃をおく。

はつきり言つてしまえばここで終わりになるが此方としてはここで終わるわけには行かない。

「そうか、お前の終わりだな『理論 時空並行説』

隣に別空間から飛び出してくる弾幕を出現させる。

「この世界は、今俺がいる時空だけではなく数多の平行時空によって動いていると推測される、勿論その分弾幕が常に出ている世界線も存在するつまり……。」

「気絶している奴に話しても無駄か」

奥で絶賛春を集めている幽々子の元に向かつて一気に飛行する。

「あらあら、てつきりは博麗の巫女が来ると思っていたのだけれども……違ったみたいね」

幽々子はそういいながら後ろに聳え立つ西行妖さいぎょうあやかしを指しながらこう言う。

「見なさい、この桜、西行妖を。」

まだ、花を咲かせてないでしょ。

花を咲かせるにはもつと春が必要なのよ。

さあ、邪魔をするのであれば、死蝶の餌食になるわよ」

そう言いながら花びらを次々に死蝶に変えながら此方に襲ってくる。

「めんどくさいが、その幻想は解いてやる」

右手で弾幕を放ちながら左手で再び時空の境界線を開く。

「あらあら、ここまでかしらね 『桜符 完全なる墨染の桜 ——開花——』

一氣に回りから散弾に紛れた死蝶が攻撃に掛かってくる。

「見せてやるぜ、お前の幻想の答えを 『追憶 土地の記憶の再生』

西行妖に眠る過去の記憶を一氣に結界に再現する。

その内容は、ここで何があつたかを証明するものである。

「そう、気付いてしまったわね 『反魂蝶 ——八分咲——』

一氣に攻撃パターンが変わり弾幕の展開が変わりシヨットに対する反応がない。

死蝶が来た後に大玉、そして赤いレーザー……恐らく死にたいする邪念であろう。

この世のものではないものに対しては、この世の攻撃が通るはずがない。

「厄介なものを再現してしまったな」

一人反省を呟きながら弾幕を回避する。

「では、この世のものではないものにはこの世のものではないものを 『追憶 過去の戦況——

深海海戦——』

かつて行われた第二次世界大戦のうち宮澤海軍が直接的に武力を使用した深海海戦。

その中で为中心的な役割を補った稔艦隊総合艦杏子を再現した幻想で何とかして對抗をする。

「お陰で、いろいろ分かったは、今まで付き合ってくれてありがとう」
その一言で後ろの西行妖の花が散る。

第85話 「永夜異変」

違和感のある満月の夜。

竹林がざわつく。

チエンジンウオチヤー

万能腕時計はエラーを吐き出す。

時限ループ。

それがこれのエラーの原因であろう。

しかし、根本的な原因は恐らく月の異変にあるだろう。

そんなことを考え、取り合えつ竹林を移動しようとしたときに後ろに違和感を感じる。

「貴方もこの月の異変に気付いたかしら？」

闇の属性の力……

「常闇の妖怪……それも本性の方が」

右手に緋色金で練成した六角石風流剣の原本を償還しながら問う。

「ええ、そうよ。それより貴方、この月の異変をを取り除こうとしないのかしら？」

「手を貸してくれるのであれば、歓迎するが？」

剣を還元して振り向く、と同時に左手に土着神の意思玉を償還する。

「交渉成立。その玉は真実を示すのかしら？」

左手の上に浮く玉は三つの光の方向を示す。一つは紫色の光を、もう一つは藍色の光を、後の一つは月色の光を示す。

「一番明るい紫色の方から攻めるか・・・？」

「そうね、後で戻ると二度手間だしそうしようかしら」

— 2 —

紫色の光が突然消えたと思えば青色の巫女服を着た奴と出くわす。

「まさかだとは思いますが、お前が真犯人か？」

左手の玉を消して右手に緋色金の剣を練成する。

「・・・『靈符 夢想封印』」

なるほど答えは肯定か。イエス

『劍符 風切残刀』

結界を刻みながら何とかしてシヨットを放つ。

『夢符 封間陣』

あちらこちらから飛んでくる板状の弾幕を交わしながらシヨットを打つ。

「もうちまちま面倒臭いわね『常闇 現代社会ダの闇トツ』」

周りから一気に闇に覆われた現実がたたきつけられる。

「・・・『夢想転生』——」

結界に囲まれる中、一気に弾幕が覆ってくる。

「めんどくさい『天符 三番瀬の満潮』」

しかしながら弾幕を流しとめるだけに過ぎずに相手への決定打とはならない。

「一つ提案がある」

「何だ？」

「私と戦った時に弾幕のエネルギーを蓄積して反射させるもの使えないの？」

「一度この装備を解除して理論装備にする必要があるが・・・賭けてみるか」

周りに漂っている弾幕を一度消し、装備を解除して理論装備に変更する。

が、その最中にレーザーが襲ってくる。

「その最中に行動できないのであれば先に言って頂戴」

左手から出される空間の闇によってレーザーは左にそれる。

次の瞬間に右手に緋色金の拳銃を生成する。

「それじゃ、『理論 エネルギー保存の法則』」

空間の闇が晴れると同時に弾幕のエネルギーを蓄積する。

貯蔵量の限界を向かえ後は、放つのみ。

『理論 空間蓄積量の限界』

— 3 —

再び神術装備に変更して後の二つの光のほうに向かう。

「後の二つの距離は同じか」

「そうね私が月色の方に行くから、貴方は藍色の方を頼むは」

そうやって二手に分かれる。

— 4 —

途中に兎が出てきたがとりあえず気絶させたおいた。

後で兎鍋でも食べるか。

「あらあら、また求婚者かしら？」

奥から声が響く。

「あいにくながら俺は、この月の異変を終わらせに来た」

右手の汚れている剣を磨いで間を隔ている障子を切り分ける。

「そう、せめて五つの難題に適すのかを見せてもらおうわ『難題 龍の頸の玉 — 五色の弾丸—』」

奥の龍から出てくる弾幕を交わしながら結界を準備する。

「二つ目はクリアね・・・『難題 仏の御石の鉢 — 砕けぬ意思—』」

俺がいる所が鉢所の弾幕の内部にアタリその外から一気に弾幕が入ってくる。

「めんどくさい『結符 風重結界』」

周りの弾幕を一気に落とす。

しかし、結界用に張りまわっていた札を再び準備する

『難題 燕の子安貝 — 永命線—』

しかし、本当に休む暇がないな。

次々に落ちてくる子安貝を避けながら反撃用の準備をする。

『難題 蓬萊の弾の枝 — 虹色の弾幕—』

後ろの蓬萊の花・・・地上では咲かないはずなのに・・・。

とりあえず襲ってくる弾幕を次々と避けながら術式の詠唱をする。

『新難題 金閣寺の一枚天井』

『神術 西上がりの日の出』

後ろに準備されている天井板を西が上がる暁で一気に消す。

その明かりで目が眩んでいる間に一気に王手を打つ。

『天符 京の都の暮れない日』

『輝夜！見つけたぞ』藤原 滅罪寺院傷』

後ろの戸が開かれると同時に一気に藤原が弾幕を放つ。

「こっちは取り込み中なんだよ『天符 若狭の忘れし大波』」

奥手から放つ大波の弾幕で消火をしてその間に退出をする。

「成程、歴史を再学習か・・・」

第86話 『間欠泉異変』

間欠泉センター内を最深部へ向かって飛ばしていく。

ここへのカギを手に入れるためにさとりと戦ったが、はつきり言ってしまったえばこつちの思考が完全に読まれているので、無意識に行動する必要があったと言う事が難しかったというところだろう。

「にやへんー」

何かが猫の鳴き声をしながら手押し車を押しながら通り過ぎたが、無視をしよ．．．
「いつけね侵入者じゃん」

慌てて振り返ったお燐が、弾幕を撃ってくるのが分る。

しかし、無視をして先に進む。

「もう、無視すんな！今炉の温度を上げているのに！」

．．．。

相手しないといけないパターン？

「無視すんなー！猫符 キヤッツウオーク」

めんどくさい、偽造収納符から猫又を召喚して放り投げる。

「ウニヤッ」

猫の本能が残ってよかった。

これこそ不戦勝だな。

外にある立入禁止の看板を無視して中に入る

「ウニユ？」

俺の事を見るらり頭を傾げるがそのまま炉の温度を上げていく。

と言うか、来てみたはいいが何をしろと。

「そういえばあんた、なにしにきたわけ？」

空がもう一度こちらを向いて聞いてくる。

「何ってそりやあ、地上に沸いている温泉の原因を調べに来たわけさ」

「なるほど、あたいのヤタガラスのちからをうばいにきたわけね！」

.....

どうしてそうなる。

「ぜったいにわたささないんだから！『核熱 ニュークリアフュージョン』
いきなり周りの熱エネルギーが弾幕となってこちらに向かってくる。」

「仕方がないな、神術装備を起動、邪神を排除『天符 三番瀬の干潮』
 弾幕を消していくが周りのエネルギー値がどんどん高くなっていく。

と云うか結界の温度耐性限界値に対してどんどん近づいてくる。

現在の炉内温度は1400℃弱・・・。

あいつは八咫鳥の力を宿しているし、俺も結界があるから何とか耐えれてるけどもう危ないな。

仕方がない、あれを使うか。

『天符 北露の絶対氷河』

周りに北極海の氷河山を用意して温度を下げようとするが周りの温度があまりにも高すぎるためにすぐに蒸発してしまう。

『核熱 核反応制御不能』

まずい、もう結界が持たない！

つ仕方がない『終結 終焉結界』『風符 懐かしき空気を運ぶ古の風』

結界の外側に弾幕を小再現した風を吹かせて空の撃破を狙う。

「あまいね『崩壊 炉心融解』
メルトダウソウ

まず、結界に亀裂がつ、まさかこいつ結界の微振動に気付いて！

——今度から絶対の強度名乗らないでおこう

神力の抜けた空を皆がら体に張り付いている結界の破片を取り除く。

結界が破れたと同時にラストスベルを発動させて何とかして勝ち残ったが、結界の強度を見直すきつかけになった。

ま、原因は守矢の連中だろうし、少し懲らしめますかね。

そう山頂に向かったその時だった。

「悪いけどここは山頂から下山道。」

登山道は反対側」

？何時からそこにいた。

「こいし様、これで良いのですね？」

看板を持った女性が隣に居たこいしに話しかける。

「うん、姉さんの言う通りこの男だよみとり」

「そう、取り合えず私に《《代償を要求する事を禁止する》》わ」

？何をする気だこいつ。

右手にスキルカードを構えながら相手の行動をうかがう。

「まず、貴方はそこからこつちに来ることを一切禁止するわ」

次の瞬間俺の前の空間の絶対次元座標情報が消える。

「何をした」

右手に六角石風流剣を構えながら相手の出方を疑う。

『閉符 地底の隅に独り棒立ち』

右手に棒が現れたと思った瞬間弾幕が吐き出させる。

「くそ、次元情報が見えないとやりづらいな、取り合えず『天符 雷の大弓矢』

霜柱で精製した弓に雷で出来た矢3度ずつ同時に撃つ。

『赤河童 禁止看板』

っ、力が封じられる！

『理論 貴方の理論が崩壊する時』

何とかして行動禁止を封じるがこちらもその間一切の攻撃は出来ないのが痛い。

『無意識 弾幕のロールシャッハ』

左手に被弾判定が入る。

まさか、無意識に結界を解いていた・・・？

「仕方ない『天符 葛南の晴天日和』

眩しい光でくつきりと影を焼き付ける。

次の瞬間、二人の居場所がはつきりとわかる。

「そこだ『雷砲 直流電磁誘導砲』」

第8001E話 「幻想の一時——1——」

神社での神主として勤務・・・、どうやら申請さえすれば特殊国家公務員としての登録となるらしく、取り合えず金銭面での危機は脱した。

と言っても公安員での仕事も増えたが。

御札を書き溜める一方、来年の初詣への準備を始める。

今までは社務所会の皆さんにお願いしていたので今年はできる分は自分でやりたい。

「よ！遊びに・・・そもそもお前受験勉強大丈夫か？」

勉強道具を鞆の中に入れて優樹が部屋に入ってくる。

「断りもなしに入ってきて暇かって聞くのは俺に対してケンカを売っているのか？」

後ろ手に軽く殺気を立てて答える。

「悪い冗談だは、つかお前ガチで受験勉強大丈夫なのか？」

机の反対側に座って勝手に勉強道具を広げていく・・・どうやら勉強はする気らしい。

「勉強よりもこつちが大事だからな」

後ろの引き出しから一つの封筒を取り出して優樹に見せる。

「全国模試って・・・全国1位しかも国立下総総合合格確率100%点数500点満点中

498点……。お前2点分手抜いただろ」

封筒に戻して机の上に置く。

「そうか？きちんと努力してる奴に失礼だろ」

後ろの引き出しに仕舞い、別の封筒を取り出す。

「センター模試……。しかも世界最高峰の宮沢国立文明大学かよ……。しかも1位点数900満点……。カンニングしたか？」

試験担当の教授がビックリした顔で映像を見返したけど何もなかったしな。

「特に何も」

「……。いつその事大いに飛び級したらどうだ？」

教材を開きながら提案してくる優樹、しかし俺の回答は決まっている。

「めんどくさいこ」

。。。。

俺の行動理由はめんどくさい事をやらない様にするが一番だったりする。

先生に勉強しろって言われたから1月感覚を遅くして迄も国立図書館の蔵書を読み漁ったぐらいだし……。記憶強化の術式は使ったか。

「お前は力の使い方の方向性が違うぞ」

教材を開いた時点で難しいそうな顔をしている優樹に軽く妬まれる。

いじめの原因の一つがこの考え方で今まで普通であった俺の成績が一気に全国トップクラスまで上がったことにある。

当時は間接的に神術が使えることは自覚していたがそれが能力とは考えていなかった。

と言うかお願いしたものが実現する程度にしか考えていなかった。

因みにこの摸試の結果が公表された当日にメディアの取材依頼が殺到したがすべて断った。

理由は言わずもがな偏見報道をするメディアは必要無いって、何時か公安維持法違反で自宅搜索してやりたいけどそんな権限無いし。

「……ここ教えてくれ」

そう言っ出てしてきたのは歴史の一齣坂本龍馬に関する記述だった。

「それ、覚えなくてもいいぞ

来年の教科書から消える……つまり歴史は無かったことになるからな

教科書は日本人を精神的に支配する方向に進んでいる。

それは冷戦よりも冷たく残酷な経済的・文化的な支配。

かつての日本・・・そして今の世界政府の様に」

「お前、本当に大丈夫か？」

第90話 「世界の基準点」

「知らない天井……」

「……は？」

横を向こうとするが麻酔が効いているのか頭しか動かない。

俺の顔に影がかかったかと思ったら皐月姉さんが俺の顔を覗く。

「よっかた、先生の言うとおりで。」

「どう、調子は？」

「そうか、俺は銃に撃たれて病院に運ばれたのか。」

「全身が固定……、感覚がないのもうなずける。」

「ああ、何か変な気分だよ。」

「それより今は何時？」

「湖南半年以上寝てたのよ。」

「もう12月よ？」

「は？12月？何時の？」

「そうね、まだ今年の出来事だって言えるところかしらね」

「まじか……」。

学校は、んまいいか」

そう眩くと姉さんはため息をついて視界から消える。

扉を開ける音がするのと同時に

「それじゃ姉さんみんなに連絡してくるから」

と行って部屋を出て行く。

しかし、みんなとはいったい誰のことなんだろうか？

優樹と魔帆の奴と商店街の人と代理の人、あとは先生だろうか？

そんなことを考えていると扉をノックする音がする。

「どっぞ」

返事するのと同時にゆっくり扉が開かれおそらく二人が入ってくる。

しばらくすると全身にくすぐったい感覚がするののが分かり、それと同時に全身の固定がはずされる。

「ちよつといいかね？」

おそらく医者であろう人が俺の顔をのぞきこんでくる。

「君の今後に今後についての話なんだが」

医者が後ろに立つ人物から茶色い封筒を受け取って話を続ける。
「まず最初に君の脳機能について。」

銃の弾丸は前頭葉に刺さる寸前で止まっていたね。

破片が2つ、脳細胞を傷つけていて、もしかしたら演算・言語機能に障害が出るかもしれないね。

そしてもう一つ。

これは私からのささやかな贈り物だよ。

オートメデイカルチェック

自動健康診断、脳演算処理数、霊力とかそう言ったものを数値的に出力する術式のスキルカードだよ。

好きなだけ使いたまえ。

後は、彼女から話してもらうかね……」

医者は紙を一枚置いて部屋から出ていくのと入れ違いで別の人物の顔が視界に入る。

「博麗……？神社は大丈夫なのか？」

何時もの巫女服とは違いどこからか用意したのか分からない私服を着ているのが分る。

「先に自分の心配をしたどうかしら？れい……湖南」

「全く持ってその通りだな。それで用は？」

左の袖から白い封筒を出してくる。

「みんなからの便りを届けに来ただけ」

そう言うのと机の上に置いてそのまま離れていく。

「さっさと体を治して元気な姿を見せてね」

そう聞こえると同時に霊圧が消える。

「だから動けねえだつーの」

ひとり呟いて眠りにつく。

誰かいる。

その気配に気づいて目が覚めたのはその日の夜だった。

『第289治療術式 女神の祝福』

一気に体の不調が消えるのと同時にその人物の正体に気づく。

「邪神 アザトース……。何の用だ」

俺の主神ではないのであえて本称で呼ぶ。

「邪神だったのは昔の話……。」

そんな事はどうでもいいの。

「貴方至急私の神使になりなさい」

特別編

第9000C話「ブレインインフォメーションpart

0」

あらずじ

性無零（セイムレイ）

某大学に通う性無零はある晩、八雲紫によって幻想入りさせられることになる。

しかし、能力が無く紫から希望の能力を渡すと言う事で幻想入りする事になる。

その際に希望した能力は”脳の情報を引き出す程度の能力”。

そして、移動した先はフランの部屋だった。

段幕ごっこと言う物を知らなかった零はひたすら逃げてフランの裏手に回り。

フランの眠気を引き出し、フランを眠らせている間、フランの過去を知った零はレミアにそれを訴えフランに外の世界の知恵を教える旅に出ることを決意した。

霧の湖を越えた先でチルノ達と話、命蓮寺の事を知り向かう。

其処で魔里沙達と出会うが、魔里沙達はフランの事を悪魔と誤解しており、零にそれ

について激しく激怒した。

それに心を打たれた魔里沙は零に着いていくことにした。

また、神子様のご命令二より物部布都が着いてくることにもなった。

その後、天魔との戦いで鎖を使用した戦法を編み出すなどの成長を見せたが、能力の過度な使用により肉体に多くのダメージを負い、暫くの間車イス生活を余儀無くされる。

その後、人里内の大通りを使用した宴会を行うなど大胆な行動を行うが、此はフランに友達と触れあう楽しみを知ってもらいたいから起こしたものだ。

この際に、魔法の森から来たと言う独りの半人半妖―坂上湖南―や田嶋涼、地霊殿の秋・笹野桜（幻想郷落雷異変主犯）と出会い、酒を交わし合い絆を深めた。

しかし、八雲藍が六代前の博麗の巫女を殺したと言う桜を殺しに掛かろうとして、零の怪我を酷くさせ紫に起こられてしまう。

しかし、性無零・田嶋涼・坂上湖南が幻想郷に来た理由の一つに共通するもの。

―幻想郷に攻め混む外来人を迎え撃つ―
と言うことが共通した。

その少し後、零が寺子屋で授業の手伝いをしている時、

結界を越えて直接乗り込んで来た、幻想郷の商業開拓を企む集団が幻想郷内で一気に戦闘を開始し幻想郷の戦力を分散させた。

彼らは幻想郷の人を一人も殺さず、幻想郷の占拠をする事を目的として居た。

幻想郷でのトップで有る八雲紫らは、自宅で足止めを受け。

風見幽花は先頭で苦戦し。

博麗霊夢も足止めを食らい。

河童共は魂を吸われ操られ。

人里の人々は命連寺に逃げ。

魔法の森だけがスタートラインに立てている。

このような状況で幻想郷は勝つことは出来るのか？

※2015/09/12 21:30現在

尚、この作品では坂上湖南が幻想入りするちよつと前から話を始めよう。

第91000話 「ブレインインフォメーション part

1」

痛ててて

どうやら、幻想郷からはじき出されたようだ。

こんなことが出来るのは龍神や紫・アザトース様位しか居ない。

俺の中に秘められた秘密。

たで続きに黙りいく世界。

それは、徐々に俺をこの世界が拒絶してものそのままだった。

しかし、ここは何処だろうか？

森の中だった。

すぐ近くに線路が見える。

とにかく降りてみよう。

・
・
・

東京サブウェイ15000系。

しかし、こんな山の中を走る区間なんてあったか？

とりあえず、線路沿いに歩いて行けば、何かが見える筈。
複線で電化路線。

該当する区間は四街道〜新成田間のみ。

とりあえず、今は神社に戻るしかないな。

南酒々井駅

NT総武本線・下総鉄道成田線が乗り入れる駅である。

改札機にICカードをタッチし改札内に入り階段を上がりホームに上る。

『まもなく2番線に地下鉄東陽線直通特別快速中野行きが参ります。

白線の内側でお待ちください。

当駅を出ますと次は、四街道に止まります。

地下鉄線内は快速と成増』

と放送が流れてホームに滑り込んだ列車は東葉高麗鉄道下総鉄道の2000系だった。

『南酒々井、南酒々井御乗車ありがとうございます。』

二番線は特別快速中野行きです。

b ————— (営団ブザー)

発車致します、閉まるドアにご注意ください」
なぜ営団ブザーがあるし。

「扉が閉まります、ご注意ください。

扉が閉まります、ご注意ください」

やった、レアな乗降放送が聴けた。

「下総鉄道をご利用くださいましてありがとうございます。ごさいます。

この電車は地下鉄東陽線直通特別快速中野行きです。

地下鉄線内は快速です。

停車駅は、四街道、勝田台、八千代緑ヶ丘、北習志野、西船橋、浦安、東陽町と東陽

町から先の各駅です。

次は、四街道、四街道、お出口は右側です。

NT総武本線・成田線、内山へ起こしのお客様はお乗換えです。

四街道の次は勝田台に止まります」

しかし、疲れてしまったようで途中で寝てしまった。

「まもなく、西船橋です。

お忘れ物無い様にご注意ください。

NT武蔵野線・中央総武緩行線と原木中山・妙典・行徳・南行徳へお越しのお客様は
お乗換えです。

この電車は地下鉄東陽線直通快速中野行きです。

西船橋をでますと、次は浦安に止まります。

The next station is Nishi-hunabashi
The doors on the right side open.

Please change here, NT central Sob
u Line local train, Musashino, subway

Toyo line local train.

This train is the subway Toyo line
direct fast Nakanoflights.

To you to exit the bridge and next
will stop in Urayasu.

Today also Thank you for this please
use the railway Shimousa.

神社に戻ると、そこにはありえない人が居た。

風田陸郎師匠がいた。

陸郎師匠は、俺がいることに気がつくど、すぐに箒を置いてこつちに近づいてきた。どうやら、陸郎師匠でいいようだった。

「師匠、お久しぶりです」

俺は、師匠に挨拶をした。

しかし、師匠は、

「しつ、時間が無いんだ、急いで伝えるぞ、一回しか言わないからよく聞けよ。

いま、お前の命を狙っている奴等が近くに居るんだ。

けして、戦わないように」

そう言うと陸郎師匠は消えた。

・・・

何だっただらう？

第9200C話「ブレインインフォメーションpart

2」

師匠が消えてから少しすると、おびただしい量の霊力の塊がこちらに向かってくるのが解った。

どうやらそれは、陰陽師の物で俺を退治に来るものだった。

——無実な人間を巻き込むな——

俺の頭の中にその考えが過った。

俺は師匠の警告を無視して陰陽師に立ち向かおうとした。

しかし、俺は能力を使うことができなかつた。

何故なら、能力封印の結界を先に張られてしまったから。

こうなつては、俺はただ無力な下級妖怪同然に見えてしまうのだろう。

邪神アザトース様、かぜわたりのらいじん風渡雷神様すみません、俺のちよつとしたミスで。

俺は覚悟した。

陰陽師に退治されることを。

しかし、陰陽師は近くによることができなかつた。

！俺はあくまでも半人半妖。

ということは、まだ霊力があるじゃないか。

俺は、必死に霊力弾を作り出した。

どんなに小さいものでもいい。

あ陰陽師いつらの目を欺ければいい。

俺は必死になって作ろうよとした。

しかし、それはできなかつた。

陰陽師が俺に向かって攻撃し始めた。

それは、タイムオーバーを意味していた。

俺は必死になって身を守った。

陰陽師の攻撃は主に五芒星を基にしているためか、全然痛くは感じなかった。なぜなら、五芒星が俺を避けているから。

左右の地面にあたって爆発しているの、煙で当たっているように見えるのだった。

しかし、俺に対して起きていた奇跡も長くは続かなかった。

「霊符 夢想封印 終」

終わった。

13年の俺の歴史はここで終わった。

?雲? 「いいえ、まだあなたの歴史は終わっていないのよ。

まだ、あなたにはやらないといけないことがあるのよ。

さ、まいりましょう、本当のステージへ」

倒れていた俺は誰かに抱えれ、どこかに連れいかれた。

目が覚めると、そこは真つ暗な森の中にいた。
なぜか、よく見える取りあえず、一回ここがどこか調べないと。
主人公補正だった

しかし、少し歩くと妖精が飛び出してきた。

どうやら、邪魔をしたようで攻撃を仕掛けてくる。

俺は邪魔なのでどいてもらうとスキルカード構える。

!?なぜ三枚しかないんだ。

30枚近くあつたはず。

取りあえず、今もっているスキ力で相手するか。

『風流剣 瞳風雷』

妖精は無事退治した。

取りあえず今は神社に向かうのみ。

うん？

足元に何か紙がある。

どれどれ？

人里で大宴会か。

日付は今日か。

主催は、性無零か。

つて、天魔と引き分けてどんだけ強いんだよ。

戦闘行為は禁止か。ただどあつて見る必要はありそうだな。

俺は、人里に向かって移動した。

第9300C話 「ブレインインフォームーション part

3」

いつもの様に門番に質問漬かと思っただか、慧音さんが宴会区域の出入りを自由にできるように命令したらしく会場の案内図のみもらい中に入った。

開始まであと2分か。

しかし、時間になって出て来たのは霊夢だった。

「ええ、今回集まってくさいますてありがとうございます。ごさいます。

今回、諸事情により主催者に代わり私が挨拶を述べます」

ここで俺の愚痴だ漏れてしまう。

「天狗の親玉に互角の勝負をしたという人間の姿を見に来たけどまさかの別人霊夢が登場。

何とかして”性無零”を探さない」と。

しかし、宴会が始まってしまった。

人々が大移動を始めてしまい俺は、その列に巻き込まれてしまった。

人々の波に飲まれ一つの空いている居酒屋に入り一息つくことにした。

「はあはあ、疲れた。

女将^{ミスティア}さん、鰻重一つ」

とりあえず何か頼んでおく。

「しばらくおまちください」

とミスティアの返事が返ってくる。

そういつてミスティアが奥に行った所で、

「はじめまして」

フランと一緒に居た青年が話しかけてくる。

「はじめまして」

俺は挨拶を返す。

「誰か探しているようですが」

青年が質問してくる」。

「性無零という人物を探して魔法の森から出てきました。」

天狗の親分と互角の戦いのできる人間を一目見たかったんです」

俺は質問に答える。

すると、青年はピンと来た顔をし、

「……。」↑少し黙る青年

「お互い知らないもの同士自己紹介しましょう」

青年はそう提案する。

「ああ、ごめんなさい僕は坂上湖南、半人半妖です。」

”風雷を操る程度の能力”を所持してまして、

使い方は各属性の性質を利用する形で使用しています」

俺は丁寧に自己紹介をする。

「なるほど、要するに物理的に無限に使用ができる広汎用形物理的無限対象強化系、分類名ES名は”サンダーウィンドエレメンター

”ですか、

妹紅さんや美鈴さん達と似た種類で系統の違う能力、貴重ですね」

その青年は解説しているような口調でしゃべる。

「ああ、俺のほうの自己紹介がまだでしたね」

そう青年は言い自己紹介を始める。

「俺の名前は性無零、現代脳科学天狗の親玉と戦った外来人。

そして今回の宴会の企画者」

！まさかこの青年が性無零だったとは。

「能力は要するに自分にしか聞かない精神的限定汎用型精神的自身発動系（人の心も覗ける）ES名は
ブレインインフォメーション”

（能力は）” 脳の情報を引き出す程度の能力”」

「あんたが性無零。まさか、目の前に、居たなんて」

俺は驚きの声を上げる。

「ほら、フランドールも自己紹介をする」

性無零がフランに挨拶するように言う。

「フランドール・スカーレットです。」

お兄ちゃん性無零とと旅をしています。

よろしくね、湖南おにいちゃん」

風雷郷開こつちとは大違いだ。

「ああ、よろしく」

少し引いた声で返事をする。

「おまたせしました」

とここで鰻重が到着する。

「女将さん、熱燗一つ」

性無零が注文する。

「ミスチーで良いですよ。」

少々お待ちください」

と言い、また奥に取りに行く。

「しかし、零さんの能力は本当に強力ですね」↑自分のこと棚上げ

俺はそうお世辞を言う。

「強力なのは認めますよ。ただ、それだけに弱点も多い」

そう性さんは答える。

「あと、申し訳ないですが自己紹介する前から全部知っていました。

名前や種族、能力も」

「なるほど、思ったことを何でもできるなら僕の情報も盗み放題ってことですか」

「悪く言うなら」↑素直に認める

しかし俺は、

「良いんですよ。どっちにしろ自己紹介すればお互い分かるんですから」
すかさずフォローする。

「それもそうですね」

そう性さんが答える。

「熱爛お待ち」

とここで熱爛が到着する。

「ありがとうございます
と受け取る。」

第9400C話 「ブレインインフオメーション part
4」

「楽しかったよ、(普通の人間で優樹以外では)僕を半人半妖だと知って話してくれたのは零さんが初めてだ」

俺はそう答える。

「ふ、種族の違いなんて問題じゃないさ。

話をして楽しいと思えば、一緒にいれば良い。

幻想郷はそういう所じゃないかな」

零さんがそういう。

「そうだな(うれしい、まさか初対面の人でもこんな言葉を聴けるとは)」

俺はそう答える。

「さ、次の店へ行こう。

ミスチー、お勘定」

俺も払おうとしたが、零さんがまとめて払ってしまった。

今度お返しでもしなければ。

「またおこしてくださいね」

ミスチーが見送ってくれている。

ミスチーの店を出て、話をしながら歩いていると異彩を放つ店を見つけたので寄ってみる事になった。

「何だかずいぶんと珍しい店があると思ったらあなた達だったのね」

幽香が店の前に入るって、営業妨害じゃないのかな？

「何の用ですか」四季のフラワーマスター『風見幽花』さん

紫色の帽子を被った女性（？）が接待（？）をしている。

てか誰？

「文花姉ちゃん！お客様になんて態度ですか!？」

葉が文花？紫色の帽子を被っている女性を叱る。

すると、その女性が反論する。

「葉、こいつがお客さんと言える様な態度を取っていないわよ」

確かに幽香が店の前に入ると迷惑だな。

「その態度は相変わらずね。」

「花江さん、こんな面倒な妖怪を引き取っていたらいてごめんなさいね」
幽香が謝って居る（のか？）。

「いえ、文花さんも葉ちゃんもお花が大好きですし、とつても楽しいですよ」
花江さんが答える。

「そう言ってもらえるとありがたいわ」

「やあ、幽香！」

「久しぶりだな幽香」

誰？

知らないキャラがどんどんで来るんだけど。

「はあ、久しぶり、魁魔。会いたくなかったわ」
会いたくなかったのかよ。

「その減らず口は相変わらずだな」

幽香に尽かさず突っ込む。

「文花達に紹介しとくわ。」

「こいつ、魁魔。」

悪霊で魔法使い。

現在、行方不明の人物」

って説明雑。

「行方不明ってわけじゃないわよ。

自分勝手にやってるだけ」

って突っ込まないんだ。

「魁魔さんですかよろしくお願ひします」

「虹霓文花よ。よろしく」

「草薙花江です。

よろしくお願ひします。

ところで、お客さんが来られているので前を空けてもらえませんか？」

幽香と魁魔が道をあげて俺達が前にでる。

「ああ、譲っていただいてごめんなさい」

「ここ花しか売ってないわよ。

他に行つたほうがいいんじゃない？」

幽香がそういう。

「ちよつと幽香！営業妨害しないでよ！」

文花が突っ込む。

「さ、車椅子のお兄さん。

何にします?」

「これと言った買う予定が無かったのですが、

・・・。胡蝶蘭って花は無いですよね」

「あのちよつと聞き間違えたみたいです。

もう一度、言ってくれませんか?」

「多分聞き間違いじゃないと思いますけど、

「胡蝶蘭」

って言いました」

「[[[?]]]」

「えっと、胡蝶蘭ってあくまで冬の花よ」

「知ってます、咲いていなこてもいいのであればください」

ざわざわざわ

「ざわっ」

「ざわって言うなよ」

「今年の冬、咲かせる予定の胡蝶蘭ならありますが・・・」

花江さんが答える。

「じゃあそれで良いです。」

ください」

零さんが買う。

「し・・・しばらくお待ち下さい」

そう言つて花江さんが中に入る。

「ああ、無茶苦茶なお願い。」

すっかり育てて、咲かせてあげてね」

幽香が忠告？する。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「まさか、育てる気が無いのに買う気？」

「……………」

「何か言いなさい（バキバキ）」

殺気を経てる幽香。

「まあ、そう殺気を立てずに。

待っててください」

「ちゃんと答えてください。

他の花達も怒ってますよ（プンスカプンスカ）」

「じゃあ、結論から言う育てる気はありますよ。

とにかく待っててください」

「本当にちゃんと育ててくれるんですね!？」

「ええ」

ちょうど花江さんが戻ってくる。

「お待たせいたしました」

「ありがとうございます（購入）」

さてと……………」

……………。「なんで私だけなんですか？」

「……。「お前の花を咲かせてあげるけど良いか？」

「……。「別にかまいませんけど？」

「ありがとう……。」

そして、一気にまぶしくなる。

「そんな、バカなことが……。」

「なんで花が咲くの!？」

「フラン、あげる。」

俺からのプレゼント」

「わーい、お兄ちゃんありがとう」

（「ワイイワタシダケサキニサクコトガデキテル！コトシノイチバンノリハワタシダツ
！。」）

信じられん。零さん一何でも《……》ありなんかよ。

「あんた一体何m「やっと見つけたわ!」
セリフを被せるな!

って、

「なんだなんだ」

なんだあの人数は!?

「ようやく見つけたわよ零!

よくも (ry)

「まず、みんなの居る理由を過程から調べるから5秒まで」

しかい

「そんなのかんけないw」

「5秒待てとிட்டただろ!」

すごい殺気!

こつちまで反論出来なくなるまで!

「ふーん。

そういうことね」

殺気が止んだ。

「さあ、やっと文句言うわよ、さつきh (ry」

「霊夢ちよつと待つて」

幽香が止に掛かる。

「あんたまさか、今噂になっている性無零か」

魁魔が攻めに入る。

「そうだが」

「なるほど、能力持ちの外来人。」

「しかもその能力が反則だったからこそ花を咲かせられたわけね」

幽香が推理に入る。

「そうですよ。」

「てか、能力を使わないと無理でしょ」

残念、俺も能力の長拡大解釈で出来るけど。

「霊夢、積もる話もあるだろうから寺子屋に戻ろう」

「私達も行きましょう。」

「一体、どこまですごい人物か見ておくわ」

「葉つちゃん、文花さん、お店は私だけで十分だから行ってらっしゃい」

そう、花江さんが言う。

「良いんですか？」

葉が聞き返す。

「ええ、行つてらっしゃい」

花江さんが送り出す。

その後、話をしながら寺子屋に戻ることにした。

しかし、この時はあのような事になるとは誰も思っていなかった。

第9500C話「ブレイインフォメーションpart 5」

「無事八目鰻が完売しました。

食べてくださったみなさんの為にこの曲を提供します」

く東方花映塚「もう歌しか聞こえない」 Flower Mix」再生推奨く

わいわいがやがや

つてそれですむわけが無いでしょ。

「ここ空いておるかの？」

そういいながら、マミゾウさんが隣に来る。

「別に空いてますけど？」

そう言うのと隣に座ってくる。

「我は二ツ岩マミゾウと言ってな、現佐渡島佐渡国から来たからの、お主知っておるか？」

と、自己紹介と質問をぶつけてくるマミゾウさん。

「へえ、もちろん知ってますよ、佐渡島ですよね？」

僕は旧下総国から来た坂上湖南です。

旧国名は大体覚えてますよ」

もちろん答え&自己紹介する。

「そうか、お主今度の異変で協力してくれぬかの？

嫌な予感がするからの、大丈夫か？」

伝説の化け狸の感だろうか？

しかし、断る理由も無いので

「別にかまいませんけど、感ですか？」

「そうじゃなの」

そうして、マミゾウさんが他の所に行く。

「零、さつきはよくも私に面倒なことを押し付けてくれたわね」

霊夢さんが説教？を開始する。

「別に良いじゃねえか。

皆も笑ってんだし」

しかし

「良くないわよ。

大体が零の計画した段取り通りに進んでいたのにいきなり計画にない失踪。

あまつさえ私を指名してくるなんて普通なら夢想封印で会場丸ごと吹き飛ばしてるわよ」

ちよ、さりげなくひどい事言ってるし。

「そうだ、僕としても零さんの姿を見ようと思ったのに、霊夢さんが出てきてまさかと思ってしまった」

俺からも言わせてもらおう。

「見なさい、あなたの行動は他の皆にも迷惑をかけているのよ」

同情している訳ではないけど。

「まあ、そう怒るな。

計画上差しまわりの無い程度にやってるさ」

反論になってないけどいいのか？

「あんたねえ。

私達に散々、あーだこーだ言っておいてあんた自身がちゃんと出来てないと説得力無いでしょうが！」

ごもつとも。

「俺自身、ちゃんとできるわけじゃない。

他人迷惑かけるなって事を魔理沙に言ったが、それは俺が出来てないから言うんだ」
「な、なんのことだぜ!？」

って話して無いのかよ。

「……、少し、重い話をしようか

俺はつい数年前まで他人と話したことがほとんど無かった。

大学入学を木に少しづつ話し始めた。

そして、この幻想郷に来て、初めて気づかされた。

自分がどれだけ周りに傷つけていたか、迷惑をかけていたかを。

紅魔館の皆、チルノや大妖精ちゃん達、慧音さんや妹紅さん、

何よりフランと出会い、己を見返すことで、

俺は自分がどんな人物が分かって、

その度に俺は過去の行いを後悔してきたんだ。

この宴会の一番の目的は皆さんと接することで、

自分自身が自分の力によって生まれ変わるかを見たかったんだ」

そういう風に零さんが言う。

「初めて心の底からの本音を語りましたね。

今まで、思ったことそのまま言っても、

あなた自身が「そんなことを言う資格はないのに」と思っていた。

幻想郷の皆を知ることでも生まれ変われそうかを目的に、

幻想郷を旅してきた、だけど、もう時間がないことを感じ始めた。

だからこそ、幻想郷の人々と出会うために宴会を企画した」

「さどりの言うとおりだ、紫が俺を連れてきたのは中が起こるから、

そして、その時がきつともうすぐに迫っている。

このままでは幻想郷の全部を知るまで帰ることになる。

あせった俺は皆が集まるきつかけがないか考案した。

そして、宴会で皆を集めることにしたんだ」

「お兄ちゃん、全部終わったら帰っちゃうの？」

フランが悲しそうに聞く。

「正直、悩んでいる。

幻想郷の皆は大切だけど、外の世界の家族や友人、親戚も俺にとって大切な存在だ。

俺の悩みはこれなんだ。

フランの気持ちは分かっているよ。

それを踏みにじってまで外の世界に返るか。

それとも外の世界のないもかもを捨てて幻想郷に残るか。

どちらか決めなければならぬし、どちらか捨てなければならぬし、
もし、帰ることになっても良いように大きな思い出を

フランと一緒に作りたかったんだ」

!?

「いやだ!!!私!お兄ちゃんと別れたくない!!!」

そして、フランが零にしがみ付く。

「フラン、離れなさい。」

零さんが誰よりも辛いはずなのよ。

これはフランが大切だからこそ言うわ。

零さんが帰ることになったらあなたは分かれなければならないのよ」

.....

「うわーーーーー.....ん（大泣）」

.....

零、フランを泣かせたあなたを許さないわ」

「許しを貰うつもりなんてないさ

ちよつと風に当たってくる。

さすがに疲れた」

そういつて零さんは外にでる。

「まさか、人の身の上話で泣かされるとは思いませんでした」

聖が涙目に語る。

「聖さん、それは仕方ないことなんです。

生き物というものは心の底から本心というのは言おうとして言える物ではないので
す。

だからこそ、それを聞いた時、涙を流してしまうのです。

老若男女、種族、どれもとっても例外なく溢れてしまうのです」

「あれが本心ね、正直、馬鹿馬鹿しくて笑いたくなるけど、零らしいと言ったららしいか
な」

「まるで子供だ、自分の力で何も出来ず、それでいても甘い。

だけど、最後の瞳の光り方、零はこれからが凄くなる。

能力を得て、本心を話せる仲間が出てきた、遂に歩み始めた」

慧音さん、多分違うじゃないのかな？

俺には、希望の光に見えたけど？

「よく分かるな」

妹紅さんは鈍感なだけだけ。

「伊達に教師やつてる訳じゃないからな。」

零はもう青年だから、何も言わずに見守ってきたが、

私が期待していた通りに鳴ってくれたな」

「魔理沙、いつまで泣いてるのよ？」

よく見ると何故か魔理沙がすっごく泣いていた。

「ああ、すまねえぜ、でもな、我慢しようとしてもあふれてしまんだぜ」

第9600C話「ブレイインフォメーションpart

6」

魔理沙「処で、零はどうするだろうな？帰るのか？」

レミリア「少なくとも能力を使つてなかつた。

今の状況では彼のこの先の運命がある程度見えたわ。

ただ、肝心のすべての終わる直前、異変が最高潮を迎える頃ね。

そこから運命にノイズ懸かっているみたいに見えなくなっているわ。

何かとんでもない運命が待ち受けているみたいね」

魔理沙「結局どうするのかわからねえつてと事か。

それにしても、家族を無くす悲しさが分らなねえな。

私は勘当された身だし」

桜「家族を亡くすのは本当に悲しいです。

私、八歳の時に母親を無くしました」

ルーミア「私も魔理沙ぐらいの時に母を殺されたのだ・・・」

魔理沙「そうだったのか・・・。桜の母親も殺されたとか？」

桜「はい、実は……」

さとり「桜、この先は私が話すわ。あの時のけりをつけるのにはちょうどいいけど、霊夢達がいるからあなたが話すのは良くないわ。」

お空、お燐、秋さん、万階位置の場合の時は……」

(「ここから先は本当に注意してください！気分を悪くしたらすぐに閉じてください！)

お燐「わかってます。空、あくまでも受け身よ」

さとり「この子の母親は妖怪に殺されたのよ。」

ちようど190年前の2月19日にね」

妖^{打てません}祓「おお、あの日か。忘れたくても忘れられんぞ。」

殺した妖怪は幻想郷を滅ぼしけた妖怪じやな。

その娘も可哀想にのう」

さとり「殺したのは只の妖怪よ。桜を食べようとして母が叱った。」

その一撃で亡くなった桜の母は妖怪に食べられたわ。」

桜はその恐怖で動けなかった。その状況をずっと見ていた」

魔理沙「——、想像しただけで気持ち悪くなりそうだ。」

桜、そんな事があってよく平気でいられたよな」

さとり「この子が地霊殿に来たときもう一つの能力を習得させたは。」

”記録を操る程度の能力”をね。そして、地霊殿に来る前の
映像記憶”体験した光景”を封印してたは”

霊夢「つまり、桜の記録の中には”母は妖怪に食われ、地底に来た”

という事実がだけが残っているという事ね。

何のためにそんなことをしたの？逆に辛いわよ、それ”

さとり「桜にとつて一番辛いのは、自分の手で、

家族や友達を殺してしまった事なのよ”

紫「そんな妖怪が家族をk”

霊夢「ようやく分ったわ。じゃあ、あなたの言う通り零のを連れて来るは”スタスタ

スタ

魔理沙「あ、え、れ・・・霊夢？」

紫「さとり、あなた霊夢に何したの？」

さとり「何もしてないわよ。霊夢が私が言おうとしたことに気付いただけ。

それで、話の続きだけど、桜は血を見ると発狂するのよ。

当然、母が殺された時も発狂し、食べた妖怪を殺したわ。

その妖怪の死因は”落雷による感電死”

体は炭だけになったそうよ。正直、本当の死因なんて、

大妖精「え、藍さーん!!!」

ルナサ「あの冷静な八雲さんが！」

神綺「ちっ、面倒な」

秋「まずい、空間圧縮も間に合わない！」

輝夜「な、永琳!!!」

天魔「あやつ、冷静さを無くしておる！」

アカツキ「速い、間に合わない！」

紫「藍！止まりなさい！」

慧音「妹紅、止めるぞ！」

(湖南「スペルカード（ry）」)

「桜逃げて！」

キラリーン

部屋が一瞬白くなる。

魔理沙「何だぜ、今のまぶしい光は」

神綺「藍の奴はどこに行った。」

それに私たちの攻撃が全部消えてるし」

??? 「おにーちゃん！」

部屋に誰かの声が響き渡る。

カリスマ（笑）「フランの声だわ（作者は後で外に出る）」

その時、部屋につながる扉が開く。

霊夢「永琳、今すぐに来て。」

それと、今攻撃しようとした奴覚悟しなさい。

私もフランも切れる寸前だからね。

後、さとりは桜と一緒に来て頂戴」

（しかし、あれ程騒がしいとなると何かあったのか？）

さとり「桜、行くわよ。」

霊夢をあれ以上怒らせると怖いから」

— 2 —

しかしまあ、宴会は騒がしいからいやなんだよね。

一応、酒を無理やり飲ませられても、電気で分解させてるから良いけど。

「ちよつと、いつてくるのだ」

うん？

ルーミアどうしたんだろう？

まあ、良いか。

行けない行けない、股尾に成ってしまう。

「うん?どうしたんだ?」

俺の顔を覗き込んでくる女性。

「いえ、なんでもないです」

いや、正直言つて眠たい。

「そうか、無理すんなよ」

いえ、ちよつと、横に成りますね。

「使用カードは三枚、被弾回数は、2回で良いな?」

「ああ」

「勝負!」

はあ、弾幕ごっこかよ。

とりあえず寝よ。

——3——

「おい、起きろ」

うん?

何ですか、今眠いんですけど。

「写真撮るってよ」

「はいはい」

「この写真は皆にとつての宝物。」

もう二度とこの笑顔を見ることは知れない。

能力がある、経験がある。

それだけでは解決できない。

これは、幻想郷、いや文明世界の――

——戦争であるんだから」

「さてと、これでお開きにしますか。

これ以降、二次回等は、自由にやるように」

その、一言で宴会は終わった。

さてと、のんきにもと居た場所に戻りましょうかね。

人里をでた俺は能力で明かりを灯しながら、のんきに暗い夜道を歩くのであった。しかし、そんな単純に物事は進まなかった。

「おい、待っているだけのお金、全部ここに置いて行け」
はあ、山賊かよ。

周りで見えるだけでもその人数は4人か。

まあ、相手しましょうかね。

「お前ら、馬鹿か」

次の瞬間、明かりを消して六角石風流剣を握る。

「はいよ、ひとりあがり」

その言葉と一緒に一人目が落ちる。

「そこまでだ、能力者みたいでけど、俺に勝てると思うなよ！」

そう行つて、右手に火をともして殴りにくる。

「お前、俺に勝てるつもりで思ってるのか？」

俺は、右手に炎を宿しながら、相手を殴る。

そのまま、その炎を、残党にも浴びせる。

「こいつらは、妖怪にでも食べられるか」

そう言つて俺は、その場を後にした。

第9002C話「交わりし世界——The beginning of the story——」

幻想郷・紅魔館

「優《まさる》ちよつと来てくれるかしら？」

図書館に広がるレミリアお嬢様の声。

紅魔館に勤める身として、お嬢様の指示に従う。

優は、レミリアの声の聞こえたほうに向かう。

そこには、

幻想郷の賢者——八雲紫

下総の次期神主候補——坂上湖南

楽園の素敵な巫女——博麗霊夢

超妖怪弾丸——河城にとり

守矢の巫女——東風谷早苗

完全で瀟洒な術者——十六夜咲夜

永遠に幼き紅き月——レミリア・スカーレット

の姿があつた。

「えーと、一部見ない顔も入るんですが、レミリアさん、一体どうゆうご用件で？」
優は、呼び出したレミリアに質問をする。

「そうね、私から説明させていただくわ、今朝、外の世界の空間が歪んだのよね。
それで、私たちが考えた結果ね、にとりと早苗を除いてメンバーを組んだのよ。
だけど、その二人がどうしても行きたいって言うから、連れて行くの。」

ちなみに、優、貴方もよ。

ただし、拒否権なし」

そんなー、とがっかりしている、優を無視して、紫はスキマを開く。

「そんじゃ、行ってらっしゃい♪」

場所は、いつもの場所ね」

そして、レミリアを除き部屋から全員消える。

外の世界・千葉県清龍神社

スキマから出ると、いつもの場所に出る。

毎日をごっこしている湖南や、一回来た事がある早苗やにとりにとってはなじみの有る場所かもしれない。

しかし、初めて来る、霊夢や咲夜、優にとっては初めて見る場所であった。

「そんじゃ、事情説明と行きたいけど、これは優樹の方が得意だから優樹にお願いするか」

そんな風に湖南は、紙に埋まっていた少年を指差す。

「お前の方が得意だろ。」

ま、いいや。

そんじゃ今回だけど、重力波が乱れたんだ。

観測地点は山岡にあるじいちゃんの実験室。

今朝、研究室にある機械が異常な数値をだした。

その後の調査で、異常箇所は千葉県安房小湊から南に10kmの所。

とりあえず、そこに調査に向かうためにいろいろ集めてもらってから行こうと思ったんだが、お前本当に幻想郷に関りあるんだな。

俺なんて幻想入りしてから能力が使いやすくなつたくらいかな？

そんじゃ、さつさと行きますか」

そういつて、優樹はさつさと出発し始めた。

そのまま電車を西船橋・船橋・千葉・上総一ノ宮と乗り継ぎ目的地についたのは4時間後だった。

そのまま、Suicaをタッチし改札を出る。

千葉県鴨川市内浦・安房小湊駅前広場

「そんじゃ、着いたわけだけど明らかに不自然だね」

そう言う風に湖南は呟いた。

「確かに空が割れてるわね」

そう言つて咲夜は空を指差す。
其処には、

第9102C話 「紅魔の空間分裂——Space
 erations divisions and fus
 ion——」

空間が割れているところに行くために空を飛び、現場に向かっている最中のことだつた。

優がこんな事を言っていた。

——そう言えば俺が知っている世界ではオカルトとかが否定されていたはず——
 この発言から考えられるのは二つ——

——1、諏訪学術研究都市出身

——2、そもそも能力などが存在しなかった所——^平パラレル^行ワールド^世の住人か。
 前者の場合、科学的に証明できないので否定される。

早苗たちが来たのもそのためである。

問題が二つ目だ。

もしそうであれば、アザトース様に詳しい管理状況を聞かないといけなくなる。

できる限り前者であつてほしいが、そうなった場合、失踪人扱いになつていて色々めんど事になるが。

後者のほうがめんど臭い事になるか。

そんなことを考えている間に現場について、早速調査することになった。

優が亀裂に触ろうとしていたのであわててやめさせる。

「触るな！」

しかし、時が既に遅くすでに触つてしまつていた。

「え？」

もちろん、何も起きない訳でもなく。

パリン

何かが割れる音がする。

「嫌な予感がする」

パリンパリンパリン

どんどん割れていく音がし、空間が割れて行く……。

「あつ」

パリン

「ガオオオオオオオオオオオオオオ！」

中から何かの叫び声がする。

次の瞬間、中から化け物が出てくる。

「にとりと早苗は住人の避難を、咲夜と霊夢と俺と優でコイツの足止めをするぞ」

俺はすぐさまに指示を出す。

「咲夜！」

霊夢が叫ぶ。

「分かってるわよ『幻想 少なき時の欠片』」

俺の能力に関わらないスペルか。

周りの空間が灰色になっていっている中咲夜はせっせとナイフを設置していく。

(時止めの中で動けるとなると面倒ね・・・)

「それじゃスペルカードでも発動しますか『天符 三番瀬の満潮』」

時間が静止している中で弾幕を配置につける。

「解除」

咲夜がそう、宣言した瞬間周りの色が戻る。

「！」

一気に弾幕による痛覚を味わった化け物は怯んでいる間に次々と攻撃を展開する。

『霊符 夢想封印 散』『水符 銚子の潮混ざり』

高密度弾幕……、攻撃を消すためか。

「ガオオオオオオオ！」

しかし、化け物は弾幕を食らったままジワジワと攻撃を消し始めた。

……？

まさか、耐性を持ったか？

そんなことを考えていた矢先だった、化け物が一気に弾幕を展開し始めた。

！

まずい！

「つち、面倒な【ここから半径1kmは俺の空間だ】」

初めて見る優の能力使用シーン。

空間が一気に赤色に染まる。

「ガオオオオオオオ！」

化け物が押してくる中、空間の亀裂がどんどん消えて入っていく。

しかし、同時に優の霊圧が消えていく。

「おい！まずいな、”偽造収納符・六角石風流剣” 『雷剣 雷流放刀』

風流剣に雷撃をまとわせて一気に化け物を切断していく。
間に合え！

俺はその一心で化け物を切っていた。

「ちよ、優！」

咲夜があわてて優を支える。

「間に合わなかったか、とりあえず休ませようか」

俺は咲夜を誘導しながら一気に陸に戻る。

第9202C話「安房の小さき旅館——Story

end?——」

「良かったらうちで休んでください」

そういう風に声を掛けられたので、着いて行くとそこは一つの民宿だった。

空いている部屋の一室を借りて、その中で優を寝かせることにした。

優が寝ている横で俺は、とある術式の準備をしていた。

「それじゃ、少し痛いと思うけど」開放符」

俺は霊力回復の上限を開放して、一気に回復させる。

やりすぎると暴走する恐れがあるけど、そこまでの霊力はこめていないから大丈夫なはず。

「う．．．ん？」

「あ、気づいたか」

俺はお札を剥す。

「おい、優が気が付いたぞ」

俺はみんなを呼ぶ。

「良かった、二度とあんな無理をしなくて頂戴」

咲夜は涙目で優の顔を見る。

「すみません、咲夜さん……」

優は咲夜を慰める。

「ほつと置いて置こう」

俺はそう眩き、部屋を後にする。

「はい、そんじゃみんな幻想郷に戻るはよ」

そう言つて皆をスキマの中に戻す。

「そんね、今回は平行世界の住民を仲間する為に色々したけれども、この事については他の所に記録するのは無しにしておいてね。

それじゃ、寝ると忘れるようにしておいたし、記録も消えるようにしておいたから」

そう言つてスキマの中に消えてしまった。

寝ると忘れるつて言うことは、また境界を弄られたのか。

別に覚えてとくもないしな。

「失礼します。」

お連れの方は？」

中に入ってきた民宿の人が聞いてくる。

「ああ、ついさつき帰って行ったよ」

俺は、そう答える。

「そうですか（これは来た来た来た来た——!）」

「どうしたんですか？」

俺は表情が可笑しくなった民宿の人に聞く。

「いえいえ、何もないです」

って言いながら部屋を出ていった。

そう言えば、優とか言う人、前にも会ったような気がするんだけどもな？

気のせいならば良いのだけれども。

「あれ？」

さっきまで霊夢達がいた部屋に何か落ちてるのが目に入った。

「これって優のやつじゃん!」

俺は部屋に落ちていた鍵を拾う。

「どうしようか、幻想郷に行く……」。

あ、平行世界の住人だから無理か」

紅魔館

「あつ、咲夜さん、スペアキーつて在ります？」

優が、ポケットに手を入れたまま咲夜に聞く。

「一応聞くけど、何故かしら？」

咲夜が鍵棚を見ながら聞く。

「すみません、鍵無くしました」

優は涙目で言う。

「はあ、全く。」

「これで予備が無いから、今度からは気付けてよ」

そう言いながら鍵を渡す咲夜。

しかし、その鍵束の中にナイフが混ざっていたので、鍵を受け取った時に手を切ってしまったが、それ以上言うと恐ろしいことに成りそうなので諦めた優だった。

一方湖南は・・・

「これ、どうしようか」

鍵束を見ながら考えていると突然、床が消えた。

「ちよ『雷符 雷流放電』」

しかし、既に落ち始めていた。

設定資料（主人公核のみ）

名前：坂上湖南^{サカガミコナン}

身長172cm（高い方）体重64kg座高81cm

能力『風雷雨雪を操る程度の能力』

天候操作全般系が可能。

また、天気と密接な関係にある、水・火・土・緑の五大属性が操作可能。

『あらゆる理論結界を操る程度の能力』

その事象の理論を知って入れれば再現する事が可能。

また、能力を再現、使用することが可能。

湖南の術式はこの能力を使用している。

種族：半人半妖（どちらかと言うと人間より）

容姿

黒髪の黒目（能力暴走時には黄色になる）また中肉

いかにも日本人ですという容姿である。

また、御守りとして勾玉を身に付けているが、余剰霊力の処理目的で常時結界を発動

させるためである。

（1話で被弾扱いしなかったのは結界のせい）

解説

風土物語に描かれている10人の神使の一人であり。

人間関係の人物では、最強の能力者であるが、段階的に能力のリミッターが解除されるために、誰も能力の限界値を知らない。

出世に関しても謎が多く、戸籍上では養子であり、また他者の発言により湖南は、生まれ変わりの存在である事が判明している。

種族や性質の関係で人間関係がだめであるが、理解しようとすれば逆に仲良く慣れるという謎の性質を持っている。

また、仲が良いように見えるが実際にはつめていたで接してたりするので、何を考えているのか分らない。

対人恐怖症であり、全てのことに関して無関心で生きている。

但し、鉄道と東方に関してはそれなりの愛着が有る模様。

それでも、東方キャラに対する態度はあまり変わらない模様。

一人称 俺

風雷系統

『劍符 風切残刀《かざきりざんとう》』

・ 神術装備ではボム代用。

・ 見えない弾幕であるが、被弾回数としてはカウントされず、霧や弾幕を切ることに使用される。

『風雷 雷玉』

・ 通常弾代用であり、普通に珠が撃てる様になった今では使用しない。

『雷劍 風切残刀 雷』

・ 風流劍に雷撃が纏つてい、基本的には物理攻撃に使用する。

・ 弾幕ごっこでは空気が静電気を纏っている。

『雷符 雷流放電』

・ 基本的には加速系に使うスペルだが、一時的にリミッターを解除する。

『風符 風中同化』

・ あたり判定を一時的に無効化し同時に姿を隠す。

『風流劍 瞳風雷』

・ 雷を纏った弾幕であるが、同時に5発しか撃てないという制限があつたが現在では無効化されている。

『風流劍 瞳風神雷』

・雷を纏った弾幕があるが、弾幕同士でアーク放電をしあっている。

『風流剣 風切残刀 瞳風雷』

・シヨット・ボム禁止の状態で”風流剣 瞳風雷”を展開する。

・さすがに理不尽すぎるので使用を自粛している。

『土流放電』

・地面を導線として相手に攻撃を行う技。

・近くにアークがないと仕様不可。

『風符 我心は風と共にあり』

・弾幕捜査系であり、すべての弾幕を流れ弾に変更する。

『風符 狭きビル合間縫いし隙間風』

・空間操作、強制的に湖南側を主導権側とする。

『最後 風士族としての最後』

・ラストスペルであり、境界で囲まれた後に弾幕と雷撃が流れる。

理論系統

『理論 弾幕が消える日』

・科学装備ではボム代用。

- ・自分の弾幕すら消してしまうのであまり使わない。

『結符 理論結界』

- ・結界内では一時的に外の世界と同じ状況になる。
- ・よって、魔術系の能力は無効化される。

『理論 空間屈折』

空間上の絶対座標を屈折させることにより1m事に1mmズレという精度で移動することが可能。

但し、絶対座標を頭に入れていないと移動不可。

地形由来

『三番瀬の満潮』

- ・本来のボムであるがあまり使わない。

『風符 下総海岸の海風』

- ・ランダムに吹く風を操り弾幕を拡散させる。

『天符 三番瀬の干潮』

- ・浅い弾幕であるが、ボムでも消すことができない。
- ・主に屋内で使用する。
- ・またボムとしても使用する。

『天符 北陸の大雪』

- ・ 上の方から細かい白色の弾幕が落ちてくる。
- ・ 主に屋外で使用する。

『天符 関東の空っ風』

- ・ 弾幕ではないが、被弾を起こすことができる。

鉄道関係

『鉄符 混雑激しき5号線』

- ・ スカイブルーの弾幕は混雑率198%の電車の中にある”乗客: z i p”の様にどんどん増えていく。

『鉄符 ダイヤ乱れし13号線』

- ・ 茶色の弾幕は、一定の法則を持っていたが突然乱れて襲ってくる。

『鉄符 戦前からの狭き3号線』

- ・ 黄色の弾幕が狭い逃げ道を作って迫る。

『鉄符 戦後の規格外4号線』

- ・ 赤色の弾幕が大回り弾幕を打ってくる。

『鉄符 小さきカーブ2号線』

・ねずみ色のレーザーが細かいカーブを描きながら移動する。

『鉄符 11号線勝負』

・弾幕を風流剣が纏う。

『鉄符 大島テクニック』

ニコ動で調べていただくとわかるのですが、



の様な感じで大玉が、小弾をばら撒きながら点対称に動く。

『鉄符 大阪テクニック』

上記のとは逆に線対称に移動するもの。

『鉄符 品川テクニック』

一直線上に大玉が移動するもの。

但し2つのみである。

『競争 横須賀京浜のガチバトル—easy—』

・電車でDネタ。

・基本的にはレーザーとスカ色・赤色の弾幕が展開される・

『競争 東海道横須賀京浜のがちバトル―normal―』

・新たに湘南色が追加される。

『競争 東海道横須賀緩行京浜のがちバトル―hard―』

・新たに水色の弾幕とレーザーが追加される。

『応急 逝つとけダイヤ―Lunatic―』

・もはや意味がわからず四色の弾幕とレーザーが無駄に展開される。

『曲線 直流電磁曲線誘導砲《カントスパーク》』

・サンダースパークを無理やり曲げたものであり、弾幕を交わすように展開される。

『活線 列車で行く日本一周の旅』

・紫のスペル、『廃線 ぶらり廃駅下車』の反対スペルであり、こちらは明るい感じである。

・出てくる車両は基本的に国府津車両センター所属のE231―1000が出てくる。
（しらんであれば地元の車両に置き換えて）

その他

『雷砲 直流電磁誘導砲《サンダースパーク》』

- ・ マスターズパークのパークリ技であるが、基本的に誘導弾幕である。
- ・ 展開すると自分の周りにアーク放電が発生する。

・ 妖力固定使用。

『雷砲 ダブルサンダースパーク』

- ・ サンダースパークを2本出す代わりに無防衛になる。

『成長 一つの種は大樹に成り』

- ・ 弾幕を2倍ずつに増やすことだでき最大数は128倍。

『終結 終焉結界』

- ・ 絶対防衛結界であり、その防御力は核爆弾でも輝一つ入らない。

- ・ 同時に1つしか展開できないが、解除するまで永遠に残る。

- ・ 目は術式を展開したものである（通常時はスキルカード）

『古力 長生き者の古知恵』

- ・ 限界突破のスペルカードであり、使用すると狂気が暴走する。

『印符 清龍下総古文封印 《せいりゅうしもうきこぶんふういん》』

- ・ 湖南が所持するスペルでは最長の物。

- ・ 清龍神社における妖怪退治に使用されていた。

追跡倍増符

・湖南のシヨットとして使用しているものであり、一枚のお札から334枚の弾幕を生成する（何でや！）

名前：秋山翔アキヤマシヨウAkiyama Syo

種族：人間（邪気眼使い）

解説：

どこにも居る普通の高校生であるが、実際には6人の妹を持つリア獣である。

部活は、地域伝承研究部。

性格は、厨二病以外はいたって普通。

スペルカード：所持無し

設定資料（本作オリジナルその1）

名前 タカハシ 高橋 ユウキ 優樹 Takahashi Yuki

種族 人間

職業 学生・風使い（風士族）

一人称 俺

二人称 優樹・ゆうくん

能力 『風の力を借りる能力』

『相手の能力を、コピーする程度の能力』

『時を越える程度の能力』

年齢 14歳

居住地 浦安銀座商店街

スキルカード計16枚

『風流剣 瞳風緑』

1分間に5発しか打てない。

『氷色の風』

あいてを凍らせる。

『赤色の風』

あいてを燃やす。

『緑色の風』

治療スキル。

『青色の風』

水に沈める。

『黄色の風』

雷で攻撃する。

（ただし、湖南の能力をコピーしないと無理）。

『オレンジ色の風』

ネタが思い浮かばない。

だれか、提供してください。

『紫色の風』

すごいかまいたちで切り裂く。

『白の風』

詳細不明。

(ここ)まで、行っていないかった)

『治療 自然の力』

回復スぺカ。

『劍符 風切残刀』

風流劍をものすごい速さで降り、衝撃波で、攻撃。

『風流劍 風切残刀 瞳風緑』

詳細不明。

『風流劍 風切瞳風緑』

詳細不明。

『風流劍 風切瞳風緑 深緑』

詳細不明。

『深緑結界』

結界スぺル。

中に竜が、いる。

『最後 風土族としての最後』

詳細不明。

参考

- ・下に風を吹かせることで、空を飛ぶ。
- ・チエンジウオツチャーを使用し、タイムスリップができる。
- ・風流剣・勾玉は緑色。
- ・小さいころは山岡に居た。
- ・JR長崎本線に高橋駅あり。

名前 岩瀬 イワセ 魔帆 マホ I w a s e m a h o .

種族 人間

一人称 私

二人称 岩瀬（湖南のみ） 魔帆

能力 『魔法を扱う能力』

年齢 13歳

居住地 浦安商店街

職業 学生 魔法使い

スキルカード計16枚

『火球 マーズフレア』

火の玉。

『回復 セラピ』

傷直し。

『回復 セラピデポイズ』

毒消し。

『回復 リクエス』

蘇生魔法。

『土符 サンドーラ』

砂嵐。

『毒符 フリズン』

毒の弾幕。

『温水 ニル』

下から、熱湯がわいて、煮る。

『火球 シャニオン』

マーズフレアの強化版。

『禁符 デス』

即死魔法。

『恋符 マスタースパーク』

魔理沙のと威力は同じ。

『土符 サンドリンク』

土で、囲み、潰す。

『金符 スターリレクシヨン』

隕石みたいなものを、落とす。

『月符 ムーンライト』

多目的魔法。

『風魔法 リーフストーム』

ポ○モンのやつと、同じ。

『結界 流水結界』

流水で囲む。

『スターレーザー』

星の形のレーザー

参考

- ・ 優樹とは従妹であり魔浦の方が年上。
- ・ 家はケーキ屋。
- ・ 基本的に、すべての魔法が使える万能型魔法使い。

・水戸線に岩瀬駅あり。

名前 空見^{ソラミレイ} 零 Sonami Rai.

種族 人間

性別 男性

年齢 21歳

一人称 俺

二人称 空見

職業 鹿島神宮の神主

能力 『靈力をあらゆる力に変える能力』

『星を見ただけで知りたいことが分かる程度の能力』

スキルカード計3枚

『サンダーバツレット』

お得意のスキルカード。

ナイフかと思ったら御札が飛んできます。

『合成符 マスターサンダースパーク』

あまり得意ではなく、靈力を大量に消費するためにあまり使わないらしい。

また、即効で作ったから威力が・・・。

解説

湖南の親戚。

（であるらしいがお互いに詳細は求めない。と言うか身元不明なのになぜ親戚と分ると
いう突っ込みはなし）

鹿島神宮であり宮司はお父さんである。

尚、未熟であり神卸しが使えないのである。

名前 鳥養^{トリカイスズ} 鈴 Torikai Suzu.

種族 人間

性別 女性

一人称 私

二人称 鈴

職業 飼育員（非常勤）

能力 『あらゆる声を聞く程度の能力』

スキルカード所持無し

参考 実家が獣医であり、その関係で小さいころから動物と触れ合っていた。

名前 現分^{ゲンワケ} 想衣^{ソウイ} Gnwake Soi.

種族 武人妖怪

年齢 さて何歳だろう？

一人称 わし

二人称 想衣

職業 封印される身

能力 『あらゆる物を操る能力』

スキルカード所持無し

参考

1963年の新旧異変後封印される。

時すら無視する事が出来たらしい。

現在、坂上湖南を利用して封印しているが、開放できる術者が居ないため分身で外に出ている。

能力についても、徐々に上限が回復していつている。

名前 坂川鈴稔 サカガワリンネン Skagami Konan.

種族 人間（性格には妖怪の血が混ざっている）

年齢 16歳

一人称 私

二人称 鈴稔

職業 民宿の若女将

能力 『風に意思を伝わせる程度の能力』

解説：風に意思を伝わせる事によって風を操ったりすることが可能。

参考

本編ではあつて無いが特別編ではあつている。

名前 生野 セイヤ 共祈 キヨウギ Sei ya Kyou gi.

種族 武人妖怪

年齢 精神年齢17歳

一人称 私

二人称 共祈

職業 巫女

能力 『主人と共に行動する程度の能力』

参考 湖南が作り上げた武人妖怪であり、戸籍上は難民扱い。

巫女と言う仕事であるが、法律上はただのボランティア。

メリクリ

「という訳で臨時枠で投稿です」

「乗っけからメタ発言辞めろや主人公」

「しよぼーん」

取り敢えず、仕切ら治すために一旦再起動させる。

「という訳でクリスマスだからって特別な話を上げると思った？」

「うん」

すっごい笑顔で答える主人公。

しかし、ネタが思い浮かばなかったからボツで。

「ま、この作品でクリスマスを迎えるのは最後だけれともな」

「おい、俺達はリストラか？」

六角石風流剣を向けてくるな怖いから。

「ハッキリ言っちゃえばこの作品も練習作だし、そこまで伸びることは期待してないから」

「は?」

「!?」

「ダニイ!?!」

「白山!?!」

「な!?!」

人数が多いような気がするんだけど、気にしないでおう。

「前から相談してただけだけど、カクヨムとなろうに上げられる完全一次創作品

”俺の高校生活はこんなもんじゃない!”の為の練習作だし、これもいい加減完結させないとな」

「えっと、今書いてるのは何期だ?」

?

「確か2期のつもりだけども?」

「それで、エンドはどうなる?」

それ聞いちゃう?」

「Bad End | 19 だけども?」

「…俺死ぬのか」

「死因聞く？」

「一応…」

「お気に入りが増えなかったから」

「おい」

「能力の使いすぎた後に銃撃」

「まじで？」

「日本語正しく使おうか。」

「マジは真面目から来たからな、本気・本当という意味で使うのは違う」

「…」

「…」

通勤快速 一池

袋

COM・RAPID For Ikebukuro

「おい」

「取り敢えず異世界じゃないけど生き返ってもらいます」

「俺にとつてはこの世界が異世界なんだけどもな。」

「次元とか、俺みたいなの4次元の住民には羨ましくよ…」

「三次元の間違えでは？」

「時間があるから4次元。」

誰かに演算されているっだったら三次元だけでもな」

「そーなのかー」

「シナ!？」

「…机の上にいる奴は何だ？」

「東長椎名。」

Small self-contained drive information gathering humanoid
小型 自立駆動情報収集ヒューマノイド

SSDIGH シツガハの実験モデル。

東長三姉妹の1人な。

次作ではこいつがキーパーソン。

ちなみに半存在状態にする事で管理人^{マスター}以外には見えない様にする事が出来る。

ついでに半重力浮遊とか架空技術のデパートだけでもな。

という訳で次のパートナーはこいつな」

「シナシナ！」

「えっと、どう契約しろと？」

「例のポルターガイストを使え。」

最も、まだ調整中で日本語版話せないみたいけれどもな。

高橋博士の研究に期待だな」

「これ、高橋博士（優樹のお爺）が作ってるのかよ」

「もつとも、自動人形を参考に行っているらしいけどもな」

「そんな訳で臨時話これで終了ー」

「ネタバレには成ってないから安心して待ってくれ。

今年中にもう一話上げるから待ってくれな」

第9003C 「公務員の意外なお仕事」

公安員の自宅待機中の時間を利用して社内の業務を行うのが最近の日常と化している。

一応、国家特殊公務員として職務に当たっているのだが、全くとして業務が来ない。勿論、校則でバイトが禁止されているのでこっちの方が平和的なのだ。

そんなある日の昼下がりに、確か土曜だったような気がする。

「行方不明者の捜索？そんなの地元警察の言ってくださいよ。」

わざわざ来てもらってあれですが」

客間に通してお茶を出して話を聞くが、これぐらいどうと言う事の無い事だと思っていた。

少なくともあの時までは……。

「あの、これを渡すようにと言われました」

そう言って出してきたのは重要と書かれた茶色の封筒だった。

中を開けると捜索打ち切り通知書と書かれた紙と特殊事案解決依頼書の二枚がはいっていた。

誘拐の可能性が低いと判断された場合は一週間後に行方不明者の捜索は打ち切られ、俺のような公安員や地元の自警団等に捜索がうけ渡される。

公安員だとしても地元の人に委託され、今回の様にわざわざ遠くまでくる必要のないはずである。

しかし、なぜ来たのが次の書類に書かれていた。

地元住民に聞いたところ下記の怪しい人物が共通して上がった。

すべての項目に目を通して頭の中で整理して浮かんでくる人物は約一名。

「八雲紫……」

自然と言葉が漏れる。

「知ってるのかそいつ」

机の向かいに座ってる依頼人……、そういえば名前を聞いてなかったな。

まあいい。

「まあ、知ってるっちゃ知ってるけど」

「つて言う事は俺、幻想入りできるのか!？」

……。

「あんな、お前は連れていけないぞ」

「はっ!? 何でだしー?」

「当たり前まえだろ。」

無駄に覚醒とかされたら困るし」

「えー」

「えーじゃない。」

取り敢えず、この搜索依頼書に必要な事項を書いて」

引き出しの中から4枚の書類を出す。

「え、これじゃだめなんですか？」

持ってきた書類を指す。

「あー、それは使用済みだから」

成程ね、搜索して欲しいのは上井和希、依頼者はその友人の武蔵関戸君ね。

「分かった、三日後に連絡するから」

書類に受領の印をつける。

「あれ、費用とかは？」

あ、それ聞いちゃう？

「それは任意だから。」

それ以外の質問は？」

「特にないっす」

「そう」

そう言ってお帰り頂いた。

しかし、最終目撃地点が諏訪学研都市となると。

「めんどくせ」

しかし、依頼を受けたからには実行しなければ成らない訳で、その翌日、俺は最終目撃地点の近くで聞き込みをしていた。

公安の腕章を付けているとはいえ、標準語と言うだけでやはり怪しまれてしまう。

「やっぱりここが怪しいか」

かつて佐藤優が幻想した時と同じ場所。

この場所だけ時空間の歪みがおかしな値を示している。

「やっぱり、”現実と幻想の結界”が大きいのかな」

時計草と空間の欠片を組み合わせたレリーフ、ここで使うとなるとはな。

「それじゃ、もう一回世界線を越えますかね」

僅かな空間の歪にレリーフを重ねドアノブのように回す。

世界線を越えるこの術式の代償が大きいから困るんだよね。

「まったく、幻想入りする人の度が増えることに世界が歪むのつてどうにか成らないのかねほんと。」

空間の裂け目の向こうは何時かの魔法の森、ではなく紅魔館は門番の上空……。

「まったく、悪魔のゲームはこりこりだったの!」

装備を呼び出していざ紅魔館の中に入る。

窓開けた瞬間に視界がモノクロになる。

咲夜の時止めに対してもいい加減成れたらしく、止まった時の中でも普通に動ける。

まあ、付けてる腕時計が動いている所を見る限り、俺だけの平行次元の中を動いているようになっているようだが。

足元にある魔方陣を発動させたところで視界が元に戻り、

「これ以上動くな」

の声と共にスペルカード構えた執事……。

写真で見た上井の姿があった。

「目的達成、後は連れ戻すのみ」

そう言うと同時に左手に短銃の”さざなみ”を呼び出す。
「何をする気だ？」

右手にスキルカードを用意すると、

『雷符 雷流放電』

詠唱、それと同時に左手の”さざなみ”にこめた煙球を撃つ。
漫画とかで見る煙の間に消える方法である。

第9103C 「地下鉄異変」

しかし、人一人を連れた状態で長距離を移動することは不可能であり、実際に移動してきたのは紅魔館の裏にあった地下構造物までであった。

「おい、これはどう言う事だ、説明しろ」

隣にいる上井が何か言っているようだが、どうやらそれどころでは無いようである。

「これ地下鉄の入り口か？」

周りに張つてある揭示物が昔みた地下鉄の駅に飾つてある物に似ている事に気づく。

「地下鉄って何だ？」

現代人とは思えない発言だぞそれ。

「とりあえず上井君、君にはこの異変が解決しだい元の世界に戻ってもらう」

取り敢えず今やらないといけない事を整理する。

1 霊夢よりも早くこの地下鉄異変を解決させる

2 異変が解決しだい上井を元の世界に戻す。

3 幻想郷に関する記憶の削除。

以上。

「よし、まず主犯を探さない」と

「おい、俺はすでに——」

何か上井が言っているが気にせず奥に進んでいく。

非常等が照らす改札の所は自動改札が並び、何時でも使える状況であることがうかがえる。

機能していない改札を抜け改札内になる場所に入る。

駅の装飾等も済んでいる。

まるで終電後の駅のようなのである。

第三軌条のトンネル、信号の脇にある打ち子式のATS地上子といえ

「ほんと、昭和時代の渋谷線だよな」

「ここ歩いていいのか？」

「不法建設だから問題ない」

「そういう問題なのかな？」

トンネルを進んで行くと明かりが見える。

どうやら此処に誰かがいるのが確かのようにだった。

しかし、響き渡るこの振動音。

一定の間隔に響く打ち子の音。

「来るな」

「何が？」

次の瞬間旧東京高速鉄道1000系がこっちに来る見える。

すぐ横にある対向用の信号機にさざなみからエネルギー弾を撃ち信号を赤にする。

打ち子が車両に付いている非常コックにあたり列車は非常停止する。

当然ながら俺が小銃を扱っていると柱の隙間から見えているはずなので、当然

中から人が出てくる訳で。

「誰よ私の定時運行を邪魔するものは」

後ろに止まっている車両が消え、そこにいるのは着物を着た女性。

俺の左手に持っている小銃を見るなり呆れて顔して、

「まったく、将校さんはおおあきですわ」

そう言つて弾幕を展開する。

「俺、まだ弾幕ごっことか成れてないんですけど!？」

そう言つて上井が柱の陰に隠れるのが見える。

「まったく、若いやつって言うのはどいつもこいつもツ！」

弾幕を展開しながらある程度の距離を取りたかったが、後ろが壁でこれ以上下がれない。
い。

「ふん、若いのは貴方も同じですわ、自分の置かれている状況も分からないまま戦いを使用なんて」

しかし、俺はこの状況を逆手に利用し、後ろの壁に結界用と攻撃用の二種類のお札を
はりすぐさま移動を開始する。

「ほんと、相手が悪かったよな」

そう呟くと同時に立体的に五芒星の配置に置いた術式を発動する。

「え、もうしかして瞬殺ですよ!？」

敵があわててスペルカード出せているがそんなのを無視する。

『印符 二重五芒星封印』

敵を無効化した上で話を聞く。

「つええ」

上井の声が聞こえた気がしたけれども無視する。

「さてと、この地下鉄異変の主犯は誰だ?」

左手に持った小銃を向け質問をする。

「ふん、教えるものですか」

どうやら自分が置かれている状況が理解できていないみたいだな。

威力を調整にして小銃からエネルギー弾を撃つ。

次の瞬間、後ろの壁に小さな穴があいた。

「もう一度聞く、主犯は誰だ」

「ツ、人里にいる田原マチ姉様よ」

「そう」

取り合えず封印はそのままにしてその場所を後にする。

— 2 —

幻想郷の中でも一番大きいとされる人里。

その外れに”幻想地下鉄道社屋”の看板を掛けている小さな小屋がある。

「まったく、講習は受けたがまさか使うことになるとはな」

上井の方には、万が一応援が来た時には逃げるように伝え、さざなみを構えて中に入る。

「その場から動くな」

さざなみを中に向けながら邪気眼に明るさ補正の術式を掛ける。

扉に人避けの術式を貼り付け中に進む。

「外見と内装が一致しない。

何か術式が——」

次の瞬間、後頭部に銃口が突きつけられる。

「あらあら、迷宮にしておいたつもりだったのだけれども、連れが元に戻したようね」

微かに感じる上井の霊力。

まさか、アイツ！

「変に動く撃つわよ？」

いくら防弾術式を用意しているとはいえ零距离は流石に堪えるでしょ？」

「それはどうかな？」

後ろに自動操縦の指示を付与したあやめとしおさいを召還する。

「何のつもりかしら？」カチャリ

引き金を引く音がする。

「(一)こういう事だよ」

よと言うのと同時にしおさいに発砲指示を出す。

能力でデジタル無線と同じ波長を出すことで遠隔操作が可能だと気づいたのさ前日の事だった。

その夜に妨害対策にデジタル無線の送受信機を取り付けて置いたが、まさか、こんな早くに使うハメになるとは。

サイレンサーの機能が動作しているあやめを介して発砲されているエネルギー弾は気付かれずに当たるはずだが、いざ発射してみるとすぐに避けられた。

勿論、このままでは俺に当たるので俺も避け、手に持っているさざなみを構える。

「さてと、お互いこれで王手だがどうする?」

全員の位置関係を確認した上で、しおさいの横に奴さんを召還する。

「先手必勝!」

ほの一声と同時に俺の能力としおさいから弾幕を展開する。

「させないわよ『遺構 仮止めの万世橋』」

弾幕が複雑に絡み合い、お互いに交わしずらくなる。

しかし、そのような光景を見ていた上井が以外な一手を出すとは、この時は考えてなかった。

第9203C 「自分を主軸とさせる程度の能力(?)」

「妹様に教えてもらったスペル使ってみるか『禁忌 狂いし現実』」

次の瞬間、俺の力に外から大きな力に押さえつけられ、一切能力が使えなくなる。それどころか、霊力すら生成できなくなる。

「つち結界維持すら出来ねえ」

上井が俺のほうを見て言う。

「お前には銃があるだろうが」

戦えない訳では無いけど、能力の援助無しだときちんと当てられる自信がない。

「まあいい、使ってみるか。」

椎名援助を頼む」

そう言うとかバンの中から椎名が顔を出てきてさざなみに演算情報を入力してくる。

「ふん、紅魔の執事をなめるな『伝授 スカーレットバレット』」

お約束のどこからか出したが謎な赤く染められたナイフが相手めがけて飛んでいく。

「椎名、まだか」

あまりの仕事の遅さに少しばかりしかいらだちが出てくる。

「マスターの能力の援助ないので携帯演算機で計算してるんです！
もう少し待ってください。

あ、能力無効化は後で計算しますから！

取り合えず空間演算終了です。

支援情報入力しました」

確かにマニュアルになってる。

「(苦勞)

取り合えず後は、弾丸設定を変えて。

狙うはやはり上にある照明。

「出力95%、発射」

今、入っているすべての球を発射する。

「我が身二近イシカヲモイチイテコノシウチヲタイシヨスル。

誓イシ神ヨ我ニカヲカシヨ『古文 神使契約』」

よし、力は戻ったな。

『雷砲 直流電磁誘導砲』
サングラスパーク

「これで、異変は解決つと。

よし、博麗神社に行くぞ。

4課に削除される間に戻らないとやばいぞ」

上井の腕を引っ張りながら博麗神社に向けて飛び立つ。

「さて、空は飛び慣れてないんだ」

上井が飛行魔術を展開しながら文句を言う。

「一時的なモノだったらそれで十分、後で忘れるよ」

しかし、すぐ後ろから殺気を感じ取る。

「おい、冗談だろ」

足元に結界をはり、飛行術の使用を止め足をつける。

その直後、俺の顔を目がけてナイフが飛んでくる。

「ストップ・アンド・リバーズ」

結界に触れたナイフはそのまま力の向きが反転し、投げた人の方に戻っていく。

「さすがに効かないわね。」

まあいいわ、お嬢様が選んだ貴重な執事、こんなところで奪われてたまりますか『秘儀 殺人ドール』

全くめんどくさい。

『風流剣 瞳風雷』

さてと、時間を稼いでいる間に逃げますかね。

「させると思う?」

貴方の逃げようとするその時間も私のもの『幻世 ザワールド』
「お前にかまつてる暇なんてないんだっつもの! 『雷砲 直流電磁誘導砲』
ザワールド』
直流電磁誘導砲』

「!？」

時が元に戻ると同時に博麗神社の鳥居のそばまで来ていた。
「あとは結界を開いて帰るまで」

一人だけであれば座標移動で済むんだけどもな。

「あれ、開けね。」

おい、博麗居るんだろ」

母屋のほうに向かい博麗がいるであろう居間に向かうと。

「おなか空いた……」

行き倒れて上がる。

「はあ、博麗野沢^{1000円}やるから飯食つてこい。

その代わりに結界緩めろ」

ちやぶ台の上に野沢さんを置いて母屋を離れる。

「取り合えず、戻り次第警察署だな」

結界を人の通れるサイズに広げたくうえで時空のレリーフを使い元の場所に戻る。

第9303C「宴会」

現代に戻ってから上井を見ると半透明に透けていた。

つまり公安4課が仕事をした後であった。

一応、依頼人に確認の電話をしても、そのような人物は知らないとの回答が来た。と言うか、警察に通報するとか言われたが。

取り合えず紅魔の連中に謝る顔がないので築地に行きマグロを一本を、新小岩でマグロを入手し再び幻想郷に戻った。

ちなみにこの時、我孫子の唐揚げ二個入りのそばも一緒に持っていた。

あらかじめ器を用意して置き、中身をそのまま移動させたものであったが。

博麗に餌付・・・通行料を渡し幻想郷に向かう。

「ま、無事幻想入りで出来てみたいだから上井は返すや」

取り合えず上井は引き渡すが、そのまま帰れるわけがなく後ろからレミリアの殺気を感ずる。

「勿論、謝罪の品は持ってきたぞ築地産のマグロと・・・、新小岩産のマグロ。」

ほらな」

咲夜に築地産のマグロを渡し、フランとレミリアに新小岩産のマグロを渡す。

「マグロと言う魚を捌くの初めてなので捌き方を教えてくれるかしら？」

咲夜が尻尾を持って聞いてくる。

と言うか、俺も捌けないんだけれどもな。

「魂魄とかそこら辺が捌けそうな気がするんだが」

完全なるとぼつちりだけでも。

と言うかこの世界の魂魄はきちん和白玉楼にいるのだろうか。

「それじゃ、上井魂魄を連れてきて。

勿論、珍しい魚が手に入ったから宴会すると言って」

そう言う和白玉楼への地図を渡し何かを言っている。

と言うかその地図、地上の地図ですやん。

「おい坂上、空の飛び方を教えてくれ。

てか、ついて来てくれ」

そう言うて外に連れ出される。

上井に空の飛び方を教える事10分。

何とか普通に飛べるようになったので白玉楼に向かつて飛行を始める。

勿論風流剣は構えておく。

いきなり切りつけられても困るし。

一応結界は常時展開できるようにしてるけど。

冥界に入るなりや地面に体をぶつけそうになる。

「痛」

どうやら上井は止り切れずにぶつかっただけらしい。

「それじゃ、この長い階段の途中にいるはずだから……」

ま、飛んでいきましよう」

そう言つて再び飛行を開始する。

— 3 —

あの後勿論、魂魄との戦闘になったが無事に連れてくる事に成功し、地下鉄異変の解決祝いと上井の迎えとして手渡したマグロを丸ごと一尾使った盛大な宴会が開かれた。

「あのマグロー億近くしたな」

幻想郷のお金と現代のお金をトレードしまくりそのお金を稼いだ訳である・・・。
当然ながら酒を勧められたがきちんと断る。

酒は当分飲みたくない。

それに、異変解決はしたが宴会の主役ではないし。

この後の予定もあつたし。

そんな訳で適当な時間にお暇し元の世界に戻ってきた。

上井については、向こうの紫が記憶を消すと言っていたが失敗したのでやむを得ず記憶を思い出せなくしたとのことだった。